
魔法少女リリカルなのは -Diamond dust-

秋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—

【Nコード】

N6649W

【作者名】

秋色

【あらすじ】

ミッド式の魔導士、ミズキ・ナカジマは管理局入局から一年、候補生時代を経て、航行艦勤務を言い渡された。勤務初日、大きな次元震を確認した『アースラ』は、第97管理外世界へ向かう――

普通の小学三年生だった少女、高町なのははある日『魔法』という奇跡と出会う。様々な出会いの中、一人の少女に運命を感じた――

これは、そんな二人の物語。

※ 指摘がありましたので、試験的に一話のみ行間を開けて書いてみました。こちらの方がよいという読者様が多数いるなら、すべてこちらで統一しようと思います。

読んでみて、こちらの方がいいって方は、お手数ですが感想ページにお書きくださるとありがたいです。

第1話 それは、天使の囁きだった。

この、広い次元の中には、幾万、幾億の人たちがいる。皆それぞれ、願いや想いを胸に日々を暮らしていて、その想いは時に触れ合って、時にぶつかり合って。けれど、その中のいくつかは繋がって、伝え合っていていける。

これから始まるのは、そんな——出会いと触れ合いの話。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第1話 それは、天使の囁きだった。

「損害を報告します！」

息絶え絶えとなって本部へ駆け込んできた男は、組織でも古参として数えられる人物の一人だった。普段は物腰柔らかく、すべてに達観したような態度を保つおじさんというイメージなのだが、今日ばかりはそんな印象は『なり』を潜め、慌てた様子が視線をやらすとも伺えた。

ゴオン、ゴンと。彼が息を切らせてやって来ようと、止まることなく響き続けるいくつもの轟音は、管理局地上部隊の砲撃魔法によるものだった。その一音毎に仲間は飛ばされ、戦場に悲鳴が木霊す

る間もなく、鎮圧されていた。

戦闘を開始した当初は、間違いなく優勢はこちらにあったはずだ。少なくとも、こっちはそう聞かされていた。……もっとも、こんな大規模テロ作戦に何の関心もなかったから、もしかしたら聞き間違いだっただのかもしれないが。

理想を語りすぎるがあまり、話が本筋から離脱しやすい■の口上は、どうも聞く気が失せてしまうからいけない。現状の管理局の態勢はあだとか、もつとこうするべきだとか、つまりは我々が立ち上がるべきなのだとか。耳にたこが出来るほど聞いた言葉ばかりだ。聞き漏らしがあって、しかるべきだろう。

身寄りも、ツテもなく。たった一人放り出された第一管理世界。

■に会わなければ、間違いなく飢えて死んでいた。衣食住と引き換えに要求されたのはゲリラとして戦う事だったが、正直な話、自分に出来る事はそれくらいしかなかったから願ったり叶ったりの条件だった。

才能に乏しいとはいえ、元々魔法は使える。その為に産み落とされたといっても過言ない存在だ。デバイスさえあれば、戦う事に何の支障もない。ゲリラに参加する意を伝えると、■は喜んで食糧と住居を用意してくれた。半端だが魔導士だと告げれば、ストレージデバイスも用意してくれた。二年前、五歳の時の話だ。まだまだ覚束無い言葉遣いであったが、■にはキッチンと要点が伝わった。

あれから、俺は数々の作戦を実行した。大局的に見れば、管理局が被る損害などあってないようなものばかりだったが、一途に、忠実に遂行していった。衣食住の条件であったから。なにより、■の力になりたかったから。

しかし、もう終わりだ。直感的にだが、俺たちの組織の破滅を感じる。壊滅する寸前の基地特有の匂い。甘美なる、死の香り。それは今まで、幾度となく嗅いできたものだった。

「軽傷者五十七名！ 重傷者は四〇名！ 残存兵は残りわずかです！」

再びの爆音。

今度は、さっきよりも近くからだ。時間がないという事実が、現実味を帯びてくる。音と音の間隔が、段々と短くなる。

「■■■」

円陣を組む部下たちの中心で、眉間にしわを寄せる組織のリーダーに声をかけた。

■■■とは名前ではなく、彼の故郷である世界で『父親』という意味がある言葉らしい。自分の事はこう呼べ、と契約をした時に言われ、以来そう呼んでいる。

■■■が振り返るよりも早く、魔力をデバイスへ注ぐ。デバイスが輝き、実際の大きさまでその形を変えると、今度はバリアジャケットが展開された。

俺のバリアジャケットは、管理局員の正装と酷似している。黒を基調とした、スーツよりの服だ。イメージを考えるのが面倒だったため、■■■に出会うよりも幼い頃見た管理局員をイメージした。面倒くさかったから以外に理由はない。

魔法使いの戦闘装束であるバリアジャケットは、優れた耐久性を持つ。見た目は個々人の創造により決定されるのだが、どのような形を作ろうと、それぞれの魔力に見合った防御力を孕むため、生半可な鎧などよりもよっぽど生存確率が上昇する。面倒くさかったけれど、作った理由はそれだ。

「俺も行きます。指示を」

冷静に、ちよつと用を足してきますとでも言わんばかりの態度に、
■■■は見たのだろう。少なからずの驚きが、瞳に浮かんでいるのがわかった。

実際、俺にとって用を足す事と作戦を実行する事に差異はないので当然。しばしば、仲間から変わっていると言われる部分が出てしまっていたらしい。どこがどう『変わっている』のか、本人にはさっぱりだ。

「……待機だといったろう」

「ええ。けれど、現状打破が見込めない以上、出るしかないと考えました」

どうせ、俺が出ても戦況は変わらない。

魔導士ではあるが、同時に半端者でもある。

管理局の一般魔導士相手、それも一対一という条件込みでなら、奇策を弄して勝利を我が物に出来るものの、二人以上となると無理。そんな俺が、この状況で行って生き残れるとは思えない。■■■

は、その事が気がかりなのだろう。こんな拾い物である俺に、愛着が湧いているのは知っていたが、自分が生き残るための判断に躊躇すべきでない。

「とりあえず、残存の部隊と合流して足止めを掛けます。五分は稼げらと思うので、その隙に」

「馬鹿をいうな！」

突然出された声に、身体が一步分のけぞった。久しぶりに、■■■■の叫びを聞いた気がする。啞然とする俺に対して、■■■■は続けた。さっきの音量に比べ、何段階も小さな音。そこに、彼の感情が伺えた。

「お前は……まだ幼い」

だからなんだというのだろう。

組織の中で一番年齢が幼いのは確かだが、戦闘技術は低くない。そんな俺が戦線に出ないわけにもいかないはずだ。

「きつと、お前ならそういうだろうとわかっていた。だから待機命令を出していた」

「戦力を出し惜しみしては問題になりません」

「……わかっている。だが、俺には決断できない。我々はもう終わりだ。管理局も、ただの馬鹿ではなかったというわけだ」

さっき仲間が運んできた情報が、俺の中で疼いた。

今、敵の総大将はあの『ゼスト・グランガイツ』だという話だった。こんな偏狭の土地まで名を馳せる、有名なストライカー。魔導士ランクS+である彼の従える軍は、個人の技量でも魔導士ランクA以上の人材ばかりという噂もある。年齢に見合わないとはいえ、俺の能力は決して高くはないことは先刻改めて自覚したばかりだ。無謀な挑戦だということはわかっている。時間稼ぎにすらならないだろう。

けれど、

「敵が強ければ強いほど、助かる道は閉ざされます。俺にはもう、退路が残されていないのです」

そう。結局、優秀な魔導士から逃げられるのは、同程度かそれ以上の技量を持つ魔導士のみ。俺程度では、高名なストライカーに背を向けた瞬間、ズドン、だ。

「……そうか」

「はい」

■■の躊躇する気持ちはわからないが、葛藤しているのは様子は見てわかる。あと二分。何も言われなければ、出撃しよう。直立不動の姿勢のまま、決断した。と、

「出撃許可を出す。しかし、作戦・命令はない。個人の裁量で全て決めよ」

自身の中で時間を設けた途端、■■は命令を下した。時間設定は

無意味になったようだが、まあいい。右手で敬礼のポーズを作って応えた。

「はっ」

「……以上だ。最後に一言、『生きる』」

生きる。

それが、■■■の最後の命令だった。ならば、実行しなければなら
ないのだろうか。これも、作戦なのならば。

「了解です」

応え、振り返り、戦火迸る中へ身を滑らせる。

最後に見た■■■の表情は、悲しげな青色だった。

？新暦65年 時空管理局巡航八番艦アースラ？

アースラ艦内はとても綺麗なものだった。無駄に広い廊下は薄暗
いが、掃除の手が細部まで行き届いているのがよくわかる。隣を歩

くクロノにとっては当然の事のようにだが、最近は部屋が汚くなってきた俺にとって、この清潔さを維持している現状は素晴らしい。金さえあればアースラの清掃員を雇ってみたいものだ。

そんな事を頭の片隅で考えつつ、ふと、隣を歩くキザな男に目をやった。

クロノ・ハラオウン。

黒髪で、聡明な顔つき。青年とはいいがたい容姿だが、さりとして少年と断言するには大人びている。若干十四歳にして、アースラ所屬の執務官。執務官暦は三年目で、魔導士ランク総合A A A +。時空管理局の将来を担うとされるエースだ。

「……何を熱心に僕の顔を見ているんだ。気持ち悪い」

「いやいや、とりあえずクロノ君の自己紹介をとでも思っ」

「意味がわからん」

クロノは照れてしまったらしい。頬を赤く染めやしないなんて、極度のツンデレのようだ。これも自己紹介に加えよう。

「……やはり、失礼な事を考えているだろう？」

「ぜんぜん。クロノはイケメンで優秀なツンデレだと紹介を終えたところだ」

「誰にだ！　　というか、ツンデレってなんだ！」

そういうところがツンデレなんだよなー。……デレ期？　いつか来るさ。もっとも、俺に対象を向けなくて欲しいが。

「まったく、相変わらずだなお前は」

「なんか、最近そんな感じだな。二年前はもっとぴりぴりしてたけど」

呆れ顔で言うクロノに適当な言葉で返したが、うん。今思い起こせば、二年以上前の俺って面白みのない奴だったんだってわかる。当時の仲間から変わり者だと評されていた理由も理解できた。

けれど、それも当然なのではないだろうか。物心ついて少しって時に、一人第一管理世界っていう荒野に投げ出されたんだぜ？　楽しい事とか、面白い事とか、そんな事よりも色々、必死だったのだから。

「もう、過ぎた事だ。あまり昔を思い出すな」

クロノはなんだかんだ言うが根は優しい。この言葉も、俺を心配してのものだった。

けれど、正直な話、昔の事は昔の事だと割り切ってる。いらぬ心配ではないし嬉しいことだが、クロノは少し過敏すぎるのがいい。

手をひらひらと振って「気にしてねーよ」とアピールをした。

「気にしてないって、いつも言ってるじゃん。今は一介の、管理局員だし」

「一介の、か。魔導士ランク空戦A+で？ 九歳でそれだけでできれば言う事なしだぞ」

「ありがと。でも、その程度だ。俺はクロノみたいな天才じゃないし、ランクだって『こすい』手を使ってやっそこさのそれだ」

『こすい』手。それは、レアスキル補正の事を指す。これがなければ、試験合格は無理だったに相違ない。

レアスキル。それは、個々人の持っている稀少技能の事だ。持っていることも稀な上、その能力のほとんどは異端であり、裏技じみた効果ばかり。実際、レアスキル保持の魔導士たちは皆曲者ぞろいだという。

レアスキル保持イコール、優秀な魔導士であるという固定観念はそういった紛れもない事実から来ている。だからこそ、試験もレアスキル保持者には少々甘めな採点をされる。管理局を第三者的に見れば、いてもまったく困らない上、犯罪者に身を落とされてはたまったものでないという極めて打算的な感情が伺える。

とはいえ、俺が持っているそれは、そんな化物じみた類のものではない。本当『へえ』って頷かれるだけで終わるような能力だ。逆に『それしか出来ないの？』とも聞かれそうだし。

ま、そんなことよりもだ。

「つーかまじ、あー、急に緊張してきた」

そう、久方ぶりのこの緊張感。つい最近だと、やっぱり一年前、

候補生として部隊に配属された時と同等かそれ以上に、心臓の鼓動が早まる。

「おいおい、リンディ提督とは何度も顔を合わせてるだろ」

「リンディさんは別。入局二年で、候補生終了と同時に移動だ。あらゆる意味で、色々初めてなんだよ」

「慣れろ」

クロノはしれっと言うけど、緊張してしかるべきだと俺は思う。

候補生時代世話になった空隊は初日からアットホームな雰囲気だったし、何より俺自身が変わり者だったせいで緊張とか無縁だった。今となっては、こういう時だけ一年前の自分に戻りたいって思うほど、緊張しいになってしまったのが悔やまれる。

……ま、嫌な変化じゃないんだけどな。

「もう少し髪切ったほうが良かったかな？」

少し長いかな、と自分でも思う前髪を弄ぶ。それを見てか、クロノは快活に笑った。

「はは、それには同意だ。長すぎる事はないが、清潔さを保つのは大事だ」

適当な話題は事欠かない。

それは俺とクロノの友達としての相性の良さを表している。戦闘

面とかだと、相性はきつと最悪なんだろうなと思いつつ、歩きながら雑談を続ける。

魔導士としてクロノが万能型イケメン性能を誇るのに対し、俺は突出型ただし突出しきれていない性能。結果、タッグだと攻撃のメインをクロノに任せるしかなく、そうなってしまくと、クロノが『自己で出来る範囲の補助に叶わない補助』しか出来ない。なんというか、散々である。こいつとだけは戦闘面において、絶対に協力したくない。主に俺が恥かしくなる意味で。

「でだ。アースラ勤務、自信の程はどうだ」

それは、他愛ない会話からの派生。鼻の頭をぽりぽりと掻きながら答えた。

「まあまあ、かな。誠意一杯やるつもりだ」

「ミズキは嘘をつかないからな。なるほど、それなら安心だ」

一人頷くクロノの隣で、若干の不安を覚えた。

アースラでの俺の仕事。三等空士である俺にまともな仕事は回らないだろうし、雑用がいいところって当たりはつけている。デスクワークは自信ないし、主に戦闘面でのって所が妥当か。遠くからこそこそバインドかけたり、囮になったり。

……めっちゃ、そんな役回りだな。結局、いいところはクロノが奪うんだろうし。

「――さて、着いたぞ」

話を途中で切り上げたかと思って眼前を見ると、どうやら目的地に着いたらしい。

クロノの正面にあった自動ドアは静かに駆動して廊下と内部屋を繋げた。広まる視界。思わずとも、急な照明に目を細めた。

「あ、来た来た」

室内で最も高い位置にある大きな椅子に腰掛けていた女性――リンディ・ハラウンが、立ち上がって笑顔を向けた。

「ナカジマ三等空士をお連れしました、艦長」

「ええ。ご苦労だったわね、クロノ」

カツカツと、リンディさんの靴と地面があたる音が室内に響く。俺の正面に立ったリンディさんはやさしく微笑みかけて、半歩身体をずらした。

視界に映ったのはアースラ司令室の光景と、働く職員の姿。皆、俺に注目している。

それが自己紹介を進めていることはわかった。

あー、やっぱり緊張する。

知らずに伸びる背筋。大きく深呼吸して、右の掌を伸ばす。それは、敬礼のポーズを形作る。

「本日より、次元航行艦『アースラ』勤務となりました、ミズキ・ナカジマ三等空士であります！ よ、よろしく願います！」

にこりと、リンディさんが微笑んだかと思うと、艦内から拍手が巻き起こった。

よかった、ちゃんと出来た。

安心して息をついていると、リンディさんが右手をゆつくりと差し出す。数秒して握手だと気づき、慌ててその手をとった。

「ようこそアースラへ。職員一同、歓迎するわ。よろしくね、ミズキ君」

「はい！」

その時、艦内で小さなアラーム音が起きたのと同時に、中央のモニタの前に腰をかけていた女性——エイミー・リミエッタと言うらしい——が、カタカタとキイを叩き始めた。

「大規模な次元震を確認！ 場所は……第97管理外世界、地球です！」

「早速ね。それじゃあ、ミズキ君。勤務初日からだけど、期待しているわ」

「了解であります！」

再び敬礼。リンディさんはニコリと微笑むと、艦長席についた。

「ではこれより、アースラは出動します。目標は観測地点である第97管理外世界地球、海鳴市」

その言葉を聞き終えると、職員は皆画面に向き直り配置についた。どうすればいいのかわからず立ち尽くす俺に、クロノが「こっちだ」と声をかけた。

「君は追加戦闘要員だし、とりあえず目標地点に着くまでは準備しているといい」

丁度リンディの後ろに控える形で、俺とクロノは並び立つ。新人が調子こくなよと思われないかな……

そんな感情を見透かしてか、クロノが笑った。リンディさんも気付いたのか、ちらりと俺に目をやると、口元をほころばせた。

少しの不安と、同等の高揚感。

二年前とは違う、確かな感情の浮き上がりを感ずる。

揺れる身体。それは、アースラの移動を確信させた。

第1話 それは、天使の囁きだった。（後書き）

ということで、はじめました魔法少女リリカルなのはのSS。
ありきたりなオリ主介入モノにならないよう、誠心誠意頑張りたいと思います。

第2話 三人の運命は、此処が始まりだった。

出会うべくして出会った私たち。運命の出会いと比喻されてもおかしくない邂逅。互いの想いは別々だけれど、それをわかってもらうために、私たちは杖を取った。

唯一つの大切を胸に、対峙する。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第2話 三人の運命は、此処が始まりだった。

ふとした瞬間、夢は覚めた。

瞼を押し上げて、最初に視覚したものは見慣れない天井。

そこが、アースラで俺にあてがわれた部屋であることに気付くまで三秒。第97管理外世界まではこの船内時間軸であと1日はかかるので、部屋で待機しろとの命令を思い出すまでに二秒。さっきまで見ていた夢が、つい一月前のことだったと判明するまで三秒。計八秒、俺は意識ままならない状態で天井を見上げていた。

アースラへの勤務が決まった翌日の夢だ。あの時は色々大変だったんだよな。

とと、起きないとな。

感慨深くなりそうだった思考をふるって、身体を起こした。瞬間、ノックの音が部屋に響いた。

「ミズキ、そろそろ到着だ」

開くドア。間髪おかず、クロノがその顔を現した。

「……とりあえず一言いいか？」

「なんだ」

「ノックしたんならせめて少しは待てよ」

「……別に、お前はそんな事気にする奴じゃないだろ」

確かに。

頷いてベッドから降りると、すぐに टीーシャツ を変えて制服に身を包んだ。出撃するならば バリアジャケット を着ることになるわけだが、まあ最低限の節度だ。

着替えが終わるのを待っていたらしいクロノは、鏡の前で服装を整える俺に「準備できたか？」と声をかけてきた。

「ああ。んじゃ、行きますか」

二人で廊下へ出て、管制室までの道を進む。

道すがら、クロノがあきれたと、深い嘆息を吐き出した。

「ため息ばっかついてると幸せ逃げるぞ？」

「普通に考えて、上官である僕が君を呼びに行くのはどうかと思っただけだ」

「気にするな。立場的にどうであれ、クロノが俺の舎弟であることに変わりはない」

「変わりあるぞっ？　　というか、舎弟になった覚えなどない！」

「クロノの評価。怒りやすいところが玉に瑕」

「それは査定！」

「コーヒーに入れるもの」

「砂糖！　　というか、すでに一文字も原型をとどめていないぞ！

せめてもっとうまくしろ！」

むむ、適当に返そうと思ってみたものの、こういうやり取りって結構難しい。

そんなコントまがいな会話について考えていた最中、ふとクロノが思い出したように「ああ、そういえば」と呟いた。

「使える魔法？」

「ああ。ミズキがミッド式ってことはわかってるし、レアスキルに

についても知ってる。ただ、どういった系統が得意なのかとか、知っておいて損はないはずだ。これから、コンビを組むかもしれないしな」

なるほど、それは一理あることだった。

俺はクロノほど有名人ではないし、候補生時代は当たり前のように、実戦へ出ても個人プレイなど許してもらえなかった。その為、俺の戦闘スタイルなんかはある意味謎に包まれているといったいい。「ミドルレンジ、かな。砲撃を連発できるほどの魔力量はないし。使える長距離砲撃なんて、ディバインバスターにスターライトブレイカーぐらいだしなあ」

今あげた二つ、どちらにせよ、術式自体はたやすい魔法だ。前者なんて砲撃魔法の代表例みたいなもんだし、スターライトブレイカーは少ない魔力量を補うために覚えたある意味切り札。戦闘の初っ端からは使えない上、詠唱に時間かかるからあまり実戦向きではない。

「後はシュートバレット、ヴァリアブルバレットに、防御魔法をいくつか。バインドはチェーンのみだな」

指折り、使える呪文を数えていった。シュートバレットもヴァリアブルバレットも、どちらも魔力を圧縮して直射に放つ基本魔法だ。通常時俺のメインとなる魔法で、集中度合いによっては中々の速度で攻撃が可能となる。

防御系統は普通にタイプ別に一つずつ習得してる。フィールドタイプに関してはもう一つ練習中のものもあるけど……ここら辺で、俺の器用貧乏ぶりが伺えるってもんだな。本当、レアスキルがないと魔導士ランク相当の働きなんて出来やしない。

なんて、レアスキルを用いたところで、実質の魔導士ランクはAってところか。

「ふむ……」

「どうっすか、クロノ的に、俺の戦力は」

クロノは思案した顔で顎に手を当てた。そうこうしていても、俺

たちの足はとも進んでいる。自動ドアの前で二人立ち止まり、開くと中へ。軽い会釈の後、二人して艦長の後ろに並び立った。

「悪くはない」

「へ？」

まさかあの話題がまだ続いているとは思ってなくて、ここで続きを話された事に驚いた。

クロノの方はいたって真面目に、俺の使用できる魔法について考察してくれていたようだ。

「悪くないといった。君は自分の事を卑下して話しすぎるのもいけない。十分な戦力になると、僕は思うぞ」

「あ、ああ。サンキュ」

クロノにこうやってほめられると、なんか照れる。ついに来たかデレ期。嬉しくはないが。

「あらあら、二人して何の話？」

続いて、リンディさんが笑顔で振り返って話しに参入してくる。

……もうすぐ海鳴につくだろうに、こんなのでいいのかなって不安に思う。

「大丈夫よ。この船が97管理外世界へ行くまでに次元が、そのまま時間間隔を狂わせているだけ。私たちは向こうからしたらまだ、一日と旅をしていないことになってるの」

いまいち良くわからない説明だったが、クロノが噛み砕いて説明してくれた。要するに、こっちでの一日と目的地の一日の時間の経ち具合に結構な差があるらしい。理論はわからないが、そうだというのだからそうなのだろう。

「——とはいえ、もう着くわ」

途端、リンディさんとクロノ。そしてエイミィさんたち職員の時つきまでもが険しくなった。その理由は、鈍い俺でもすぐに察しがついた。

感じるのだ。強い魔力どうしのぶつかり合いを。ディスプレイの前に座る男性職員の一人が、適切に状況を説明をはじめた。

「現地では、すでに二者による戦闘が開始されている模様です」

魔力の扱いにいくらか長けたものならばわかって当然の事実だったが、職員全員がそういうわけでもない。管理局員が全て魔導士であるというわけでないからだ。また、魔力のぶつかり合いを感じていた俺としても、それが魔導士同士のものによるかどうかの判別はついていなかった。だからこの情報は、アースラにとって非常に有意義なものだ。

「中心となっているロストログアのクラスはA＋。動作不安定ですが、無差別攻撃の特性を見せております」

次いで、モニタに映し出されたのは大木が暴れている、絵的にとてもシュールな映像だった。これはつい最近にこの管理外世界で起こったロストログアの暴走。空間に残ったわずかな魔力に内包された記憶を再生しているのだ。

A＋。ロストログアという括りの中ではそれほどでもないクラスだが、俺目線で考えればそれは十分に強大な存在だ。

「次元干渉型の禁忌分泌……。回収を急がないといけないわね」

リンディさんが告げ、立ち上がった。

確かに、このロストログアは、それ自身による被害ではなく、あくまで他の媒体を用いての破壊活動が主。管理外世界であるこの平和を保つ意味で、もっとも危ないタイプだ。

「クロノ・ハラオウン執務官。ミズキ・ナカジマ三等空士。出られる？」

来た。出勤要請だ。

クロノはリンディに向き直り、クールに口を開いた。

「転移座標の特定は出来てます。命令があればいつでも」

「こちらでも今、完了致しましたっ」

クロノが答え終わったその瞬間に、俺も転移座標の特定に成功。ぎりぎりだった。やはり、クロノとの差は歴然だったらしい。転移座標の特定なんて精密さを伴う仕事を、すでに終わらせていたとは。「それでは二人とも、これより現地での戦闘行動の停止と、ロスト

ロギアの回収。両名からの事情聴取を」

「了解です、艦長」

クロノは規律の姿勢のまま、俺は敬礼のポーズを取って答える。
リンディさんは、真剣な表情を崩さぬまま頷いた。

クロノに続き、転送ポートまで行こうとしたが「待て」とそのクロノに止められた。やはり、まだ早いから待機ってことかと思ったが、どうやら違ったみたいだ。

「君はとりあえず、バリアジャケットを展開したまえ」

「あ、そういえば」

クロノは元々バリアジャケットを脱ぐ事がないためそのままだが、俺はデバイスすらもストレージしたままであったことに、いまさらながら気がついた。

恥かしさを隠すように咳払いをして、ブレスレットに珠としてストレージされている俺のデバイス——スカイラインに魔力を通した。
「スカイライン、セットアップ——！」

その言葉が鍵となり、俺の身体を包み込むようにバリアジャケットが展開された。

青を基調とした肌に密着するボディースーツをベースとして、白い長袖の上着をに足元まであるこれまた白いマント。手は指先のない、黒のハンドウォーマー。ズボンはこちらとだけダボダボで、足元まで達しそうな感じの白いパンツだ。

最後に俺の手元へやって来た杖——スカイラインを握り締めて完了。スカイラインは、純白の取って部分に、尾とシャフトの部分は青く、コアとなる水晶の部分も綺麗な青色だ。

《セットアップ完了ですマイマスター》

無機質な女性AIの音声が聞こえると、今まで黙っていたクロノがおもいつきり嘆息した。

「相変わらず、無駄にこったデザインだな、ミズキのは」

「妹たちの考えたデザインばかりにすんなよ。それより、急ごうぜ」
「わかってる」

苦笑したクロノだが、すぐに真剣な表情を作って転送ゲートに立った。俺も、それに並び立つ。さあ、いくぞ！ と、意気込みを構えたところでリンディさんが一言。

「気をつけてね」

ハンカチを振りながら、おつかい頑張ってくださいと小さな子に言うようなリンディさんの態度に、俺は思わずがくつ、となった。

クロノはなれているらしく、ぎこちないながらもきちんとそれに答えた。

「はい、行ってきます……」

この時、あまりクロノが職場で母親の話に触れたがらない気持ちが少しわかった気がした。

と、おふぎはここまで。ここからは仕事、それもかなり重要で難度の高いものだ。

クロノと頷きあって、同時に目を瞑った。

転送座標をイメージする。転送魔法式についてはゲートが、使用魔力はアースラがデバイスのように代替してくれているため、座標イメージのみでオーケーだ。

足元にミッドの魔方阵を展開。隣で、クロノの雰囲気なくなつた。おそらくもう飛んだのだろう。

かといって、焦るわけにはいかない。座標を間違えれば、結構大変な事になるし。

そうこうしていると、魔法は完成し、身体が跳躍した。

「のわあああああ！」

ズシン、と衝撃を受けて尻餅をついてしまった。座標特定は完璧だったはずなのに、目的としていた場所とわずかながら差異が出来てしまったのは、周囲に漂うこの濃密な魔力のせいだろう。俺のせいじゃない。……すみません、実力不足です。

今いるのは公園。それも、木の上からまっさかさまに落ちてしまったせいで、服のあちこちに木の葉や枝がくっついている。

「やれやれ、って、やっぱ俺いらなかったかな……」

空中を見上げれば、クロノが今まさにぶつかり合わんとしていた二人のデバイスを受け止め、戦闘を仲裁していた。

金髪の方の漆黒のデバイスをS2Uで受け止め、左手で白い方のデバイスを……って、んんっ？

良く見れば、白い方の持っているデバイスは配色こそ違えど、俺のスカイラインとそっくりだった。というか、瓜二つだ。バリアジヤケットにいたっては配色も似てるし、言ってしまうえば男性バージョンと女性バージョンみたいな違いしかない。

「スカイライン、あのデバイスお前の関係者？」

《いえ、メモリに該当するデータはありませんマイマスター》
だよな。

そもそも、このスカイラインは本局で作成された試験用の新型デバイス。管理外世界にいる魔導士がおいそれと持っているようなものじゃない。偶然の一致だろうか。それにしても、あまりに酷似しすぎているが。

「ここでの戦闘行動は危険すぎるっ」

とかなんとか考えていると、クロノが少し大きな声で二人を諫めていた。白と黒は二人とも、啞然としたように驚きの声を漏らした。おーおー、格好いいねクロノ君。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

黒い方のそばに控えていた狼らしきオレンジの（恐らく使い魔だ）が低い声でうなり、すぐ頭上で中性的な声が聞こえた。

「時空管理局……」

見上げると、そこにいたのはかわいらしい容姿だけれど、なんとなくいけ好かない動物。イタチだ。基本的に動物はすきなほうだけど、コイツはなんか気に入らない。なんか、動物っぽくないし。おそらくは白い方の使い魔なのだろうが、センスが悪い。って、そりゃ言い過ぎか。

視線を戻すと、空中に青い宝石——恐らくロストロギアが浮いたまま、クロノは二人の魔術師を地上へ誘導した。どちらも魔力量だけならA A Aランクって聞いてただけど、クロノの実力を肌で感じ取ったのか、おとなしくしていた。クロノはやっぱすごい奴だったらしい。

「このまま戦闘行為を続けるなら——」

クロノが言い終わるよりも早く、頭上より降り注ぐ黄色い閃光。あれは恐らくフォトランサー。アレンジを少し加えているようで、三発を同時に射出している。その上あの魔力弾——電気変換か。見た感じ練度は低いようだが、それは使い魔が使ったため当然。むしろ、そう考えると中々の出来……！

すぐに危険を察知したクロノが降り注ぐ閃光に対してプロテクションを張った。全ての閃光はその防御壁に阻まれ、軌道を変え、虚空を飛んで消えた。

「フェイト！ 撤退するよ、離れて！」

フェイト。それが、黒い方の名前らしい。

金髪の魔導士——フェイトの使い魔が叫ぶと、いくつかのフォトランサーが待機状態となって空中に浮いた。発生させた瞬間からの電気特性。これは、魔力変換資質「電気」だ。

通常、自らの魔力に属性付与をするにはそれ専用のプロセスを踏む必要がある。その為、詠唱時間や使用魔力に影響が出てしまう。しかし、魔力変換資質を持っている魔導士はデフォルトの魔力がすでに属性を帯びているため、デメリットを廃止した属性攻撃が可能となる。ある意味、レアスキル並に重宝する能力だ。使い魔が持つ

ているという事は当然、その主が有している事に直結。魔力量がおよそAAAランクのことを考えても、フェイトというあの魔導士、相当な実力が伺える。

フォトンランサーが着弾するよりも早く、フェイトは飛行を開始。魔力弾はそのままクロノと白い方に降り注いだ。響く爆音、揺れる大地。上がった土埃で姿を隠し、二人とも、後退することで直撃は避けたようだ。

ほっと胸を撫で下ろしていると、視界の端に映ったフェイトがロストログアへ手を伸ばしているのが見えた。刹那、黒煙の中から紫の魔力弾が高速で飛び出した。あれはステインガーレイか。クロノの十八番魔法だ。

直撃。ステインガーレイは速度の割りに威力の低い魔法だが、不意の一撃ならばパンチ一発分ぐらいの威力のはずだ。だからフェイトは体勢を崩したものの、致命傷とまではいたっていない。ただ、当たった数が数か。滞空のバランスを悪くし、真逆さまに彼女の身体は落ちていった。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

使い魔、白い魔導士が叫ぶも、フェイトの落下は止まらない。

「ちっ」

使い魔が落下地点を予測して動いているが、衝撃が免れるわけじゃない。静観していた俺だが、こんな時に動かなくてどうするってんだ！

無駄になくなっていい命はない。それを救うための手段があるならば、俺は迷わない。

足元に、正三角形の魔方陣が踊る。ミズキ・ナカジマが持つ稀少技能。それを今、起動させる――！

落下していく自分の身体は、いつもの飛行時とは明らかに違う感覚に包まれていた。重力を失いただ、落ちていくだけの感覚は、初めてかもしれない。

自分自身でまったく制御ができない。この高さから地面に激突したら、無事ではすまないだろう。母さんは……母さんは、心配してくれるだろうか？　少しでも、私のために涙を流してくれたなら、嬉しいな。

思えば私、フェイト・テストロッサの人生は母さんを中心に回っていた。思わなくても、だれだってそうだろうというはずだ。

……私だって、わかってる。私がどれだけ歪な存在であるかを。でも、遠い昔。母さんが微笑んでいたあの頃。あの頃の母さんに戻ってくれるのなら、今の私の現状なんて些細事だ。そう思って、ずっと頑張ってきた。母さんは怒ってばかりだから、本当はぜんぜん頑張れてなんていないんだろうけれど。

あと、どれくらいの猶予があるだろうか。アルフと、あの白い娘の声が聞こえる。私の名を呼ぶ、声。

もし、母さんがあの当時ままでいて。私とあの娘が出会っていたなら、友達になれていたのだろうか。戦う必要なんて、なかったのだろうか。

心の中で苦笑。有り得ない可能性を考える事に、意味はない。

目を瞑り、落下の衝撃に備えた。少しでも身体へのダメージを軽減させなければならぬ。そうでないと、母さんの役に立てない。身を固め、歯を食いしばる。後、どれくらい？

——瞬間、身体は再び空を舞った。しかしそれはいつもの飛行の感覚とはまったく別物で、言い換えるのなら浮遊。自分以外の力で浮いているような感覚。

上昇が落ち着き、一定の高さで落ち着いたところで肩と、ひざ裏に暖かい感触を認識した。私は目をうつすらと開ける。視界に入ってきたのは夕暮れ染まる空の色ではなくて、心底安心しきった顔で私を見つめる――一人の天使。

純白の大きな翼を広げた男の子が、そこにいた。

ふう、どうやら間に合ったみたいだ。

俗に言われる「お姫様抱っこ」の体勢でフェイトを受け止め、そのまま少し浮上する。緊急時とはいえ、少し判断を間違えたかもしれない。なにせこの持ち方、見栄えこそいいのだが、全体重が両手にかかってしまう為、案外腕にくる。ギンガやスバルなんかと遊び半分でしていた時、自分の非力さに嘆いたものだ。勿論、兄としてのプライドで踏ん張ったけどな！

……って、あれ？　今日はあまりそういった感覚がない。腕がしびれる感覚が、想像よりもはるかに弱い。

その理由はすぐに判明した。このフェイトという少女、有り得ないくらいに軽いのだ。見れば手足は病的に細い。人として健全な活動していけるギリギリのラインか。身長はたいして俺と変わらないだろうに、体重だけを見比べれば相当な違いが予想された。

「フェイト！」

「っ、とと」

この声は使い魔か。

身体を捻ると、再三のフォトンランサーが一本、掠めていった。あつぶね、直撃コースだったぞ、今の。一本だけってのは、フェイ

トを取り落とさない程度のダメージを与えようとしていたって事。
ただ、残念だがこの使い魔の力で『滞空中』の俺に魔力弾を当てる事は不可能だな。

敵も俺の飛行能力に何か気付いたのか、今度は数本の黄色い閃光。一本でも当たればと思ったのだろうか。しかし、当たるはずもない。空中戦で俺と張り合うのなら、もう少し速度を速めた攻撃が必要だ。最低限の軽い動き。少なくとも、俺にとっては。ただし、それは一般の人間ならばおおよそありえない軌道となる。速いわけでは決していない。いうなれば、一羽の鳥。

空での俺は、速度ではなく軌跡で、魔導士の限界を超えられる。それが、俺のレアスキル『スレイプニール』

背中に魔力で作られた、アクセルフィンとは違う特殊な羽が生える事が特徴だ。

古代ベルカ式の魔法の一つで、すでに失われたはずの秘術。

「くっ、なんなんだい、あんた！」

「べっつにいい、ただの管理局員だよ」

そうこう話しながらも、飛来する攻撃を避ける。ま、確かに俺の飛翔を初めて見た奴は、おんなじ感想を漏らすだろうな。

普通の飛行魔法ならば、こうはいかない。

それは、歴史上に存在する『スレイプニール』にしても同様だ。本来はただの飛翔魔法であって、俺のような動きが出来るようになる魔法ではない。

だからこそ、レアスキル認定されるわけだが。この動きは、俺にしか出来ないのだ。

「あ、あの」

「ん？ ああ、フェイトちゃん。あのさ、悪いんだけど、あの使い魔大人しくさせてくんない？ これじゃ、おちおち話すことも出来ねえ」

「い、一応私たち敵同士のはずですが……」

和やか、とはとても言いがたいが、会話したかぎりではフェイト

は意思がまったく通じない相手ではなさそうだ。こちらからの問いにきちんと答えられているし、これはますますアースラまで連れて行って、事情を聞かなきゃならんな。

閃光を避けつつ、視線を白の魔導士の隣に立つクロノへ向けた。

「クロノ！ その使い魔任せた！」

「ああ、わかってる！」

答えるや否や、クロノと使い魔が魔法戦を繰り広げたわけだが……あの使い魔じゃ、そうは持たないだろう。ま、非殺傷設定だし、死ぬ事はないはず。結果の見た戦いを見守るより、こっちが優先だ。

「とりあえず、二人とも俺たちについて来てもらうよ。ああ、拒否権はないから」

「くっ……！」

すごく強い、意志の眼差し。じたばたと、フェイトは腕の中で暴れた。とはいえ、こちらは離すわけにいかない。空中で二人、取っ組み合いが始まった。

「って、あ！」

とはいえ、状況的にもこちらが不利なのは当たり前。するりと俺の腕を抜けると、フェイトは一目散にロストロギアへ飛んだ。どうあっても、手に入れた代物らしい。

「けど、残念」

「な……速いっ」

悪いが、フェイトのスピードでは俺のそれに到底敵わない。さっとロストロギアを手中に収めて、フェイトに対峙した。

速いわけではないが、それ以外の表現方法は確かにない、か。

「光の翼……アクセルフィン？」

フェイトがポツリと漏らした。指摘したのは間違いなく俺の背中に生えている翼の事だ。

「ま、当たらずとも遠からずだ。それも含めて、大人しく従うなら教えてあげてもいいけど」

「……」

こんな言葉でつられるとは思っていなかったけど、やはりなびくことはなかった。軽く落ち込む。なけなしのレアスキルを「興味ない」と、斬って捨てられるとは。

「フェイト！」

「……大丈夫。すぐ、終わる」

クロノに迎撃しながらも主人の心配をする使い魔。ありや、案外能力高いな。クロノならそんなに手間かからないって踏んでたんだが。

「……」

とと、今対峙すべきはこっちか。見れば、フェイトは目を瞑り詠唱を開始していた。

予測魔導士ランク総合AAA。その上、魔力変化資質持ち。対して、俺はレアスキル持ちとはいえ、ランクは空戦A+。勝敗は火を見るより明らか……な、わけねえか。

悪いが、才能だけがAAAの魔導士に、負ける程管理局員は『やわ』じゃない。

「フォトンランサー」

フェイトを囲むように、虚空に幾つ物スフィアが浮かぶ。そして目を見開くと、掲げていた杖の切っ先を、勢い良く俺に向けた。

「フルオートファイア！」

放たれる雷撃。

その数は十を軽く超えた数だ。一点集中させているわけではなく、広範囲に狙いを済ました攻撃。通常なら、フィールドタイプ防御魔法で耐え凌ぐべきなのだろうが……。

「悪いが、当たんねえな！」

スフィアが全て同時に放たれたのなら、避けるのは厳しかったかもしれない。しかし、フェイトの放った魔力弾はそれぞれ微妙に打つ時期をずらしている。当てるための判断だろうが、十数発程度の直線、滞空中の俺にはあってないようなものだ。

「え、そんな……」

驚くのも、無理はない。

数秒と経たず、『全弾』が地面へ激突したフォトンランサー。腕や足、所々掠めてはいるが、直撃はゼロだ。

驚愕の表情を浮かべるフェイトだがしかし、すぐに次の攻撃の詠唱を始めるあたり、負けず嫌いなのだろう。ただ、こちらも避けているだけで終わるつもりはない。

「スカイライン」

《了解ですマイマスター》

答えるとスカイラインから、三枚もの小さな白い翼が生える。シリリングモードと名づけられたスカイラインのこのモードは、デバイスが魔導士の最大出力を発揮できるように作られたもので、本来魔力が通るべきプロセスを出来るだけ排除し、抵抗を少なくしている。他にも似た機能を持つデバイスはあるが、シリリングモードは管理局最新の技術だけあって、旧型のそれらを凌駕する。

完全に翼を広げたスカイラインを天上に掲げ、魔力を凝縮している。それは俺の体内からだけじゃない。周囲に漂う、ここで使われてきた魔法の残り香をも取り込んで。純白で強大な光の弾が、俺の正面に収束する。膨大な魔力を制御するために、魔方陣を重ねて構成していく。

正直、ここまで魔力を溜められるなんて思ってもいなかったから、少し焦る。一体、どれだけ高密度な魔力が漂っていたんだか。

「フェイト！」

使い魔が叫ぶも、クロノの相手で手一杯のはず。こちらへ援軍へは来れない。

それに……このフェイトって子、根っからの負けず嫌いだ。まだ俺に一撃と食らわせていないのだから、どうにかしてでも、勝利を掴まんとするはず。

証拠に、すぐに多数のスフィアを展開させている。うん、その考え方はオーケーだ。大威力の砲撃の打ち合いよりも、現在詠唱最中

の俺には小技を当てる方が得策。ただ、相手に攻撃が当たるのならば、だが。

「ファイア！」

飛来する高速の電撃。しかし、その攻撃はただ一つ当たることなく、夕暮れの赤の中へと消えていく。動く距離自体は短いから、魔法を阻害するほどの効果は得られない。

「くっ、」

フェイトも、俺がなんらかの特殊能力で避けているのならば、納得がいくだろうに。残念な事だ。確かにこの状態自体はレアスキルだが、迫りくるフォトンランサーに関してはまだ『避けている』だけ。

「悪い、ちょっと来て貰うな」

言葉とほぼ同時に、スカイラインを振り下ろした。切っ先に大きな、ミッド式の魔方陣が描かれる。旋律するフェイトの表情が、はつきりと見えた。

《スターライトブレイカー》

無機質なAIの音声。刹那——世界は、純潔の白に染められた。

第2話 三人の運命は、此処が始まりだった。（後書き）

二話投稿完了。

えと、こんなペースでの更新は絶望的ですが、たまには速く、けれど普段はゆったりと更新していく予定です。

おもしろかったりつまらなかったり、何かを感じたなら感想、お待ちしております。

幕間

第2. 5話 別れは、新たな出会いへの布石だった

これは、俺ことミズキ・ナカジマが、まだギリギリ空士候補生だった頃の話だ。

管理局入局後、最初に俺が配属されたのは1321航空隊。航空武装隊の中でも、まずまずの実績を持つ部隊だった。

通称「空隊」と呼ばれる航空武装隊は、ミッドの魔導士たちの憧れの的らしい。確かに空を舞い戦う姿は華々しいもので、1321部隊の先輩たちは憧れの対象とされるに相応しい人たちばかりだった。

空士候補生。それは、ある種将来が約束されたルールでもある。誰にでもなれるわけがないのだ。なぜならば空の魔導士として最低限の資質である「飛行」は、先天資質によるところが大きい。先天資質の無い者が空を飛ぶのは極めて難しく、訓練に予算が莫大にかかる事で有名だった。

俺が母さん——クイント・ナカジマに保護され、尚且つ管理局がそれを承認したのは偶然にも持っていた飛行能力とそれに付随するレアスキルに眼をつけたからに他ないだろう。ゲリラに所属していたとはいえ、俺はまだ若かった。■■の言葉を借りるならば、幼かった。今のうちから入局させておけば、反乱思想もなくなるだろうし、大きな戦力にもなるだろうっていう、管理局の思惑が見え見えだった。もっとも、俺には反乱思想どころか、管理局に対する恨み

も今はないわけだが。

元々、俺は自らがしていた行為に正しさを見出していなかったし、なによりも■■■の命令もある。せつかく死から免れたのだし、『生きてみよう』と思っていた。

『生きる』ただそれだけを糧に、管理局に入っただけは間違いない。しかしそんな惰性の生涯も、一年経つ頃には瓦解することになる。候補生として働くうちに、管理局の『次元世界の平和』の為に動く姿は鮮烈に、光り輝いて見えてきたのだ。そこには、本当の意味で家族となった存在や、偶然の出会いを果たしたクロノたちとの関係。それらが無意識に磨き始めた俺の心と相乗して、ミズキではない、ミズキ・ナカジマの原型が形成された。

けれど、そんな俺に対して疑惑の眼差しを向ける人も少なくなかった。一度、本局に出向いた時のことだ。地上で働く局員の一人が放った言葉に、わずかながら考えさせられた。

それは、俺が管理局に対して恨みを抱いていないのかという疑念。確かに父親として慕っていた■■■は殺されたが、俺は誰がいつ死ぬかも知れぬ緊張の中生きてきた。覚悟もしていた。悲しくないといえど嘘になるが、その程度の事だった。恨みを持つどころか、感情を得る切欠をくれたことに感謝しているくらいだ。

ただ……本局局員の多くは、俺の答えに納得がいかなかったようだ。

地上の局員にとって、憧れの空戦部隊に聡明とはいえ、年端もいかぬ子供が配属され、あまつさえ評価されている。それらの事実とそして、俺の過去。管理局と敵対していたという、消せようのない実話。その二つがどのような比率で配合され、表に出てきたのかは知らない。ただ、本局に赴くたびに俺に降りかかってきたのは、嫉妬の感情に乗った悪質な『教育』だった。

かつてない程の精神的な苦痛。二年間、辛くないわけがなかった。実の子のように自分を扱ってくれる両親。軽口を叩き合える友人。新たな家族の存在。

俺の宝物とも言える人たちがいなかったら、決して耐え切れていなかった。皆には、感謝しても仕切れない程の恩が出来てしまった。『教育』は終わる事なく悪化の一途を辿っていたが、俺は管理局を辞めることなく候補生生活も残り一ヶ月となった。

そこで、上司から言い渡された俺の配属先。それは空ではなかった。しかし、陸でもなかった。

それは海。時空管理局本局とはある意味、隔絶された職場だった。巡航八番艦アースラ艦長リンディ・ハラウンの強い希望があったことを、俺は密かに聞かされていた。クロノの母であるリンディさんとは顔見知りで、さらに彼女もまた、俺の事情を知っていた。聡明でありながら、優しい彼女は独断で、俺をアースラへ迎える体制を整えていたのだろう。迷惑になると言う俺に、「もう手続きしちゃった」と半ば強引な態度でリンディさんは告げた。それが、昨日のことである。

候補生終了は一ヵ月後。本日は非番である俺はミッドチルダ首都クラナガンにいた。アースラへの配属が決まったという事は、戦艦勤務になると同義だ。当然、家に帰る事もあまり出来なくなる。兄貴に溺愛している『妹』たちが、それを黙っているわけがなかったというわけだ。

一年ほど前……他者への思いやりを胸に日々を生きようと決意した頃だ。

作戦を終えて帰ってきた母が連れて帰ってきた姉妹。どこか、母の面影を持つ少女たちは、所謂『戦闘機人』らしい。母の部隊が捜査していた研究所で作り出された人ならざる人。

しかし、少女たちは人間ではなかったが、機械でもなかった。何も知らぬ、無垢な子どもだった。

今まで保護される立場でしかなかった俺が、初めて守ろうと誓った存在。それがスバル・ギンガの二人だったのだ。

瞬く間に信頼という絆で結ばれた俺たちは兄妹となり、家族となった。

ナカジマ家の三兄妹は、近所では微笑ましい視線を向けられる対象にもなった。俺

は「照れくさい」などと言いながらも、二人と兄妹になれた事を本当に喜んでいた。顔を赤らめ、そっぽを向くのは恥ずかしさの現われだった。

だからこそ、クラナガンだ。

アースラへの配属に二人は違った対応であったが、どちらも反対の意を示した。なんとか説得を試みたものの、駄目の一点張り。ご機嫌取りに、なけなしの小遣い（管理局局員としての給料は全額母が管理しているため、俺はお小遣い制だった）で、二人に贈り物と思ってやってきたのだ。

とはいえ、思いつきは良かったのかもしれないが、いかんせん難題すぎる。

まず、女の子が喜ぶ物がわからない。

ギンガは確かにお淑やかで女の子というイメージだが、だからこそ悩む。

一方、スバルは元氣潑刺でしばしば男の子と間違われる事もある活発な少女。故に、喜ぶ物の見当がつかない。

デパートに入り、いくつか店を物色した後、外へ出た。仕事の際は平気なのだが、平時だと知らない人に声を掛ける事は抵抗があるし、店の人に聞こうもなんと言えばいいのかわからず、結局退散してしまった。

「適当に、お菓子でいいかな……」

呟いてみると、確かにそれもありかもしれないと肯定していた。

……うん、二人ともまだ幼いし、食べる事が好きだし、きっと喜ぶはずだ。

適当な理由付けをしてみる。確かに、スバルは大喜びしそうだった。

けれど、ギンガは？ ギンガは大食いなのだが、どこか俺の前では食べるのを遠慮する節がある。それはきつと恥かしさからくるも

ので、まだまだ、完全に心を開いてくれないのだろう。

ともかく、ギンガは怒りそうな気がする。本能的な危険を察知した俺は立ち止まり、もう一度考え直そうと手近のベンチに深く腰を下ろした。

「え？ えと、その、お兄ちゃんしばらく帰ってこなくなるってこと？」

ふと脳裏に浮かんだのは、昨日の夕食後にアースラ転属を打ち明けた時のギンガの反応だった。不安げに揺れる双眸が、俺の良心をチクチクと傷めた。リンディさんには遠慮していたが、正直この配属は嬉しかった。そう思っていたせいで、ギンガの涙ぐんでいく瞳に耐え切れず、視線をそらしてしまった。

「駄目だよお兄ちゃん！」

俺たちのそんな状態を見たからか、眼に涙を浮かべてスバルは叫んだ。喧嘩しているように見えたらしい。大事な妹二人に泣かれるのは堪えるものがあつたが、それを諫めてくれたのは父と母だった。「まあいいじゃねえか。ずっと帰ってこないわけじゃねえし」

父さんがそういうと、同意するように母さんは頷いた。眼差しからは確かな母性を感じた。

「私も、確かに寂しいわ。でも、お兄ちゃんが決めた事なら、反対はしない」

直接話した訳ではないが、母さんも本局での複雑な事情を知っていたのだろう。だから断固反対を訴えられなかったんだと思う。

両親というのは、姉妹の年齢の少女にとって絶対の存在で、特に養子であつた二人はそんな印象が強かつたはずだ。その為、その場で二人は落ち着きを取り戻しはしたのだが、昨夜から明け方にかけて朝食の席でもその不機嫌な態度を隠さなかつた。

「どうすつかな」

「おや、ミズキ君かい？」

独り言を空へ投げかけたその時、不意に声をかけられた。

茶色い癖っ毛。優しい眉と細目。ティーダ・ランスター二等空

尉だった。

首都航空部隊——ただでさえ華やかな航空隊の中でも花形部署と呼ばれる場所に勤めるエリートで、射撃魔法の名人。若干十七歳にしてエースと呼ばれている、俺にとって雲の上の存在。

仕事で本局に赴いたときに世話をしてもらい、それから見かけるときに声を掛けてくれるようになった。ティーダさんの事は本当に尊敬していた。こんな魔導士になりたいという目標の一つでもある。嬉しさのあまり、ベンチから思い切り飛び上がり、駆け寄った。

「ティーダさん！ お久しぶりです」

「ああ、ミズキ君もね」

右手を上げ、ティーダさんは口元をほころばせた。ティーダさんの全貌を収めるも、何らかの違和感を覚えて首をかしげた。

見れば、ティーダの左手をギュッと握りしめる可愛い少女がいた。

「えと、妹さんですか？」

「うん、ご明察。妹のティアナだよ。歳は……ミズキ君より三つ下だね。ほらティアナ、あいさつしな？」

ティーダさんに背中を押された少女は、おずおずと前に進み出ると、ペコリ、と頭を下げた。

「ティ、ティアナ・ランスターです。えと、兄がいつもお世話になってます！」

再び、ペコリ。なかなかどうして、しっかりした子だと思っていると、ティーダさんの苦笑が耳に入った。

「おいおいティアナ。お兄ちゃんが、お世話してるんだよ」

「あ、あう」

恥ずかしそうに、ティアナちゃんは頬を赤らめた。そんなティアナちゃんが、いつも世話している妹たちに重なり、おもむろに近づいてしまった。ティアナちゃんの兄を持つ手にぎゅっと力がこもるのが見える。

確かに俺は年齢に見合わぬ鋭い眼差しを持っていると自覚しては

いるものの、こうまで露骨に避けられると辛い。無理やりにも微笑みを浮かべるが、逆効果らしい。ティアナちゃんがいつそう怖がっているのがわかってなお辛い。

しかし、ここで退くのは負けだと、一歩大きくティアナちゃんに近づいた。半歩分身体を後退させるティアナちゃんと、そんな妹を面白そうに眺めるティアダさん。あー、なんか気まずいななどと思いつつも、臆せずさらにもう一歩踏み出して――ポン、とティアナちゃんの頭に右手を置いた。

啞然とするティアナちゃん。これは、俺が初めて妹たちとコミュニケーションを取った時の方法だ。どうすればいいかわからず、とにかく年上だという事で頭を撫でた。これが、二人は思いのほか気に入ったらしく、俺自身正しかったのだと安堵した。

そんな経験があったからか、同じ年や年下の相手と対面する時などで、会話に困ると相手の頭を撫でる癖が定着してしまった。今のところ困った事態は起きていないが、知らず知らずのうちに上官の頭を撫でてしまわないか、いつも冷や冷やしている。俺より年下の管理局員だっているのだ。もっとも、これは癖であるため、自制があまり効かないのだが。

ゆつたりと、髪を撫でられるティアナちゃんはじっと見つめてきた。その瞳に怯えや恐怖の色がないことに心底安心した。

「えと、頭撫でられるの嫌か？」

「いえ、ありがとうございますっ」

上司の妹との出会い。それはとても単純で有り触れたものだった。後にティードさんは、ティアナちゃんがかなり俺の事を気に入っていたと話してくれた。

聞けば、幼い頃に両親と死別して以来、ずっと二人だけの生活を続けていたらしい。実の兄以外に出来た初めての関係は、彼女の心を躍らせる確かなものがあったようだ。

これより一月後に俺は首都を離れてしまったわけなのだが、その間にもティアナちゃんとは何度か顔を合わせる事となるのはまた、

別の話だ。

閑話休題。

その日、当初の目的であった妹たちへの贈り物の件はティアナちゃんの助言によりあっさりと解決。

それからしばらくはランスター兄妹と街を散策して、家路に着いた。

私たちの部屋にノックの音が響いた。恐らく兄だろうと当たりはつけたが、応える気力は湧かない。扉の向こう側に聞こえないように軽く、私はため息をついた。

兄とは無論、私とスバルのお兄ちゃんであるミズキ・ナカジマのこと。すごく大人びていて、でもはしゃいでるところとか、歳相応にも見える人。

出会ってまだ一年の私たちだけど、本当の兄妹以上に、つながりを大事にしていた。詳しい経緯は良く知らないんだけど、お兄ちゃんもまた、お母さんたちとの直接的な血の繋がりはないようだった。それでもこうした関係を築けているのはきつと、私たちが互いに必要としているからではないかと思う。

そんなお兄ちゃんが昨日、唐突に『家を出る』事を告白してきた。当然私もスバルも怒った。反対する理由なんて、いっぱいあった。確かお兄ちゃんは本局の空隊ってところで働いてるってお父さんは言っていた。なのに、どうして候補生って言うのが終わって職場が変わってしまうのか。私には良くわからなかった。ただ、お兄ちゃんが遠くへ行ってしまうことは、ひどくいやなことだった。

昨日の夜から、今朝まで。

お兄ちゃんは必死で私たちを説得しようと話しかけてくる。決して謝らないのは、自分が悪いという事を自覚してないからだろう。

絶対に、私は悪くないのに……

「ギンガ、いる？　話があるんだけど」

ここは私とスバルの二人部屋なのに、お兄ちゃんが私を名指しで呼んだ事にドキリとした。階下から聞こえてきたスバルのくぐもった声。そういえば、母さんとスバル、三人でお風呂に入ってたけど、私だけ先に上がったのだった。お風呂場であれだけ騒いでいれば、部屋には私しかいないってわかるか。

私は立ち上がろうとせず、ベッドの上でパジャマの裾をぎゅ、つと握り締めた。

絶対に、出てやるものか。

幼いスバルとは違って、私は良く自分自身の事を理解しているつもりだ。

戦闘機人。戦うために作られた、人ではない存在。

嫌悪されてしかるべき対象だ。

そんな私たちに……

お母さんは世界を見せてくれた。

お父さんは掛け値なしの愛情をくれた。

お兄ちゃんは頼れる背中をくれた。

三人がいてくれたからこそ、私たちはこうして幸せな世界を教授して、生きていられる。

なのに、お兄ちゃんは私たちから距離を置こうとしてる。お兄ちゃんの絶対的な意思でないことくらいわかってる。だけど、理性じゃなくて感情で、抑えられない悲しみがある。

家族が離れ離れになって、いいわけないのに。

「あー……そのままでもいい。聞いてくれないか、俺の話」
「……」

私は何も答えなかった。でも、それは立派な肯定の証で、現に私

は耳を完全に扉の向こう側に向けていた。もしかしたら、心変わりをしてくれたのかもしれないと期待したからだ。

「なんつーか、本当に悪いって思ってる。ギンガもスバルも、まだ小さいし、家族がいなくなるって、結構重い事なんだよな」

お兄ちゃんの意味はどうやら、変わっていなかつたらしい。その事に私は嘆息し、しかし口は挟まずお兄ちゃんの言葉を聞く事に勤めた。

「俺もさ、二人と離れるのはあまり気乗りしないことだ。だけど、さ。アースラに配属になって、喜んでる自分も確かにいるんだ」

「っ」

聞きたくない言葉だった。

それは、私たちと離れるという事実の小躍していることに他ならなかつたからだ。

パジャマを握り締める力がまた、強くなる。

「ほら、俺って働いてはいるけど、まだ若いだろ？　それで、掛け値なしの天才だったら問題なんてなかつたんだろうけど……正直、魔法はそれほど使えないんだ」

それからお兄ちゃんが話した内容は少し難しかった。ただ、わかつた事は一つ。

お兄ちゃんが地上の管理局員から虐められていたってこと。それが、どれほどショックな事だったか。だって、お兄ちゃんはいつも優しくて、頼りになって、嫌な事ほど率先して矢面に立つような、そんな人だもん。

そんなお兄ちゃんを虐めるなんて、とても信じられなかつた。でも、痛烈な感情をひしひしと感じるお兄ちゃんの言葉が「ああ、真実なんだ」と実感させる。

「悪くないよっ！　お兄ちゃん、ぜんぜん悪くなんかないよっ！」
思わずドア越しに叫んでいた。もうすでに、答えまいとしていた過去なんてすっかりと忘れ、ただただ激情の渦の中に、身を投げ出していた。

「だから、どっか行っちゃわないでよっ！ 守るからっ、私がお兄ちゃんを守るからあっ！」

こんな小さな自分に出来る事なんて、とても微々たるもの。実際、ないのかもしれない。

でも、そんな言葉しか思い浮かばなかった。私がお兄ちゃんをつなぎとめる台詞なんて、その程度のものしか存在しなかった。

……呆れたのか、お兄ちゃんは数秒反応を示さなかった。静寂の中、えぐえぐと涙を流す私の嗚咽が微かに響く。

「ごめんな、問題から逃げ出しちゃうような、弱虫なお兄ちゃんです」「ち、ちが、ちがう、よ」

「……強くなつて、帰ってくるから。絶対に、二人が待っている家に、帰ってくるから」

私は我慢できなくなつて、扉を開けるとすぐさま目の前にいたお兄ちゃんの胸に飛び込んだ。そのまま顔をうずめて、泣きじゃくつた。撫でられる頭。いつもの、優しいお兄ちゃんの手だ。

飛びつく瞬間に見えたお兄ちゃんの表情。お兄ちゃんの言葉には何一つ嘘がなく、そして私たちの事を大事にしているのもすごく伝わってきた。

思えば、昨日の晩からお兄ちゃんとは顔を合わせて話していなかった。単純だった。とても、単純だったんだ。

目と目を合わせて、お互いの想いを伝え合えば、こじれる事はなかった。私が弱くて、お兄ちゃんのことなんて何も考えずに逃げ出してしまったただだったんだ。

「い、いっ、」

だから言おう。

今のこのぶれない気持ちを、素直にお兄ちゃんに言葉として送ろうと思った。

「いって、らっしやい。お兄ちゃん」

「ああ、いってきます」

その後、抱き合ってる姿をスバルとお母さんに見つかって色々と言及されたのは言うまでもない。

スバルにも納得してもらえて、お兄ちゃんは嬉しそうに笑った。

……でも、瞳の奥の寂しさに、今の私なら気付く事が出来た。

お兄ちゃんは私たちの思うままの存在ではなかった。

優しいのも、頼りになるのも事実だけど、それだけの人間じゃない。私たち以上に悩み、苦しみ、生きていた。人と接するという言葉の意味に、この時少しだけ触れた気がした。

お兄ちゃん出立の日。私とスバルはそれぞれ『プレゼント』といわれ、小箱を受け取った。色違いのネックスレスは、私たち姉妹には少し大人っぽいデザインだったけど、かまわない。すぐに着けて、お兄ちゃんに見せた。似合ってるって一言が、すごく嬉しかった。

恥かしそうに、これを自分だと思ってくれよ、なんて口にするお兄ちゃんは何だかわいくて、いつもと逆に私が頭を撫でてあげた。

お母さんも笑顔で、お父さんも笑顔で。私たち姉妹は半泣きの笑顔で。

その日、お兄ちゃん——ミズキ・ナカジマは海へ旅立った。

幕間（後書き）

幕間です。

幕間は、メインストーリーとは別に時間軸をずらしていたり、コメディ調だったり、本編を補完するお話です。

基本は二話ごとに一つ。けれど、絶対ではないので、ご了承ください。さい。

第3話 大切なものが、そこにあるからの決意だった。

正義を執行するための存在。あこがれた理由は、ただ、父さんの背中を見ていたから。職務こそ違えど、父さんのように弱きものを守る者でありたい。それが、力を持って生まれた者の使命であると信じているから。

守るべき大切なモノの為ならば、誰であろうと敵に回そう。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第3話 大切なものが、そこにあるからの決意だった。

アースラに、絶叫が響き渡った。

この声はおそらくさっきの白い装束の魔導士——高町の物だろう。一体、何だというのだろうか。気絶したテストロッサを連れて先に戻っていた俺には、事情がよく掴めない。

今俺たちがいるのは、アースラにある医療室。意識を失ったテストロッサが目覚めるまで、クロノは高町たちへの事情を、俺はアルフに説明をする手はずとなっていた。

「本当に、危害は加えないんだろうね」

両腕を拘束されたアルフ（さっきまでクロノと戦っていたテストロッサの使い魔だ。今は人間形態を取っている）が辛辣な視線と言葉で問いかけてきた。安心……出来るわけもないだろうが、とにかく敵意がないことを伝えるために表情をやわらかくした。

「ああ。とりあえずは事情聴取。それも、無理やりな方法は使わな

い方針だって、艦長は言ってた」

「……もしフェイトに手出してみな。此処の連中皆殺しにしてやる」
「はは、それはご勘弁を」

クロノ一人に苦戦していたアルフには、実際問題不可能な事だけど、それでどれだけテストロッサを大事に想っているかが伝わってきた。「とりあえず座れよ」と、テストロッサの眠るベッドの隣の椅子を勧めた。

「ああ、悪いね」

音を立てないように座るあたりからも、主人への配慮が伺えた。
いい使い魔だと思う。

使い魔とその主人の関係ってのは、一概には言えないものの概ねこんな感じだ。使い魔契約の際における一種の刷り込みが、使い魔からの一方的な変質愛を生む。しかし、このアルフのそれは今まで見てきた数少ない使い魔たちとは、一線、何かが違うように見えた。まるで、それは家族を案じているかのような、親愛のそれを感じる。本来ならば生まれるはずの上下関係が、まったくないかのようだ。

「すまなかったな」

「え？」

こちらからの謝罪に、アルフは疑問符を頭上に浮かべた。本当にわからないらしいアルフに苦笑して答え、俺も椅子を持ってきて腰掛ける。

「スターライトブレイカーだよ。非殺傷設定とはいえ、結構なダメージには変わりない。本当、すまなかった」

「あ、ああ。いや、でも仕方なかったわけだし……それに、悪態つきながらも安心してるとんだよ、あたし」

「？ それは……」

「あたしからは何とも。あんなのでも、フェイトにとっては大事な存在なんだ」

今回のロストロギア騒動。テストロッサが、ジュエルシードを収集する理由か。背後に何かあると踏んではいるが、それがなんなの

か。俺と同世代であろう少女が何を抱えているのか。何もわからない現在だが、この事件にはとてつもなく大きな意思が絡んでいる。そんな気がする。

背もたれに想いっきり体重をかけて、天上を見上げた。この部屋も、俺の部屋のそれとまったくかわりない作りだった事にたった今気がついた。

今わたし、高町なのはは和風を想いっきり意識しているけれど絶対に失敗しているこの部屋で、ユーノ君と正座をしています。

うう、そういえばユーノ君、人間の男の子だったんだよね……。

さっきは驚きのあまり絶叫してしまったんだけど、今考えるとものすごく恥かしい。ああ、駄目駄目！　とりあえず今はユーノ君のことは考えないようにしないと！

深呼吸深呼吸……うん。もう大丈夫。とりあえず艦長さんのお話が終わるまで、左隣に目をやらないようにしよう。そうしよう。

えと、この船の艦長さん……リンディさんにはさっき事情を説明し終えた。主にはユーノ君が説明してくれたから、わたしはほんの付けたし程度の事しか発言してないんだけどね。

ジュエルシードについて、ユーノ君が自分で発掘したものだから、責任を自分で取ろうとしていた事。その事でリンディさんは「立派だわ」って、クロノ君（さっき戦っていた黒髪の男の子）は「無謀すぎる」って評した。

わたしには、それが正しい見解なのかはわからなかった。そもそも、ジュエルシードと聞かされていたあの宝石の事を、三人は「口

ストロギア」という総意の単語を用いて話している。

「あの……ロストロギアってなんなんですか？」

思わず出た私の疑問に、リンディさんは不快な態度なんて一切なく答えてくれた。

「ああ、遺失世界の遺産……って言ってもわからないわね。えっと……」

リンディさんとクロノ君が二人がかりで説明してくれた内容はわかりやすかったけど、同時にわかりにくくもあった。

無くなってしまった、発展しすぎた世界の遺産。結局はそういう結論にたどり着いたわけだけど、理解するまでは本当に意味がわからなかった。

そして、今回のジュエルシードはどうやらエネルギーをたくさん溜め込んでいる結晶で、いくつか集めて特定の方法で使用すれば、次元震とか、次元断層とか、とにかくひどい災害を巻き起こしてしまうらしい。

「君とあの黒衣の魔導士がぶつかった時に発生した振動と爆発。あれが次元震だよ」

クロノ君の補足は的確で、わたしの記憶にも新しいあの時の出来事が蘇って来た。

急速に感じた、背筋が凍るような感覚。莫大な魔力の奔流を、肌で感じた。

「たった一つのジュエルシードで、全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まって発動したときの影響は計り知れない」

わたし以外の三人は、次元断層が巻き起こした歴史に残るほどの悲劇について知っているようだった。「どんなものだったの？」とは聞けない。三人の鎮痛な面持ちが、それを憚らせた。

そして、クロノ君たちはわたしにこの事件から手を引くように言うてきた。民間人の手に負えるレベルではないと、言い切った。

でもわたしは、わたしとユーノ君はこれまでずっとジュエルシー

ド集めをしてきた。ここからは、バトンタッチといわれても、素直に納得はできなかった。例え、それが危険なことなのとしても。あの娘が、あの娘と、わたしは……。

「送っていい。元の場所でもいいね？」

クロノ君が立ち上がって、帰るように促した。でも、わたしはまだ終えていない。クロノ君に着いて来たのは、お話を聞くためだけじゃない。

「あ、あの」

「なんだい？」

意を決して、声を絞り出した。クロノ君は、なんだか怖かった。悪い人じゃないってわかるけど、怖かった。でも、勇気を振り絞って。精一杯の気持ちを、言葉に乗せた。

「フエイトちゃんに、会わせてください」

「目、覚めたか？」

あれ……なんで私、寝ていたんだろう。それに、これは誰の声？ 聞き覚えはあるけれど、駄目。思い出せない。つい最近、聞いた覚えがあるのに。

それより、早くジュエルシードを集めないと。母さんが待ってる。すっかりと落ち込んでしまっていた臉を押し上げると、そこにいたのは……あの、光の翼を持つ男の子だった。

「ここは、」

「時空管理局巡航八番艦って言えばいいかな」

その言葉で、私は事情を察した。

いつの間にか服は着替えさせられているし、バルディッシュは無い。この状態でも簡単な魔法は使えるけど、アルフは手錠をかけられているし逃げ出すことは難しいだろう。

でも、私は早くジュエルシードを集めて、母さんの所へ帰らないといけない。こんなところでのんびりとしている暇はない。

気だるい身体に鞭を打ち、背筋を立てて起き上がった。しかし、願ひむなく、立ち上がることはまだ無理だった。

「あの、」

「ああ、帰らせてとかは今のところNGね。とりあえずは君の事情を知る必要があるからさ。管理局側としては」
どうしよう。

正直、この人は結構凄腕の魔導士だ。他の魔導士と戦ったのは、あの白い娘以外だと初めてだったけど、まるで勝つビジョンが見えない。今の傷ついた身体では、数秒と持たないだろう。

でも、素直に事情を話したら、母さんが危ない。母さんがいけないことをしてるってことくらい、私だってわかってる。でも、だからこそ管理局の人に教えるわけにはいかない。

「じゃあ自己紹介から。アルフから君の名前は聞いている。フェイト・テストロッサ、だよ。俺はミズキ・ナカジマ。階級は……って、言ってもわかんねえか」

ミズキさんはそう言うのと、私の頭に手を置いた。脈絡がまったくない行動だったので、驚きのあまり心臓が跳ねた。

「よろしくな、テストロッサ」

……全然違うのに。大きさも、感触も。全然、違うのに。あの日々の母さんを思い出す掌に、胸の置くから感慨深い何かがこみ上げてきた。

「とりあえず、簡単な事情聴取ね。艦長は今別件で話をしてるだろうから、俺の方から」

ミズキさんは頭から手を離して、椅子に腰を下ろした。少し名残惜しい気持ちは、胸の奥に押しとどめる。頭の上に残ったのは、ほ

んのと暖かい体温だった。

それよりも、どうしよう。黙っているのも選択肢の一つだけれど、それが本当に正しいのだろうか。適当に、はぐらかす事さえできれば万事解決でもある。なら、と。頭の中でうまくごまかす言葉を捜す。

「ロストログアを集めてた理由は？」

ロストログアって、ジュエルシードの事だね。母さんに集めてとお願いされたからとは言えないから……えっと、

「しゅ、趣味で。綺麗な石集めるのが好きで」

「趣味は石ころ集めですっ？　すごい地味だね！　いや、悪いとは言わないけどさ！　もっと他にもあるでしょ！」

「四角くて青くて綺麗に光る魔力一杯の古代の石が好みなんです」

「ピンポイントだよ！　むしろあのロストログア以外にあるの、それっ？」

「だからください」

「お断りだよっ？　さすがに騙されないから！」

ううう、やっぱり騙されてはくれないみたいです。

さすがは凄腕の魔導士でしょうか。

（フェイト）

と、その時アルフから念話が届いた。

念話は非常に有用性のあるポピュラーな魔法だ。デバイスがなくても、魔法を使う者ならばほとんど資本なしで使える。対象者へ向けての、一種のテレパシー。

アルフと目を合わせ、軽く頷いてみせた。

（話そうよ。全部。こいつらは、フェイトに危害を加えるつもりはないって）

（でも、だと母さんが）

（放っておけばいいよ、あんな奴！　あたしはフェイトが心配なんだ）

私を心配してくれてるのはわかるし、それは、とても感謝してる。

でも、母さんをあの日の母さんに戻してあげたい。それをするのはきっと、娘の私の役割なんだって思う。

だから此処に残るわけにはいかない。私には母さんしかないように、母さんにも私しかないんだから。

布団の中に収めていた足を外へ出して、ベッドに腰をかける体制になる。頭を下げた。

「お願いします。ミズキさんの持っているジュエルシードを、私にください」

ミズキさんは戸惑った様子で私を見て、数秒後。やれやれといった面持ちで嘆息した。

（理由を、聞いてもいいかな）

念話で話しかけてきた事に少しびっくりした。どういふつもりかはわからないけれど、こちらでも念話で返すのが当然だと思ってそうする。

こちらの事情を話すのは、多大なリスクが伴うのは承知の事だ。でも、こちらがカードを切らねば状況は変わらないし、それに、なんとなくミズキさんならわかってくれる気がした。本当になんとなく。理由を聞かれたらちよっと、答えられないけれど。

（……私には、母さんしかないんです）

意を決して、私は事情の説明に勤めた。

私の肉親は母さんしかいなくて、それで母さんはすごい魔導士で。私も知らない何か大きなことを成し遂げるためにジュエルシードを集めているという事。でも、母さんは元々すごく優しい人だから、悪い事をしようとしてるんじゃないって事。

それ以外の事は何も。嘘は言っていない。

ミズキさんはしばらく思索したように見せると、ぶっきら棒な言葉と共に、バルディッシュを投げ渡してくれた。慌てて受け取ると、そっぽを向いたまま、ミズキさんは告げる。

「俺は、何も聞いてない。今、君のデバイスを誤って落としてしまった。偶々君がそれを拾ってしまった。さすがにロストログアを落

とす事はなかった。……それだけだ」

驚愕に目を見開く。

まさかここまでしてくれるなんて、思ってもいなかった。アルフも驚いている。管理局の人はもっと冷たいというイメージを持っていたから。

「……ありがとうございます」

変わらず、ミズキさんはそっぽを向いたままだ。答えを聞くため立ち止まっていた私に、念話が届く。

（全ては、俺が注意をそらしていたときの出来事だった）

そして頭に流れ込んできたのは、転送ゲートまでの道筋だった。なんて、優しいんだろう。

せめてものお礼の意味を込めて、大きく頭を下げた。

「アルフ、行こう」

バルディッシュを展開して、バリアジャケットに身を包む。後ろ髪引かれる思いはあったけど、私は思い切ってドアの方へ駆けつけた。
（……全てが終わったら、君の母さんを連れて来なよ。罪はやっぱり、償うべきだ）

部屋を出る直前に届いた念話。私は少し戸惑ったけれど、迷いなく答えを返した。

（はい！ 母さんならきつと、わかってくれますから）

魔法を覚えてから、人を本気で殴ったのは初めてかもしれない。例え親友が相手だろうと、僕は容赦する輩ではなかったというところか。業務に忠実でありながら、とても、寒い男だと思う。

でも、僕の正義がこの親友の行動を許せなかった。世の中は確かに不条理で満ちているだろうさ。でも、だからこそ管理局が機能していて、僕たちはそのルールに殉じなければならぬ。本当の正義は、時に万人から認められないものなのだから。

「ク、クロノ君っ」

なのはが僕の腕を取って止める。そんな事をしなくても、二撃目はしないつもりだったが、ミズキの反論をしない態度を見た瞬間、また怒りがぶり返してきた。

なのはを振りほどき、胸倉をつかみあげた。

「ミズキ！」

「……わりい」

再び頬へ進みかけた腕を理性で、どうにか抑え付ける。乱暴に胸倉から手を離し、たたらを踏むミズキを睨み付けた。

「っ、君が彼女からどんな話を聞いたとか、そんな事は知らない。でもな、この場であの子がロストロギアを追う理由が判明しなければ、この世界どころか、次元世界全体が危機に陥るかもしれないだぞ！」

「ああ、そうだな」

こいつは、いつの間にかこうなった。

出会った頃のこいつはとにかく感情というものが欠落していると思えないほど無表情な奴で、それでいて、理不尽な暴力を反論せず甘んじて受けるような奴だった。

変わる切欠なんてものはなかった。ただ、本当にいつの間にかこいつは変わった。誰も信じなかった男が、誰もを信じる男に。

それが悪い変化とはとても思えなかったが、同時にその極端な思考回路がいつか大きな失敗を生むのではと危惧していた。

結果が、これだ。

あの魔導士からどんな話を聞いたかは知らない。でも、彼女がミズキにとって『自分よりも大事な人』になったのは明らかだった。ミズキは、守ろうと決めた人間を極度に『偏愛』する。そして、そ

ここに至るまでの過程が、とても緩いのだ。有体に言えば、『誰にでもなれる』

その事を理解してるから、もう、これ以上ミズキを責めることができなかった。

「管理局員として、間違った行為をした自覚はある。如何様にでも処分を、ハラOWN執務官」

また、ミズキは僕を怒らせる。自分を省みない事は美德であるけれど、度が過ぎると一種の病気だ。

「……君の責務は、先ほど自身で述べたはずだ。誤って落とした、だったな。僕が君をなぐったのはただむしゃくしゃしたからだ。……今回の事は関係ない」

僕たちはこの程度の事で、崩れる間柄ではない。だけど、だけど！僕は許せなかった。ミズキの歪んだ性格が。そもそも、それを生み出したとされる原因が。

きっといつか、この性格が生み出した事象がミズキ自身に悪意を持って降りかかる。だから、僕は一層決意を固めた。

僕は、法律という側面で、ミズキを守る。正義を貫く執務官となつて、親友を守り抜く。

ミズキの性格が変えられないのならば、僕がその尻拭いをしてやるんだ。

「なのは」

「え、あ、はい！」

僕を止めてくれていたなのはに声をかけた。ユーノはミズキをじっと見つめたまま、動かなかったから論外だ。驚きのあまり、動けないのだろう。だからなのはに声をかけた。

「悪いけど、ミズキを介抱してやってくれるか？ 僕が艦長に報告をしてくるまでの間でいいから」

「あ、うん！」

返事を聞き終え、僕は部屋の外へ出た。

しばらく歩いて、廊下の壁に背を当てて立ち止まった。

これから、どうするか。母さんに報告したら、まずはエイミィのところへ行こう。映像から、少しでもフェイトの足取りをつかめるかもしれない。

エイミィの私室とも言える部屋にある大きなディスプレイに、なのはとフェイトがぶつかり合う映像が流れた。僕が頼んで、再生してもらったものだ。

「すごいや。どっちも、AAAクラスの魔導士だよ」

「……ああ」

確かに、すごい。若干九歳ながら、これだけの魔力量。潜在資質ならば軽く僕を凌駕している。

「こっちの白い服の娘は、クロノ君の好みっぽいかわいい娘だし」

「……ああ」

電気変換資質……ずば抜けた機動力。非凡な才能だが、対抗できないわけない。この程度ならば、負けはない。

「そんなことより、具体的な魔力量は？」

「え？ あ、うん。魔力の平均値を見ても、この子で127万。黒い服の子で143万。最大発揮時は、さらにその三倍以上。クロノ君より、魔力だけなら上回っちゃってるね」

にやりとした瞳で僕を見るエイミィ。確かにその通りだけど、わずかばかり、だ。それほど離れてはいない。それに、

「魔法は魔力値だけの問題じゃない。状況に合わせた応用力と、的確に使用できる判断力だろ」

「それはもちろん」

エイミィは正面に向き直り、自慢げに言う。

「信頼してるよ。アースラの切り札だもん、クロノ君は」

確かにその言葉に嘘はないのだろうけれど、癪に障る。イライラしているためかもしれない。口を開いたら怒鳴りそうなので、黙っ

ておく事にする。

と、背後でドアが開く音。振り返るとそこには、アースラ艦長が立っていた。

「あ、艦長」

母さんは先程艦長室にいた時とは違った、辛辣な面持ちで現れた。僕が、ミズキの犯した事について正直に話したからだろう。

「クロノ。さっきの話だけど、」

「はい。僕のミスです。ミズキの性格をわかっていながら……」

母さんは首を横に振って、穏やかな瞳を作った。

「いいわ。それより、ミズキ君の心を動かすような理由が、黒い子にはあったってことね」

なのはとユーノがロストログアを集める理由はわかった。けれど、フェイトにいたっては謎のままで。ミズキは決してしゃべらないだろうから、情報はゼロに等しい。

「ずいぶん、必死な様子でした」

「まだ、小さな子よね……普通に育ったなら、まだ母親に甘えていた年頃でしょうに」

何かしらの強い思い。それを知ることが、事件の裏に繋がる重要なヒントになる気がした。

自分のしでかした事の重さ、か。

確かに、第三者が見ればいいことではない。けれど、テストロツサは言った。必ず母と一緒に来ると。すべてが終わったら、自首すると。

……そんな事、信じられるわけではない。

アルフの痛烈な表情を思い出す。テストロッサの、やけに軽い体重を思い出す。

テストロッサの母とは、いかような存在なのか。何を目的としているのか。考えずとも、大方ひどいものである事はわかる。

「あの、」

「え？」

声をかけられたことにびっくりして顔を上げた。そういえば、クロノに殴られた後、この娘が介抱してくれたのだった。

高町なのは。魔法が社会的には存在しない管理外世界にいた、あふれんばかりの魔力を持つ少女。

介抱を受けながら、高町とは自己紹介を交わした。交わしたが、その程度だ。

余計な会話はしていないし、俺が黙ってテストロッサの事を考えていたから、少なからず疎外感を感じたのかもしれない。

……一緒にいたスクライアとかいう少年は、あの時のイタチらしい。こいつは使い魔などではなくて、立派な人間だった。なんだから少し俺に怯えているように感じる。そのせいか、押し黙ってちらちらとこちらを伺っていた。うざい。

「悪い、介抱ありがとう」

「へ？ ああ、いいんですっ。少し腫れてるけど、たぶん何ともないと思う」

そら、14歳に殴られた程度じゃ、どうもならないわな。

苦笑しつつ、感謝の意を表現する手段として、高町の頭に手を置いた。年齢は知らないけれど、見かけから同い年か、少し下ぐらいだから問題ないだろう。

「あ……」

「癖でね、頭撫でるの。嫌ならやめるけど」

「い、嫌って言うか、ちょっと恥かしい……かな」

高町の髪の毛は癖毛のようでありがら、しなやかでやわらかく、

中々撫で心地がよい。ついつい、いつまでも撫でていそうだ。高町も、諦めたのか俯いたまま黙って享受している。頬が赤くなって、恥かしいという言葉が本当であることがわかった。悪いね、もう少し撫でさせてよ。

と、そんな俺たちの間に割って入ったのはスクライアだった。いきなり割り込んできたから、少し驚いた。

俺たちを引き剥がすと、スクライアは高町の手を取って立ち上がるよう促した。

「そろそろ帰らないと、家族が心配するよ。ナカジマさんも平気なようだし」

「え、でも……」

高町はそれでも何か心配だったらしい。まあ、あれだけ思い切り殴られる場面に出くわしたからな。笑顔で、平気だとアピールをした。

「大丈夫だよ。それより、ホント、ありがとな。また会った時にでも、お礼させてもらうよ」

「べ、別にいいよお！」

「ほら、行こうなのは」

半ば強引に、スクライアは高町をつれて医務室を出て行った。クロノに送ってもらうだろうけど、あいつ仕事だから大丈夫かな？

「……あー、俺が行くか」

重い腰を上げ、医務室を出て二人を追った。幸い、まだ遠くへ行っていたわけではなくて、角を曲がったところで見つけることが出来た。

「……なんですか？」

圧倒的なまでの嫌悪。慣れた視線ではあったが、同世代の子供から送られることのなかったそれは、存外にきついものだった。

「いや、クロノは忙しいだろうから俺が送ろう。元の場所でもいいんだよね？」

スクライアは嫌そうにしながらも、結局俺に従った。アースラの

構造もわかっていないから、当然の判断ともいえよう。ま、俺もアースラ内はまだ把握し切れてはいないんだがな。

アースラを降りて、ユーノ君と少しお話をした。歳が近いこととか、そういうの。

てっきり動物だと思ってたからびっくりしたけど、ユーノ君はいたって普通の男の子だった。安心。

フェレットの姿に戻ったユーノ君を肩に、家路につく。

夕暮れに染まる海鳴の街。夕日は綺麗で、でもどこか切なくて、さっきのユーノ君のミズキさんに対する態度が、思い出された。

激しい嫌悪感の間違いなくあった。ミズキさんは、見た目とは違って話した感じだとすごく優しそうだったのに。

「ねえ——ユーノ君」

「何？　なのは」

「ユーノ君は、ミズキさんの事、どうしてあんなに嫌がってたの？」
刹那——今まで感じたことのなかったユーノ君の鋭い気配に心臓が跳ねた。恐る恐る、横目でユーノ君を見やった。

「あいつは……」

聞いたことのないその声色に、恐れを抱く。

「あいつは、人殺しだよ」

「え……？」

海鳴に、一陣の風が吹いた。ユーノ君は恐ろしいものでも見たかのような瞳で、私を見つめていた。

第4話 消せない罪の印が、導いためぐりあいだった。

人が人に悪さをする時、それは絶対に譲れない何かがあるから。だから、どんなに悪い事をした人でも、分かり合えない事なんてない。だって。

一人でいる方が、もっと辛いんだから。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第4話 消せない罪の印が、導いためぐりあいだった。

翌日から、アースラ全クルーの任務はジュエルシードの搜索と回収に変更された。

そして特例。ジュエルシードの発見者であるスクライアと、現地魔導士の高町が臨時局員として任務に参加することが決まった。クロノは不満で一杯だったようだが、リンディさんの決定には逆らえないらしい。黙って事態を見守っていた。

アースラのロングアーチ局員がジュエルシードの位置特定をし、俺とクロノ、高町とスクライアが前線に出ていくという方針が決まり、それぞれが仕事に就くと、当然手持ち無沙汰となる人間がいる。クロノ以外の出撃メンバーだ。

クロノは執務官だけあってデスクワークも楽々とかなせるが、俺はそういうわけにも行かない。高町は論外だし、スクライアは頭はいいようだけど、さすがに臨時局員にこちらの管理局のデータを晒す事はない。

とりあえず雑務とでも思ったが、結構皆一人でも十分らしく、本
当に暇になってしまった。

「ミズキさん」

と、ぼうつと艦内を歩いていたら時だった。振り向くと、そこに
いたのは高町で、スクライアはいないようだ。まあ、あいつは俺のこ
と苦手なようだし、用事があってもついてこないか。

「高町か。どうした？」

声をかけると、高町は薄く笑って並行するように俺に並んだ。

「お話したいなって思っ。ミズキさんって、いくつ？」

「今年で9歳」

「あ、私と同じだ！ もう少し年上だと思っ。た」

「そうか？ 見た目、そんなに変わらないぞ俺たち」

「あはは。じゃあ、ミズキ君のほうがいいかな？ 同い年なんだし、
さん付けもおかしいかも」

高町と会話している最中、そういえば思い出したことがあった。
手首に目をやって、高町の眼前にスカイラインを持っ。ていった。

「高町、お前のデバイスって」

「あ、うん！ 私も思っ。てた！ ミズキ君の、レイジングハートに
そっくりだったの！」

それはこちらからしてもそうだ。

スカイラインは、本局の開発した新型デバイス。滞空戦用に作ら
れた試験運用デバイスだ。滞空戦に優れたレアスキルを持つ俺だか
らこそ、試験者に選ばれた。魔法が秘匿された管理外世界の、それ
もまだ小さな子供がもつようなデバイスでは決してない。

「そのデバイスだけど、一体どこ」

「レイジングハートは、元々僕のデバイスだよ」

声したのは正面からだった。スクライアが、俺と高町の道を塞
ぐように立っ。ていたのだ。

「遺跡の発掘中、ベースキャンプが襲撃を受けた。その時、僕らを
助けに来た人がくれたものなんだ。結界魔導士の僕には、宝の持ち

腐れだっただけだね」

スクライア。ベースキャンプ。襲撃。

それらの単語と、そしてスクライアの顔が重なり、捻れ、渦巻く。思い出される、一つの記憶。

それは、人が死ぬ時の感覚。目の前で命尽きる人間には、独特の存在感がある。そこにいるだけで、「ああ死ぬんだ」とわかってしまう。過去に、何度も味わった経験が、よみがえってくる。

初めて見た時、イタチの姿をしたスクライアの事が気に入らなかった。人間の姿へと戻ったスクライアを見て、理由が判明した。怖かったのだ。自分が犯した罪の、証拠が。

なぜなら。

「二年以上も前の事だけど、僕はあの日のことを忘れない。傷ついた僕たちを見下す視線を」

なぜなら。

「――白い翼の生えた魔導士の姿を、忘れはしない」

それは、俺が参加した作戦だったのだから。

数日後、スクライアによって張られた封時結界の中で、戦闘は行われていた。

封時結界は結界魔法の中でも上位とされるエリアタイプに分類されるもので、その効果は『通常の空間から特定の空間を切り取り、時間信号をズラす』というもの。

有体によえば、指定した区域とまったく同じ空間を複製し、その中へ対象者たちを押し込めるというもの。術者が許可した者以外、

中の状況の確認も干渉もできないため、このような魔法が存在しないとされる管理外世界では大きな効果をもたらす。

今回のジュエルシードは、どうやら鳥に寄生したらしい。全身に炎を纏い舞う姿は、さながら不死鳥を連想させる。とはいえ、ジュエルシードの寄生体など、熟練の魔導士からすればどうとでもなるレベルだ。だから、今回は俺とクロノは待機。高町とスクライアのコンビによる封印作業が行われていた。

スクライアの足元に広がるミッド式の魔方陣から発生した、緑色の魔力光をしたチェーンバインドが四本、寄生体へ絡みついた。スクライアの使うチェーンバインドは、俺の使うそれとは明らかに精度が違う。

チェーンバインドは扱いやすい反面、鎖の強度・射程・本数は全て術者の力量に比例するため、見ればその実力を察しやすい。スクライアは結界魔導士らしいが、あれはランク的にAは堅い。デバイスをを用いて、コントロールにのみ専念すればいい俺ですら三本が限界だというのに、すごい奴だ。

『捕まえた、なのは』

『うん!』

完全に捕縛できたのが確認できると、スクライアは木の上で待機していた高町へ声をかけた。高町は頷くと、デバイス―レイジングハートを天に掲げた。

《シーリングモード セットアップ》

途端、桜色をした光の翼が三枚、レイジングハートから生えた。やはり、俺のスカイラインとレイジングハートは同系列のデバイスらしい。

シーリングモードが、その証拠だ。本局の最新系統のデバイスにしか運用されていないモードなのだから、それ以外にはない。

今、高町が行おうとしているのは「シーリング」という魔法で、俗に言われる封印とは、ほぼすべてがこれをさす。

稼働中の魔法プログラムに割って入り、そのプログラムの機能を

停止させるものだ。しかし、対象のプログラムよりも大きな魔力量が必要であるため、相当な労力が必要とされる。

シーリングモードは、元々シーリング使用時のために開発されたと聞く。多機種にも似た機能はあるが、ここまでの完成度を誇るのはスカイラインと、おそらくレイジングハートに積まれているシーリングモードだけ。最大出力を劣化なしで、ほぼそのまま使用できるのだから。

《スタンバイレディ》

『リリカル！ マジカル！ ジュエルシードシリアル？、封印！』
《シーリング》

AIの音声が響くと、寄生体はうめき声の果てに宝石となった。地面に着地した高町は、その落下地点へレイジングハートの切っ先を向けた。瞬間、デバイスコアへ吸い込まれる宝石。

《ミッシング ナンバーエイト》

これで、終了か。モニターの近くにいた俺は許可をもらい、外部マイクを使って二人に呼びかけた。

「状況終了。ジュエルシードナンバー8、無事確保。お疲れさん、二人とも」

『はい』

『……』

高町は快活に答え、スクライアは黙ったまま。まあ、嫌われてしかるべきなんだろうけどさ。むしろ、あの話を聞いて態度を変えない高町が異常な気がするし。

「じゃ、ゲート作ってくれるらしいから、そこで待ってろ」

とりあえず、背後で二人の実力を見て、管理局に欲しい欲しいとうなっている艦長は、この際無視しておこうと決めた。

ピツ、ピツと。

エイミィのキィを叩く音は、リズムに均整が取れていて、聞いているとすごく心が落ち着く。モニターに映る、今回のジュエルシード事件をややこしくしている黒衣の魔導士も、この落ち着いた心で会えたならば、戦わず論す方向でいくかもしれない。そのくらい、僕の心は平静でいた。

「この黒い服の子……フェイト、って言ったっけ」

「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導士と、同じファミリーネームだ」

僕がそういうと、エイミィはキィから手を離して、椅子を回して僕の方を向いた。

「へえ、そうなの？」

「大分、前の話だよ。ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして、追放されてしまった大魔導士」

「その人の関係者？」

椅子に座っている関係上、エイミィが僕を見上げる形となっている。上目遣いの彼女には、常にならない魅力が内包されていて、少しだけ心臓が跳ねた。そのことを悟られぬよう、表情は平静を保った。

「さあね。本名とも限らない」

第97管理外世界だけでなく、近接する平行世界にもいないか、彼女の魔力を検索にかける。けれど、芳しい結果は得られない。

「ああ、やっぱり駄目だ、見つからない。フェイトちゃん、よっぽど高性能なジャマー結界を使ってるみたい」

手を伸ばし、今度は僕がキィを叩いてモニターを変更させた。オレンジ色の、狼が映し出された。

「使い魔の犬……たぶん、こいつがサポートしてるんだ」

あいつとは、一度戦ったからこそわかる。ただの使い魔では決し

てない。かなり高性能に作り出されている。とてもじゃないが、あのフェイトって子を作ったようには思えなかった。触媒に何か、強い思い入れがあったのならば、話しは別だが。

「おかげで、もう二個もこっちが発見したジュエルシードを奪われちゃってる」

そう。あれから僕らも黙って事態を見ていたわけではない。こちらでも、ジュエルシードの反応を感知し、行動に移していた。けれど、それでもフェイトたちは横からそれを搔っ攫っていった。大規模な戦闘はおろか、僕らよりも早く目的地にたどり着くのだから打つ手がない。

「しっかりと探して捕捉してくれ。頼りにしてるんだから」

「はいはい」

エイミィに悪態をついてみると、彼女は不満そうに答えた。しかし、それ以外に方法はない。直接ぶつかり合えば負けはないだろうに、捕まえる事ができない。肝心の、対峙することが出来ないのだから。ロングアーチきつての通信士の彼女に頼るしかない。

この件が終わったら、何かゆっくりお礼でもしないとイケないな。ふと見れば、モニターに移るフェイトがまるで僕たちをあざ笑っている。そんな風を感じられた。

高町たちと共に事件にあたって、今日で10日が過ぎた。

自分の部屋のベッドに横になり、今までの成果について、俺は考えていた。

管理局側が手に入れたジュエルシードは、・・・??の計三つ。

発見までは至ったものの、テストロッサたちに奪われたのは？と？の二つ。管理局介入までに高町が六個、テストロッサが四個手に入れたことを考えると……残るジュエルシードはあと——六つ。

腹が減っては何とやら、だ。

小腹がすいた俺は食堂へ来ていた。クロノたちと違い、探查系に關しては門外漢であるから、空振りが続く最近では役立たずの感が否めない。言え、やることがないのである。

「……はあ。今日も空振りだったねえ」

「うん……もしかしたら、結構長くなるかもね」

と、食堂にはすでに先客が二人、いたようだ。高町とスクライアの二人だ。他に人がいなかったためか、声をかけるのが憚れる。こちらに気付いていないようだが……戻るか話しかけるか、少し迷う。スクライアは俺の事を嫌悪していて、けれどそれは当然の事で。こちらの存在を示す事に戸惑う理由はそれだった。

立ち聞きなんて、決して良い行為ではなかった。けれど、スクライアの高町に対する「さびしくない？」という問いの答えが、俺を食堂にくくりつけた。

つい最近まで、孤独だったという高町。それは、俺にはない哀しみの色だった。

本当の両親なんていない。であるから、物心ついた時から家族に疎外される感覚など、味わう事がなかった。けれど、家族が出来た今ならそれが、どれほど年端もいかない子どもにとって辛い事か。理解できなくても、推察できた。

気丈に振舞う高町だったが、その瞳に隠れた孤独を察せない程、俺もスクライアも鈍感でなかった。そして、話はスクライアの家族へと移る。スクライアが、部族の皆が家族であると言ったその時、彼の顔が動く。視線が俺を捕らえた。

「だから僕は、そこで盗み聞きしてる奴を、絶対に許さない」

「え……、ミズキ君っ？」

どうやら、スクライアにはばれていたようだ。嘆息して、二人のいる方へ近づいた。

「悪い、聞くつもりじゃなかった……って、実際聞いちゃったからな。言い訳にもならんか」

「ううん、わたしは別にいいよ。ユーノ君だって、怒ってないよ、ね？」

確かめるように、同意をとろうとした高町。そんな高町の言葉に答えることなく、スクライアは黙って俺を見つめていた。

「ねえ、なのは。非殺傷設定されていない魔法がどれだけ強力か、想像つく？」

「え……」

「とてもじゃないけど、対抗策を持たない人間なんて相手にならない。デイベインバスター一発でも、そこら一帯は焦土と化す」

思い出される、一つの風景。土が抉れた大地と、いき絶え絶えな人々。身体の一部が消し飛び、意識すらもうない人に、そもそも人間だったのかもわからない肉片。いくら俺の魔力量が低くても、あれだけ詠唱に時間をかけて、近距離で放てばあなる。あの時、ただ俺は作戦を実行しただけだった。管理局員がキャンプしていると、誤った情報の元。

「四人、死んだ。六人、障害を負った。こいつは、管理世界の平和を守るなんて、出来る存在じゃない。人を奈落に落とす事しか、できやしない！」

「……」

まったくの正論だ。実際、魔導士と戦うよりも、無抵抗な人間を相手にする方が得意。奇襲作戦ばかりしていた俺が得たものは、そんな戦い方ともいえないものだった。

「ごめん、なのは。部屋に戻るよ」

「待って！」

高町の静止の言葉むなく、スクライアは食堂を出て行った。：
：気にしているのだろうか。高町は俯いたまま、けれどちらちらと俺を見ていた。本当に優しい子だ。圧倒的な悪である俺のことを心配してるなんて。

俺は、そんな高町の悲しい顔を見たくなくて、右の掌を高町の頭へ置いた。

「あ……」

「さんきゅーな。ま、俺は気にしてないから、高町も気にするな。

大体、真実である事に変わりはないんだしな」

「真実って、」

「真実さ。この間も話、したろ？」

高町には、俺が過去ゲリラに参加していて、管理局員がいると勘違いしてスクライアのキャンプを襲った事を話していた。紛れもない事実だ。言い逃れなんて出来ないし、するつもりもない。過去は過去で、事実は事実。覆せる過去なんて、存在しない。

「だけど、今は違うって」

「ああ、違うさ。あの頃とは価値観も考え方も、何もかも。……だけど、スクライアにとってのミズキ・ナカジマは、いつまでも『ミズキ』のままなんだ。変わりはしないし、変わる必要もない」

踵を返して、高町に背を向けた。

「過去に犯した過ちを、悔いはしていない。けれど、その過ちが元となって傷ついた人々は確実にいて、だから俺はそんな人たちにとって、『標的』でなければならぬ。憎悪の感情を吐き出すためのな」

「間違ってるよ、そんなの」

「間違ってる、結構。俺は俺が逃げる事で、大切な人たちが被害を被るのが嫌なんだ。家族を、クロノたちを、俺の犯した罪のせいで苦しめたくない」

数歩歩いて、そして、振り返る。泣きそうな高町に、歯を見せて笑いかけた。

「高町は何も気にするな。スクライアと、気まずい雰囲気になったら俺を『だし』にすればいい。悪口を言う対象がいるってだけで、結構違うらしいぞ」

刹那——高町とぶつかった。というか、高町がタツクルしてきた。そんなに身長が変わらないのだから、正面衝突すれば自然と額と額がごつつんこだ。痛い。地味に痛い。

見れば、高町も痛そうに額を押さえてる。かわいいが、その姿はなんだかむしように笑えた。

「あ……」

「大丈夫か？」

頭に手をのせて、ゆっくりとなでる。優しく、優しく。髪をすいた。

「……やっぱり、違うよ」

高町がポツリと、頬を赤らめたまま呟いた。

「ミズキ君の手、こんなにもやさしいもん」

「……そうか」

と、そのときだった。けたたましいアラーム音と共に、艦内に放送が流れた。

『エマージェンシー！ 搜索域の海上にて、大型の魔力反応感知！』

「……テストロッサかつ」

「ミズキ君！」

「ああ！」

「な、なんてことしてんのあの子たち！」

エイミィさんが画面を凝視したまま、そう叫んだ。

それは、暴挙なんてレベルじゃない愚考。テストロッサが行おうとしていた事は、間違いなく己の破滅を呼ぶ行為だった。

海の上で浮遊し、膨大に魔力を蓄えていくテストロッサ。

彼女たちも、ジュエルシードが海の中にあると予測を付けたんだ。だから、海に魔力流を流し込む事で強制発動、位置を特定し封印。

一見、理にかなったようにも思えるこの策だが、ならば何故俺たちもやらなかったかだ。

当たり前だ。六個のジュエルシードの暴走を止めなければならないうえ、さらに言えば発動の為に魔力を消費した状態での戦闘になる。どれだけの魔力量があれば、それが可能になるというんだ！

雷に変質したテストロッサの魔力が海に叩きつけられたかと思うと、天上へ上がる六本の青い光の柱。それぞれが、ジュエルシードの暴走体。なんて、力の爆発。あんなもの、俺やクロノでも一人じや厳しいぞ！

「あの！ わたし急いで現場に！」

「その必要はないよ」

慌ててリンディに駆け寄る高町に、クロノが一睨みをきかせた。

「放っておけば、あの子は自滅する。仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで、叩けばいい」

クロノの非情な言葉は、高町の足を止めた。管理局として、方針は何も間違っちゃいない判断だ。

「でもっ」

「今のうち、捕獲の準備を」

高町の動揺などまるでないように、ロングアーチスタッフにクロノは命令を出した。

そうこうしている間にも、画面の向こう側ではテストロッサがジュエルシードとの戦闘を繰り返していた。優勢とは、とても言えない。明らかな劣勢。勝てる見込みは、恐らくない。

「私たちは、常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実」

「でも……」

（行け、高町）

(え、ミズキ君?)

念話で、高町へと語りかけた。驚きのあまり、高町は振り返って俺を見たが、誰も俺たちが念話をしているとは気付いていないようだった。

(転送は俺がしてやる。なに、すぐに俺も行くから心配するな)

(でも、そんなことしたら……)

(俺だって、テストロッサをみすみすこのままにしておけない。なに、管理局を首になったところで、俺はまだ九歳だぜ? 人生これからさ)

似合わないウインクをしてみると、いくらか高町の心は落ち着いたらしい。そこで俺は、この念話を別の人物へ繋げた。

(お前も、送ろうか?)

(……僕は自分で行くからいいよ)

(ユーノ君?)

今管制室へやってきたばかりのスクライアも、俺と同じ事をやろうとしていたらしい。後日、聞いた話だ。空気読めとか、色々言われた。

(じゃ、転送ポートまで走れ!)

瞬間、高町の近くにあったポートが光り輝いた。転移座標に結界侵入の付与効果を付けたゲート開く。

「ミズキ!」

クロノが叫ぶが、あの位置からじゃ高町を止められやしない。すでに、高町はポートの上に立っていた。

「ごめんなさい、高町なのは。指示を無視して勝手な行動を取ります!」

「転送!」

俺の言葉が起動ワードとなり、見る間に高町の身体は透け、その場から消失した。

すぐに、スクライアも後を追って結界内へ飛ぶ。

「ミズキ、君は何をしているんだ!」

「クロノ……」

度重なる管理局に対する反発といえる行為。だけど、俺は後悔はしない。テストロッサの自滅を待つのは、最善の策だ。だけど、それが正しい行為かといえば、『俺的』にはノー。俺は、テストロッサを救いたい。

きつと、テストロッサにとって母親とは全てなんだ。己にとって、一番大事なものの。それがわかったから、あの時逃がした。そして、今もあの娘は母親の為に無茶をしている。なら、手助けがしたい。ただ、それだけ。

「待て、ミズキ！」

「悪い、文句は帰ってから聞くわ」

二人に続いて、俺も転送をする。今度は、大魔力に流されないよう、きちんと座標設定をしないと。

何者かが、結界を抜けて入ってきた。作成者として、当然わかる。例え今、手が離せない状況だとしても、あたしが作った結界だ。異変に気付かぬわけがない。

現れたのは、純白の魔導士。なのはとかいう子だった。

「フェイトの、邪魔をするなあ！」

ジュエルシードを狙って来た事は明白。魔導士に向かって、あたしは突進を開始した。しかし、すぐに目の前に展開されたミッド式の魔方阵に阻まれる。あの使い魔（だと思う）少年がそこにいた。

「違う！ 僕たちは君たちと戦いに来たんじゃない！ まずジュエルシードを停止させないと、まずい事になる！」

「あっ！」

と、少年はすぐさまあたしの眼前から離れ、ジュエルシールドが暴走している只中へと飛び込んだ。大きな魔法陣が発生して、チェー
ンバインドが形成される。

「だから今は、封印のサポートを！」

六本生まれたチェーンはそれぞれ一本ずつ、ジュエルシールドに絡みつくが、あの程度で抑制できるとは思えない。

いつの間にかフェイトのそばにいた魔導士に目をやると、デバイスから魔力を分け与えている姿が視認できた。

本当だったのか。この子らは、本当に戦いに来たわけではないらしい。

そうとわかれば……！

「ああっ……ぐっ！ えっ？」

力が足りず飛ばされかけた少年を助けるため、あたしもチェーンバインドでジュエルシールドを縛った。

あとは、ご主人様頼りだ。

少年と目を合わせ、頷きあう。二人が封印を終えるまで、耐え抜く！

そして数瞬後……先程まで荒れていた海は落ち着きを取り戻した。なんて馬鹿みたいな魔力だったのか。一瞬の事だったのに、まだ背筋が凍える。あの子もフェイトも、とんでもない少女だ。

その時だった。

「母さんっ？」

フェイトが天を仰いだ。見れば、紫色の雷が雲間を行きかう。あれは、あの色は、アイツの魔力！

途端、フェイトの頭上から降り注ぐ一撃。視認できている間、間に合う距離ではない。身体が重い。ひどく重い。もどかしくて、やるせなくて、ただフェイトと雷が接近していくのを見ていることしか出来なくて。

「うあああああ！」

フェイトの絶叫が木霊した。白の魔導士は飛ばされたが、あたしは目もくれず人間形態へ。落下していくフェイトに向かって飛び、キャッチ。そのままの勢いで、ジュエルシードへ向かった。

しかし、そのすべてが閃光と共に消えうせる。六個すべてがだ。

「なっ」

「約束は、半分こだろ？ 封印じゃまったく役立たずだったのが少し悔しいんでしゃばってみました」

そこにいたのは、いつぞやの管理局の魔導士。あの、光の翼の方だ。

「そんな怖い顔すんなよ。ほら、三つはくれてやる」

投げ渡された三つのジュエルシードを掴み、睨み付ける。これっぽっちじゃ、足りない。あのクソ婆を納得させるには、全然足りない。

「邪魔を……っ」

（俺を連れて行け）

届いたのは念話と、真剣な瞳。

雨が降りしきる中のことだった。フェイトの天使は、再度同じ言葉を使った。今度は口で、振動をあたしの耳へ伝えた。

「俺を、テストロッサの母のところへ、連れて行け」

幕間

第4・5話　これからを共にする相棒は、ひどくおせっかいな奴だった。

「新型デバイスの、試験運用者？」

「うん。それを、ミズキに頼みたいなーって」

マリーはそう言うのと、にかっ、と歯を見せて笑った。

今俺がいるのは、本局に付属する管理局技術部の、デバイスを専門的に扱う部署だ。目の前で小悪魔気味の笑顔を見せている女性はマリエル・アテンザ。ナカジマ家とは中々、縁の深い技術士だ。

まだ15か16か、歳はそのあたり。垂れ目で太眉。緑色のショートヘアはよく見れば寝癖が所々ついていたり、部屋が汚かったり。この人の綺麗なところって、眼鏡以外にないんじゃないかってよく思う。まだまだ花の十代なのに、この人は一に機械、二に機械と、根っからの「オタク」なのだ。成人する前から、きつと嫁の貰い手に困る事だろうってことが簡単に予測できる。

候補生生活も残り三ヶ月と迫った今日、非番の日に俺はマリーに呼び出された。理由は、さっき聞いたとおりだ。

「何で俺に？　そもそも候補生だし……」

「うん。ぶっちゃけ、私が通した企画だったからね、私が選ぶ相手なら誰でもいいんだ。もちろん、適任の人事である自信はあるよ」

自信満々に胸をそってみせたマリーのが、キラリとひかった。あいかわらず、りっぱなでこだ。

「適任、ね」

「うん、適任。ミズキは、まだ専用デバイスとか使ってなかったよね？　ちょうどいい機会だし、どう？」

確かに、俺は今管理局推奨のストレージデバイスを使用していた。デバイスなんて高価なものを買う予算がないってのが一番の理由。

「とりあえず、どんなデバイス？」

そう。まずはそれからだ。そりゃ、管理局の基本デバイスなんかより優秀なんだろうけど、俺に使いこなせないのならば、試験にならないだろうし。

「そうだね。基本的には普通の杖型インテリジェントデバイスなんだけど」

インテリジェントデバイスとは、収納・展開機能を持っただけのストレージデバイスとは違い、AIを搭載することによって意思を持たせた機種の事だ。デバイスに判断力と行動力を持たせる事で単独での魔法発動を可能とした、上級魔導師向けのデバイス。ストレージデバイスと対をなすが、この二つは一長一短の性能であるが、使う人口はストレージ型の方が多い。

インテリジェントデバイスは戦闘面で使用者を支えるが、上級者向けという言葉は伊達でなく、素人がおいそれと扱くと逆に振り回されてしまう。

ただ、インテリジェントデバイスが上級者向けだからといって、ストレージデバイスが初心者向け、というわけではない。純粹な道具であるため、所有者の実力がそのまま発揮される。5+5が7になったり12になったりするインテリジェント型とは違い、5+5は10。安定した性能で戦う事ができる。また、自我が強い性格の人間には、どちらにせよストレージ型でなければ使えないだろう。

「通常モード以外に、射撃系・砲撃系に特化した『シューティングモード』。そしてこれが重要なんだけど、技術部きつての新システム『シーリングモード』を搭載。これまでのデバイス以上に、使い手を選ばない機種を目指したわ」

デバイスがプログラム起動をする際発生する抵抗成分を極力廃した新モード、とのことだ。なるほど、だから俺が選ばれたのか。

「つまり、魔力量が少ない魔導士でも大出力で攻撃が可能だ」と

「あたり。まあ、それ以外にも元々、このデバイスを空戦魔導士用に作ったってのもあるんだけどね」

つまりは、近い人間で一番適当な人材だったわけだ。

反対する理由は……特にないか。マリーには妹たちが世話になっているし、日ごろの恩返しと思えばいい。

「ああ、いいよ」

「やった。それじゃ、はいこれ」

と、すぐに手渡された青く小さな珠。どうやら、俺が断るとは一欠けらも思っていなかったらしい。やれやれと嘆息しつつ、それを受け取った。

「名前は『スカイライン』起動パスワードは……はいこれ」

受け取ったよれよれの小さなメモに、微妙に長い文章が羅列されていた。

「起動パスは、最初だけでいいはずよ。もっとも、スカイラインが貴方をマスターと認めたなら、ね」

「ふうん」

インテリジェントデバイスには意思がある。つまり、己を使うに値しない者をふるいにかけるということか。

「ま、認められなかったらそんな時考えればいい。とりあえず、これを読めばいいんだろ？」

「ええ」

マリーが頷いたのを確認して、俺は起動パスワードを読み上げた。俺とマリー以外誰もいないこの部屋で、響く自分の声にはどこか違和感を感じる。俺は、果たしてこんな声をしていたのだろうか。

「我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て。風は空に、星は天に、そして空を翔る意思はこの胸に。この手に魔法を。スカイライン、セットアップ」

《スタンバイレディ セットアップ》

白い光に包まれる。それは、ミズキ・ナカジマの魔力光。恐ろしいほど似合っていないその色を、俺はあまり好きでなかった。けれど今、この瞬間だけは、本当に綺麗なものに見えた。

纏うは、魔道の装飾。俺の中にあるイメージが形となって、バリアジャケットを形成した。そして、手元に飛んできた一本の杖。標準的な管理局のデバイスに酷似しているながら、確実に違うそれを握り締め、薄く開いていた眼をこじ開けた。

「ふう」

……と、目が合ったマリィはきよとん、とした目で俺の全貌をその瞳に写していた。どうしたのだろうか、そう思っていると、

「ダサッ！」

胸に突き刺さる一言を、色気もへったくれもないでこ野郎に言われてしまった。地味にショックだ。

「それ、旧式の管理局員正装じゃん！　あまりのダサさに、数年前に若い局員たちがストライキまで起こして変えてもらった、いわゆるつきの！」

「……そんなに、ダサいかな」

わからん。俺にとって、魔導士とはこの服のイメージなんだよな。何かバリアジャケットをイメージしろといわれたら、迷わず選ぶくらい印象が強い装束なのに。

「とりあえず、そんなダサい格好した人に試験者やってほしくない。変えて。変えろ。とにかく変えろお！」

「わ、わかったよ……」

とはいえ、俺じゃデザインなんて無理だな。ギンガとスバルに頼むでしょう。

スカイラインを待機状態に戻し、バリアジャケットを解除した。

「それじゃ、俺帰るわ。この後、母さんたちと出かける約束してるからさ」

「あ、うん。とりあえず、使ってみた感想とか、意見とかばしばし

よろしくね」

「おう」

スカイラインを手にして、今日で丁度一週間。

それまでにデバイスを使うほど大きな、というより、1321航空隊は事件に何一つ関わっていなかった。珍しい週もあるものだ。ま、すぐにいそがしくなるんだろうけどな。

「あー、終わった。スカイライン、今何時だ？」

《六時十二分です》

「レールウェイの時間わかるか？」

《たった今出発したようです 次の発着時刻は三十分後です》

「そうか……」

《……》

とまあ、このざまだ。

意思を持つらしい、インテリジェントデバイスであるスカイライン。意思を持つという事は、感情を持つという事と同義である。だから俺は、これまで色々とスカイラインに『話かけ』てきた。スカイラインはキチンと受け答えしてくれるが、しかし何か違う。

そう、無機質に、ただ応えてくれるだけ。機械相手に何をと思われるかもしれないが、俺はまだ、スカイラインに心を開かれていないんだと思う。

何より、スカイラインのそんな態度は、俺をイラつかせた。見ているだけで湧き上がるその負の感情を、けれどスカイラインにぶつけるのはかど違いだと思い自重する。

と、その時だった。右肩が、強い力で後方に引っ張られ、背中を強く大地に打ち付けた。思わず出る咳と、痛む背中。

見上げれば、そこには見知った男性が数人。ああ、そうか。今日は、だいぶストレスがたまっているらしい。

すぐに路地裏に引っ張り込まれた。

これは、仕方のないことだ。耐え忍ぶのが、最良の選択。

どんな事をしようと、過去に犯した過ちを消し去る事はできない。知らなかったなんて言葉では、消えてくれない。ならば、これは償いだ。購いだ。甘んじて、すべてを受け入れる。これから、俺が貫きたい正義を貫くための、代償。そう思えば辛くなんてない。

腹部に走る激痛。胃から零れ出た液体が口内ではじけ、また胃へと戻っていく。ほのかにすっぱいその味は、吐き気を催す。

蹴り飛ばされた右腕は、びりびりとしびれ、感覚がない。元の位置に戻そうものならば、また蹴られる。けれど、感覚がないその部位にとって、痛みなど些細事で。

踏みつけられた両の足。立つとき、痛いんだろうなと、ふと樂觀した考えが生まれて自嘲した。

見上げた空。クラナガンの空。

凍えるような寒さが、暗く沈む太陽が、すべてが俺を嘲り、笑っているように思えた。

《よろしいでしょうか マイマスター》

「ん？」

レールウェイから降りて数歩。

ホームから家までの道のりを歩いている最中だった。スカイラインが声をかけてきたのは。

スカイラインから俺に声をかけてくるなんて、今までになかったことだ。つつい嬉しくなって、意気揚々と応えた。

《何故抵抗しなかったのですか》

それは、さっきの男たちの事だろう。上がっていたテンションが、少し落ち着きを取り戻した。なんで、そんな事を聞くのか。

マリーが、元々俺に渡すつもりだったなら、俺のデータがインプ

ットされていてもおかしくない。であるならば、理由くらい、察せれるはずだが。

「あれは、受けて当然の仕打ちだって思ってるから」

《理解できません 理不尽な暴行です》

おそらく、スカイラインには理解できないだろう。

……そうか、たった今気がついた。

こいつは、昔の俺によく似ているのだ。無感情で、我関せずで、自分のことはおろか他人のことなんてちっとも考えてこなかった、あの日々に。

だから——壊したくなるほどにイライラする。今すぐにでも叩きつけて、破壊して、なかったことにしてしまいたい。過去の自分。消せない烙印。けれど、せめて目に見える範囲だけでも、なくしたい。

「スカイライン。俺のデータはどこまで？」

《はい 管理局入局後とそれ以前一年のデータはすべて》

「なら、俺の罪はわかるだろ？ あれは、受けて然るべき」

《わかりません》

思わず立ち止まった。わからない？ そんなわけがない。俺は、多く、人の命を奪ってきた。そのことはすでに立証され、白日の下に晒されているんだ。

《『罪』に該当するデータはありません》

「俺は、たくさん人を殺した。傷つけた」

《はい》

「なら、受けるべきなんだ制裁を。管理局に勤め、正義への奉仕だけで許される事なんかじゃ決してない」

《わかりません》

「っ、」

駄目だ。こいつとは『そり』が合わない。試験運用者は無理だと、マリーに返そう。

そう、心に決めたときだった。

《マスターの犯した事が あのような不条理に繋がる理由が》

それは、初めて聞く声色だった。ずっと同じで、抑揚なんてなくて、ただただ無感情なそれは、なぜか確かに俺の中で色づけされた。怒りをあらわにする、赤色に。

《マスターの罪を償う態度は紳士的であり とても美しいと思います けれど ただ暴力を受け入れ 受けて当然だと諦めるのはただの逃げです》

矢継ぎ早につむがれるスカイラインの言葉は、俺を動揺させた。気に食わなかった本当の理由が、そこで判明した。

似ているようで、全然違ったのだ。スカイラインは過去のミズキとそっくりでいて、けれどその裏で確かな感情を内包していた。生まれたばかりで、何も知らないはずのスカイラインですら持っている感情を、何一つ理解できなかった自分が過去にいたことが、どうしようもなく憤って、悲しかったのだ。

「お前とは、色々合わないみたいだな。マリーに返品するよ。お前だって、そのほうがいいだろう？」

《否定です》

スカイラインの言葉を無視して、無言で、家路を歩く。

まだ、家には着かない。いつもより、足取りが重たいようだ。教育があったからか。思い出すと、また痛みがぶり返してきた。

《マスター》

「……なんだ」

《もうしばらく 手元に私を置いてみませんか》

「何故？」

《私は必ずマスターの助けになります 戦闘面だけでなく 精神面でもマスターを支えます 必ずです》

どうしてそんなことをスカイラインが提案したのかはわからない。そもそも、インテリジェントデバイスとはここまで感情を吐露する機械なのかと疑問まで持った。

確かに、インテリジェントデバイスが生涯のパートナーになるっ

て話はよく聞く。けれど、俺とこいつは出会ったまだ一週間だ。どちらからにせよ、思いいれなんてほとんどないはずだった。

《返答を》

なのに、コイツは俺のそばにいると言う。

「俺は、お前の望むマスターにはなれない。色々あるけどさ、例えばさっきの。あんな暴力をなんで無抵抗で受けたかつつと、やっぱり家族の為」

こんな俺にも、今は大事な家族がいる。友達もいる。

俺が発展となって、迷惑をかけたくないし、かけるつもりもない。スカイラインが気に食わないのが『俺が無抵抗に暴力を受ける事』ならば変えようがない。

《精神面でも支えます 必ずです》

先程と同じ台詞。機械的でありながら、でも本当に機械であるならこんなにも感情を感じさせないとわかる。

俺のことを、大事に思ってくれているんだって、思う。

勘違いかもしれないこの考えだが、けれど俺を大事だと思ってくれる奴を、無下に扱うなんてできない。ギブアンドテイク。想いを受け取ったなら、想いで返すのが『ミズキ・ナカジマ』の在り方だから。

「……精神面で支えるってなら、もうちょっと愛想よくしないとな」冗談交じりのその言葉に、スカイラインは躊躇せず答えた。

《善処します》

「それができるなら……まあ、一緒にいてもいい、ぜ？」

《感謝します マイマスター》

無機質なAI音声。けれど、やはりその裏に見え隠れする『色』が、俺にははっきりと見えていた。

デバイス状態 良好

使用者 ミズキ・ナカジマ

年齢 9

魔導士ランク 空戦A+

戦闘タイプ ミドルレンジからの射撃・砲撃中心

家庭環境 両親健在 妹が二人

性格 やや不明瞭 己を軽視する傾向あり

備考 sasasetai. (このデバイスでは一般化されていない言語です)

第5話 絶対的な悪役が、物語には必要だった。(前書き)

テンプレ展開が続き、申し訳なく想っております。もうしばらくすれば、きっと脱する？ はずです。

※注

物語中でのキャラクターが発言する内容、一人称での表現内で「なんじゃこりゃ」と思われる寒いギャグなどあるかもしれませんが。この作品のコメディ描写だと思って、軽く受け流してくれると嬉しいです。

第5話 絶対的な悪役が、物語には必要だった。

味方でいようと決心したのは、その悲惨な姿を見たから。けれど、同情じゃない。自分にとって、その存在こそがすべてだから。

ただそこにある、かすかな光を守りたいだけなんだ。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第5話 絶対的な悪役が、物語には必要だった。

雨が降る。ひどいくらい、強い雨だ。

肌に当たるそれは痛いくらいで、水なんかじゃない、針でも降っているんじゃないかって錯覚するほど。もちろん、そんなことはなくて。ただ、皮膚が敏感に刺激を感じ取ってるだけ。

隣に浮くユーノ君は、ただ虚空を見つめ唾然と。

クロノ君は、苦虫をかみ締めた表情を変えないまま、一心不乱に一点を凝視する。デバイスを握り締める手はぶるぶると振るえ、もう片方の手は強く握り締める。

そこには、ミズキ君がさっき投げ渡したジュエルシールドが三つ、存在していた。

わたしたちはただ、一方向を向いたままだった。

ミズキ君が、行ってしまった方向を。

『三人とも、戻ってきて』

アースラから届いた念話。それはリンディさんのものだった。

「……了解」

クロノ君はしばらく黙っていたが、きちんと答えた。デバイスを握る手がふるふると震えていた。

『で、なのはさんとユーノ君には、私直々のお叱りタイムです』

リンディさんの言葉遣いが優しいのは、きっと今のこの暗い雰囲気はどうにかしたかったからだと思う。

わたしもユーノ君も、ただその言葉に従ってアースラへ戻った。色々と、考えたい事は全部、その途中でめぐらせて。

わたしとユーノ君、リンディさんの三人しかない部屋で、長机の対面に座るリンディさんは表情を険しくさせていた。

「指示や命令を守るのは、個人のみならず、集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動が、貴方たちだけでなく周囲の人たちをも危険に巻き込んだかもしれないという事、それはわかりますね？」

「はい」

わたしたちは即答して答えた。二人の声が重なる。やけに部屋に響いた。

「本来なら、厳罰に処するところですが、結果として、いくつか得るところがありました。よって今回の事については、不問とします」思わず俯いていた顔を上げ、隣を見る。ユーノ君も同じだったように、二人の視線が交錯した。

「あ、あの。ミズキ君は……」

わたしの言葉に、リンディさんの眉間に皺がよる。びくりと、背筋が伸びた。

「彼は正規の管理局員ですし、また違った対応になります。……帰ってきたら、貴方たち以上にきつゝい、お叱りタイムですね」

リンディさんは最後笑顔で締めたけど、目が笑ってなかった。ミズキ君、早く戻ってこないと危ないの！

「ただし。誰にも、二度目はありませんよ。いいですね？」

「はい」

「すみませんでした」

わたしが頷いて、ユーノ君が謝罪を述べて、二人で頭を下げた。

「さて、ミズキ君のこともあるし、問題はこれからね。クロノ、事件の大本について何か心当たりが？」

「はい」

クロノ君がいることに、立った今気がついた。すごい、まるで気配を感じなかった。

「エイミィ、モニターに」

「はいはい」

と、今度はエイミィさんまで。

アースラ局員は皆、隠密スキルを発動させているのだろうか。ヘビィボウガン厨のわたしにはあれ、パーティプレイで重宝するスキルなんだよなー。と、最近アリサちゃんたちとはまってるゲームについて思い出してしまった。いけないいけない。

エイミィさんが長机によると、中央付近の宝石が光って、空中に一人の女性が映し出された。それに付随して、いくらかデータらしきものが羅列されている。まったく読めない。日本語じゃないみたいなの。

「あら」

なんとなく、エイミィさんは知っている顔らしかった。声色からそのことが伺えた。

黒髪ロングのその人は、髪の毛が長すぎるあまり半分以上顔が隠れている。服装も黒一色って感じで、大きくスリットのあいた胸元から除く谷間がすごく……セクシーとは、言いがたいの。結構歳だし。

「そう。僕らと同じ、ミッドチルダ出身の魔導士。プレシア・テストタロッサ」

テストタロッサ。フェイトちゃんと、同じ苗字なの。

「専門は、次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら、

違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データと、さっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトはおそらく」

その時、つい先程の事が思い出された。

紫の雷が雲の上で泣いたあの時のこと。

「フェイトちゃん、あの時『母さん』って」

「親子、ね」

リンディさんの表情がまた険しくなる。わたしは戸惑いながらも、意見を口にする。

「そ、その。驚いていたって言うより、なんだか怖がってるみたいでした」

あれは、確かに怯えた人の目だった。

「……エイミー！ プレシア女史について、もう少し詳しいデータは出せる？ 放逐後の足取り、家族関係。その他何でも」

「はいはい、すぐ探します」

エイミーさんは軽い敬礼を取った後、すぐに部屋を出て行った。

クロノ君が、それについていく。

ミズキ君がいるのはきつと、この人のところ。だからクロノ君は、いち早く情報を手に入れるためにいったんだと思う。

「この人が、フェイトちゃんのお母さん」

嫌な予感がする。

ずっとプレシアをみていると、背中を駆け抜ける不思議な感覚に襲われるのだ。薄ら寒い、鳥肌が立つような。

ひどく、嫌な予感がする。

「母さん！ もう止めて！」

室内に響く乾いた音。打ちつけられる鞭の尾。

あー、痣確定だわこの痛さ。

テストロッサが今まで、こんな仕打ちを受けてきたのだと思うとぞっとする。とてもじゃないが、家族に対する行為じゃない。

うわ、はあはあ息つきながらもまだ叩いてくるし。ホント、勘弁してください……とは、言えないか。言ってしまうえば、対象がテストロッサに移るだけ。なら、耐え忍ぶのが吉だ。

「はあ、はあ。貴方がいけないのよお、フェイト。あれだけの好機を前にして、ただぼうつとしてるだなんて。ふふ、それにこの子が言っただんじやない。『テストロッサを打つくらいなら、俺をやれ』って」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

その謝罪は、果たしてどちらへ向かってのものなのか。泣き喚くテストロッサは俺もババアもどちらも視界に納めておらず、わからない。彼女の身体は紫色の魔力光を帯びたライトニングバインドで固定されているため、動けないでいた。

暴力というのは、受ける時必ず無心でなければならない。考え事をしてしまうと、ひどくいびつな答えを呼び寄せてしまうから。これ、経験談。

だから俺は思考をそこで停止させる。ただ、あるがままに受け入れる。

「ぐっ」

また一発分、鞭がしなった。テストロッサの泣き声が、一層強くなった。

「本当、この子良い提案をしてくれたわあ。フェイト、貴方にはこちらの方が『効く』みたいだし、ジュエルシードを集める貴方のその大事な身体を傷つけずともすむ。ふふふ」

また一発。

テストロッサの泣き声の中、乾いたその音色はどこか美しく聞こえた。

しばらく続いていたらしい拷問まがいの事は、いつの間にか終わっていた。

目を覚ますと、そこにあったのは目を真っ赤にして、心底安心した顔を見せるテストロッサの顔だった。

「ごめんなさい……」

思わず、謝るテストロッサの頭に手を伸ばして、軽く撫でた。

「泣くなよ。俺がしたくてしたことなんだし。……ま、鞭でって言うのが、少し想定外だったがな」

しかし、色々とはっきりしたこともある。とにかく、今回の収穫はそれだ。

「テストロッサ」

今なお泣き顔でいるテストロッサの頭を撫でつつ、俺はある提案をすることにした。

「俺と一緒に行こう。逃げるんだ」

「っ……ごめん、なさい」

それははっきりとした否定。わかっていた事だから、俺はただ「そうか」と軽く答えた。

「あんな母親でも家族。そりゃ、俺みたいな他人とじゃ比較もできねえか」

赤の他人と、家族・親友。天秤の針は、明らかな傾きを見せるに決まっている。例えそこにどんなアンフェアが潜んでいたとしても「……母さんにも、私しかないから」

果たして、それは一方通行な想いなのか。両想いなのか。

判断はつかない。テストロッサがそうであるように、ババアもテストロッサに依存している可能性はある。依存というのは恐ろしい。

どんな形でも『必要』とし『必要』とされたがる。歪んだその言葉だったが、俺自身思い当たる節があるからか、反論は出来ない。

俺も、大切な人と一緒にいたい。そんな依存するための場所を守るためならば、なんだってする。

「ミズキさん、早く逃げてください。ここにいたら、また……」

「はは、そうしたいのは山々なんだけどさ」

あいにく、テストロッサの現状をはっきりと認識できた今、この子だけを置いて逃げる事はできない。ってか、身体が辛いし、今すぐにつてのも無理だ。

「ん？」

と、そうこうしているとカツカツと足音が響いて来た。部屋の奥から現れたのは件のババア。どこか、満足げな顔をしている。

「フエイト」

「はい、母さん……」

テストロッサは曲げていた膝を伸ばし、ババアの方を向いた。：いくら大事に想っても、やっぱり怖い。身体と心の反応に、均整が取れていないんだ。

ババアが手を広げると、宙に九つのジュエルシールドが並んだ。全て、テストロッサが集めたものだ。

「貴方が手に入れてきたジュエルシールド九つ。これじゃ足りないの。最低でも後五つ。出来ればそれ以上。急いで手に入れてきて？ 母さんのために」

……このババア。

自分がテストロッサにとってどれほど大事な存在かわかってて、言葉を選んでやがる。本当にイライラする。けれど、痛む身体は思い通り動いてくれず、身体を半分起こすのがやっとだった。

「はい、アルフ来て。……アルフ？」

テストロッサが呼びかけるも、アルフはこない。それどころか、気配をまったく感じない。この部屋どころか、この建物にすらいなような気がした。

「ああ、あの子は逃げ出したわ」

愉悦を含んだ表情から、俺は理解した。あの、主人の事を第一に考える使い魔が、テストロッサを置いて逃げるだなんて、するわけがない。

「必要ならもつといい使い魔を用意するわ。忘れないで。貴方の本当の味方は母さんだけ。……いいわね？」

そして、先程までとは趣の異なった優しげな目。大根役者だが、テストロッサには効果抜群だ。

「どの口が……っぐ！」

俺の小さな呟きを、ババアが見逃す事はなかった。ライトニングバインド。本来は拘束のためだけに使われるそれに、熱傷効果が付与され、肌がチリチリと焦げる。おぼえず、声が漏れた。

「母さんっ、すぐに行くから止めてください！」

「ふふ、いい子ねフェイト」

やれやれ、元々テストロッサを置いていくつもりはなかったが、どうやら逃げる事は無理になったらしい。

拘束された俺を一瞥したテストロッサは「ごめんなさい」と一言そえて、すぐに部屋を出て行った。

止める事もままらないまま、テストロッサはいなくなる。

顔を上げ、じっと俺を見下しているババアを睨み付ける。ババアは何も答えず、ただ愉快そうに、口元を歪めた。

エイミィさんの調べた情報を纏めると、プレシア・テストロッサは違法な材料を持つての実験の結果、中規模な次元震が発生。その

責任を取るため、地方へ異動になった。それから数年、技術開発を続けていたんだけど……しばらくして行方不明に。……それっきり。

家族と行方不明になるまでの行動は不明。本局に問い合わせているけれど、一両日はかかるそうだ。

フェイトちゃんもプレシアさんも、大きな魔力放出後だからきつとまだ動きが取れない。それに加えて、アースラのシールド強化も必要。

そしてわたしとユーノ君は、一時帰宅が許可されたのだ。

それからわたしたちについて高町家へ足を運んだリンディさんによる見事なごまかし。わたしの家族に心配をかけないための嘘なんだけど、なんの悪びれもなく、本当に真実しか言っていないようなリンディさんの態度は圧巻だった。あのお父さんやお兄ちゃんまで騙すのは、本当にすごい。

翌日、学校で久しぶりに再会したすずかちゃんやアリサちゃんと、放課後遊ぶ事に。アリサちゃんが昨日の夜、怪我している大型犬を保護したとっていたから、すずかちゃんと二人で見に行った。

そこにいたのは、見知った顔。

フェイトちゃんの使い魔の、アルフさんがいた。

ユーノ君とクロノ君が念話を通じて聞き出した事。フェイトちゃんのこと。

すべての始まりは、やはりお母さんであるプレシアさんで。フェイトちゃんは、理不尽な命令をされていて。でも、大事な人のいう事だから逆らえないでいて。

そしてミズキ君が、フェイトちゃんの変わりになってプレシアさんから暴力を受けている事。

念話越しに、クロノ君の強い怒りが伝わってきて、何だか怖かつ

た。

そのすべてを聞いて、新たな決意が胸に宿る。わたしは、フェイトちゃんを助きたい。

アルフさんの想いと、わたし自身の意思。フェイトちゃんの哀しい顔は、わたしも何だか哀しいの。

だから助きたい、哀しい事から。

それに、友達になりたいってあの時伝えた。その答え、まだもらってないもん。

アルフさんからも頼まれた。大丈夫。わたしは、きっとフェイトちゃんを助ける。もちろん、ミズキ君も。……まあ、ミズキ君はなんだかんだ、一人でも大丈夫な気はするけれど。

それから、その日は久しぶりにアリサちゃんとゲームをして、こんなにも離れていたわたしたちだけれど、友情はまだある。まだ友達でいられることを再認識して、少し涙が出た。うれしかった。

絶対に、此処に、アリサちゃんや家族がいる此処に、帰ってくる。その時、わたしの隣にはきつとフェイトちゃんを連れて。そんなわたしたちを、一步はなれた場所から見守るミズキ君がいて。

そんな未来を、絶対に作る。作って、みせるんだ

（公園で、待ってる）

それは、寝起きに届いた念話。聞き覚えのある声に、わたしははっとなった。

すぐに着替えて、家を飛び出す。

途中でアルフさんと合流する。お互い、目を合わせるだけで、言葉は交わさない。

今はただ、あの娘が待ってる場所へ。

海鳴臨海公園に到着して、一息。

「ここなら、いいね。出てきて、フェイトちゃんっ」

静かな公園でただ、風に揺れる木の葉の音だけが世界を続べた。
誰の気配もない。

だけど、わたしにはわかる。なぜかわからないけど、たぶんそこ。
静かに、わたしは振り返った。

《サイズフォーム》

それはいくらか聞いた事のあるデバイスの音声。

街灯の上に立つフェイトちゃんのデバイスが、魔力光を含めて鎌
のような形を作った。

「フェイト、もう止めよう。あんな女のいう事なんか、もう聞いち
やだめだよ。フェイト、このまんまじゃ不幸になるばかりじゃな
いか。だからフェイト！」

アルフさんの悲痛な叫びは、けれどフェイトちゃんに届かない。
首をゆつくりと、横に振る。

「だけど、それでも私はあの人の娘だから。それに今は……あの人の
ためだけじゃ、ない」

「ミズキ君……だね」

自分の考えを伝える事は、ひどく難しい。

相手に強い意志があるのなら、それが枷となつて届く事はない。
ならば、どうすればいい。聞いてもらうんじゃない、聞かせるんだ。
真剣に、一心に、自分たちの想いを。

左腕を水平に伸ばして、レイジングハートをセットアップする。
形成されたバリアジャケット。杖の形を作ったデバイス。

「ただ、捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけ
じゃ、もつとない。切欠は、きっとジュエルシード。だから賭け
よう？ お互いが持つてる、全部のジュエルシード！」

《プットアウト》

互いのデバイスの言葉に反応して、わたしたちの周りにジュエル
シードが浮く。

わたしの周囲に12個。フェイトちゃんの周りには9個。全部で
21個のジュエルシードが、一同に介す。

「それからだよ。全部、それから！わたしたちのすべては、まだ
はじまってもいない。だから、本当の自分をはじめるために。はじ
めよう……最初で最後の、本気の勝負！」

お互いに構えたデバイス。

フェイトちゃんの瞳は、今までにないくらい、鈍く光り輝いてい
た。

第6話 明かされた真実、それは運命の寄る辺だった。

それは知らないまままでいたかった真実。知らないまま、時を過ごして、ただ笑っていたかった。隣に居て欲しいと願った人の隣には、すでに先客が居て。

これから先、どうすればいいのか。もう、わからないでいた。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第6話 明かされた真実、それは運命の寄る辺だった。

それは、いつの記憶だろうか。

私と一緒に、お花畑で笑う母さん。私の、母さん。穏やかに流れる時も、雲も、全てが私たち家族を祝福してくれていたあの時間。

幸せ以外、何の感情もなかった、あの瞬間。

母さんはお花で編まれた冠を私のほうへ向けて、満面の笑顔で語りかける。

「ねえ、とても綺麗ね、『アリシア』」

アリシア？

違うよ、母さん。私はフェイトだよ？

「さあいらっしゃい、アリシア」

でも、いいんだ。だって、母さんがいる。あの時の優しかった、大好きな母さんがそこにいる。それだけが、大事なんだ。

傍によった私の頭に、母さんは花冠をふわりと乗せた。

「ほら、かわいいわアリシア」

思わず、笑ってしまった。
いつまでも、いつまでも。

この瞬間が、いつか消えてしまうのだとしても、私は絶対に取り戻してみせる。笑顔の母さんを。揺れる花たちを。

幸せの、一瞬を。

まだ明け方ですぐの日差しは、公園のすべてを照らすには弱弱しい光だった。だから私の足元で光る街頭が光源となって、私と……あの少女の決戦の場を照らす。

切っ先を向けられたデバイス。対して私は、バルディッシュをサイズフォームで待機させ、その瞬間を待つ。

全てが決まるこの瞬間、思い出される母さんの姿はただ、醜い今のものばかり。

でも、私は優しい母さんが好きだから。それに今は……私が母さんの望みを叶えて上げられないせいで、傷ついている人も、いる！一息に街灯から飛び上がり、バルディッシュを少女へ向けた。

交錯する視線と視線。

誰もいない公園で、何の物音もしない公園で。交差した瞳が、開戦の合図となった。

戦場はすぐに、海の上に移る。私たちはどちらも空戦魔導士だ。遮蔽物の少ない空。それこそが、どちらも持ち前の力量すべてを引き出せる最高の戦場となる。

足元に展開されたフライアーフィンで強化された少女の速度は、驚くべきことに私とほぼ同程度のそれだった。

正面衝突でぶつかり合うデバイス。……魔力出力は、私が勝つて
る。

打ち合う最中でも、迸る『私の』魔力が私たちを包み込んでいる
のが見えた。

けれど、このまま打ち合っても勝負は決まらない。それは、あ
ちらも同じだったようで、ほぼ同時に後ろへ飛んだ私たち。

バルディッシュをデバイスフォームをと戻し、魔力を込める。ミ
ドルレンジの打ち合いは不得手だけど、負けるわけにはいかない。

《フォトンランサー》

虚空にスフィアを四つ、展開させた。

《ディバインシューター》

対抗して、少女も四つ、桜色に光る魔力を収束して浮かせる。

一息の間。

「ファイア！」

「シュート！」

一斉に標的へ向かう魔力は、どれ一つもぶつかり合わず互いの身
体めがけて飛来する。

直線的に飛ぶ私のフォトンランサーは、弾速こそ早いですが、その分
軌道が読みやすく避けるのはたやすい。現に、少女は軽い動作で四
つ全てを避けてみせた。

対して、少女の射撃魔法は誘導性能が付与されているようで、収
束して私に襲い掛かってきた。上空へ飛んで逃げるが、駄目だ。追
いつかれる。

即座に振り返ってバルディッシュを構える。自動詠唱の設定をし
ている魔法『ディフェンサー』が発動した。しかし、この防御魔法
は最低限の防御力しか有していないため、直撃は避けたが、衝撃ま
で消し去れなかった。

「くっ、」

そして、少女が更なる魔法の展開をしていることに気がついた。

「シュート！」

五発の射撃魔法が飛来する。先程と同じ魔法だ。

逃げ、避けきるのは不可能だと判断。バルディッシュをサイズフォームへ変更し、サイズスラッシュを展開した。

バリア貫通能力を持つこの魔法ならば、少女の射撃を切り落とせる！

一個。もう、一個！

さらに二つ。四つの魔力弾を切り裂いて霧散させ、最後の一発は屈んで避けた。誘導性能で私に狙いを定めようと、関係ない。それが出来ないほど、プレッシャーをかけるだけ。

すぐに少女へ向かって身体を飛ばした。

魔法のコントロールは繊細で、とてもじゃないが使用者が緊急の状態にい陥り、集中力を欠けば誘導性能は失われる。

「っ」

高速で迫る私に、少女は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに右の掌を私のほうへ向けた。

《ラウンドシールド》

張られた防御魔法と、ぶつかり合う私の光。

ラウンドシールドは確かに強固な防御魔法であるが、私のサイズスラッシュを受止めるなんて、馬鹿げてる。何のためにバリア貫通能力を付けてると思ってるのか。

けれど、そんなに持たない。少しずつだけど破れていくのがわかる。

と、その時だった。少女の表情が変わる。鳥肌が立つ。すぐに後ろを振り向くと、先程避けたはずの射撃魔法がこちらへ向かって飛んできていた。なるほど、集中力を欠いてはずしたように見せたのは演技だったらしい。

私もすぐにラウンドシールドを張って対応する。

シールドにぶつかって即座に消えた射撃。……おかしい。あまりにも、手ごたえがなさ過ぎる。

っ、いない！

見れば、さっきまでそこにいたはずの少女は、綺麗さっぱりその場から姿を消していた。

左右を見渡すが、どこにもその姿を視認できない。数秒後、頭上からのデバイス音声が、その存在を明らかにした。

《フラッシュムーブ》

「せえ——い！」

頭上から飛来した少女。打ち抜かれるは、一陣の風。

魔法で加速されたその動きに対応するのは至難で、バルディッシュでその一撃を受け止めるのでやっとだった。

瞬間——魔力と魔力のぶつかり合いは、大きな音と共に炸裂した。少し前、ジュエルシードが巻き起こした次元震に似た光が私たちを包む。

今が、好機！

《サイズスラッシュ》

すぐにバルディッシュをサイズフォームへと変更し、眩む視界の中、少女へ切りかかった。

けれど、フライアーフィンが反応して、少女にその攻撃が当たる事はなかった。わずかに服を切り裂いた程度だ。あのインテリジェントデバイスの判断だろうか。まあいい、予想の範疇内だ。

爆発の瞬間、咄嗟に設置していたスフィアを四つ、少女は確認したらしいが、遅い。

《ファイア》

バルディッシュの声に、スフィアが反応してフォトンランサーが射出された。

防御に間に合わないらしい少女は、最低限の自動防御魔法しか形成できていない。はじくので精一杯のようだ。

とはいっても、こちらも追撃できる体制でない。

一旦少女から距離をとった。

「はあ、はあ」

それにしても、すごい。

初めて会った時は、魔力が強いだだけの素人だったのに。もう、違う。速くて、強い！

迷ってたら、やられる。

デバイスフォームのバルディッシュを、胸の前で握り締め、瞼を落とした。今、私が出来る最高の攻撃で、終わらせる。

《フランクスシフト》

合計で、38基のスフィアを周囲に展開。詠唱時間が長いこの魔法は、相手に迎撃の隙を与えてしまう諸刃の剣だ。だから、ライトニングバインド！

少女の両の手を拘束する。

「だめえー！」

少女が叫んだ。おそらく、私にじゃなくて、アルフたちに。

「アルフさんもユーノ君も、手を出さないで！ 全力全開の一騎打ちだから！ わたしとフェイトちゃんの勝負だから！」

手助けを拒んでいるらしい。……あの娘は、本当にどこまで……。浮かぶいくつもの考えを、私は詠唱で打ち消した。振り払うように、ただただ、言葉を紡いだ。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・フランクスシフト。撃ち碎け、ファイアー」

瞬間、ライトニングバインドを解除した。

決して魔力量は少なくない私だけれど、この二つの魔法の併用はすごく厳しい。だから、当たると核心した瞬間に解除するよう、リニスから言伝を受けていた。当たれば勝負は決まる。なにせ、フォトンランサーフランクスシフトは、多撃必中の奥義なのだから。毎秒7発の斉射を4秒継続することで、合計1064発のフォトンランサーを目標に叩きつけることが、この魔法の全て。故に、『多』撃必中。

使用したら最後、私の魔力量ではもう後はない。けれど、大丈夫。確実に当たる！

すべてのスフィアを射出し終えた私は、即座に左腕を上げ、とどめの攻撃の為に魔力を溜める。煙が晴れたら、それで……

「……え？」

そこにいたのは、無垢な天使の姿。無傷なままの少女が、羽の生えたデバイスを手手に浮いていたのだ。

「そんな……」

なんで。確実に、命中したはず。命中さえすれば、確実に負けないはずの攻撃なのに。

「たはは、打ち終わるとバインドってのも、解けちゃうんだね。今度はこっちのっ」

《ディバイン》

向けられたデバイスの切っ先に宿る、桜色の光。それは、砲撃魔法の予兆。

「番だよ！」

足元に広がっている、大きな魔方阵だけじゃない。魔力弾、デバイスコア、手元、そしてデバイスの尾。計四つもの小さな魔方阵が展開された『それ』は、規格外の威力である事を私に悟らせる。御しきれない程、濃密なんだ。

《バスター》

デバイスの音声は、すぐに巻き起こる轟音に掻き消される。突き進んでくる桜色の魔力光。

「うああ！」

咄嗟に、左手に溜めていた魔力を投げ飛ばした。

が、抵抗なんて言葉が存在しないかのように、私の魔力は霧散して消えた。圧倒的過ぎた。片や、大技を使った直後で魔力がほとんどない者の、ただ魔力を圧縮しただけの攻撃。片や、ほぼフルパワーで放たれた砲撃魔法。勝負は、見るより先に決していた。

すぐにラウンドシールドを展開。直撃。

その圧力はすさまじく、どんどん自らの身体が後退していくのがわかる。でも、耐え切る！

あの娘だって、耐えたんだから！

この際、メインの砲撃に付随している魔力は全て無視。シールドをただ、砲撃を受けないためだけに張り続けた。その為、手袋は破け、マントは裂け、バリアジャケットは見る間に破壊されていた。「っ、くああ！」

けれど、絶対に負けない。

どんなにぼろぼろになっても、どんなに傷ついても。ここで私が負けたら、あの人は――！

数秒後、収まった衝撃。

同時に、ラウンドシールドは消えた。安堵のため、集中力が途切れたせいだ。

見るも無残な姿になってしまったけれど、耐え切った。そのことに、心底安心した事が、油断となった。

「受けて見て！ デイバインバスターよりも大きな、わたしの砲撃！」

《スターライトブレイカー》

感じる、新たな魔力の収束。見上げた頭上、その先にいた少女は、羽の生えたデバイスを天に掲げ、そして大きな魔方陣を私に向け、展開していた。

既視感。それは、つい最近、まったく同じく光景を見たから訪れたものだった。

あの少年。ミズキさんの、スターライトブレイカー。少女のそれは、彼のものとあまりに酷似していた。魔力光の色以外、全て。

集束していく、光の玉。

あれは『まずい』

今より体力も、魔力も余っていたあの時ですら、一撃の元にやられてしまった魔法だ。今回のそれは、見る限りミズキさんのそれ以上に濃厚な魔力のにおいがする。

そこで、私がその事に気がついたのは、まったくの偶然だった。いや、必然か。ただ、背中に守りたい人がいる。その事実が、私に

気がつかせたのだ。少女が、さらにもう一つ魔法の準備をしていたことを。

「バルディッシュ、お願い！」

《ブリッツアクション》

残っていた最後の魔力を振り絞って、加速呪文を唱えた。振り返れば、私がさっきまでいた場所に展開されている四つのバインドが目に入る。

レストリクトロック。捕縛系統呪文で、集束系の上位種。まさか、最近まで素人だった少女に使えるだんなんて、誰が思うものか。

が、その時の私は完全に勝利を確信した。おそらく、少女はバインド後すぐに魔法を放つ気でいた。だから、私が完全に拘束されている事を確認せず、魔法を放ったのだ。

「これがわたしの全力全開！ スターライトブレイカー！」

私が背後に迫るのに気がつかず、少女はデバイスを振り下ろし、バインドがただ浮いているだけの空間を、スターライトブレイカーは素通りした。

スターライトブレイカーは、周囲に漂う魔力を集め放つ、集束型の砲撃魔法だ。

一度、フェイトちゃんとミズキ君が戦っている時に目撃した魔法で、今回はほとんどぶっつけ本番で使ってみたけど何とかなった。

とはいえ、もともとデバインバスターで魔力が絶え絶えだったからの選択。さらに集束して放射、といっても自らの魔力も多大に消費するこの魔法を使ってしまった身体は、確かな休息を必要とし

た。

レイジングハートは排熱口を広げ、白い蒸気を噴出す。ディバインバスターからのスターライトブレイカーは、結構な負荷になったようだ。本当、ごめんねレイジングハート。この後少し磨いてあげよう。そう思った。

わたしは、完全に勝利の感覚を持っていたのだ。淡く点滅を繰り返すフライアーフィンも、些細事だと思っていた。とりあえず、水飛沫が晴れたらフェイトちゃんを……。

「はあ、はあ、はあ、え……」

そこには、誰もいなかった。

もしかして、海に落ちちゃった？ どうしよう、早く助けないと！と、その時だった。

ずぶりと、身体を突き抜ける感触。肉体的には、まったく平気なのに、確かにわたしは『斬られた』

緩慢とした動作で振り向くと、そこには『バルディッシュを降りぬいた』フェイトちゃんがいて、でも、わたしの意識が続いたのそこまでだった。

フライアーフィンは消え、海が近づく。

「なのはー！」

ユーノ君の悲鳴が聞こえたけれど、たはは、駄目だ。答える気力が沸かない。

さらに、海面が近くなる。

勢いそのままに、わたしは水の中へ沈んでいった。

公園のベンチに、海から引き上げた少女を寝かせる。

彼女はすごかった。ふとすれば負けていた。でも、勝負は私の勝ち。これは、揺るがない真実だ。

「……フェイト、ちゃん」

薄く開いた少女の瞳。やはり、駄目だ。

この少女からは、何かを感じる。運命といえば聞こえはいいけど、きつとそんな生易しいものではないはずだ。……でも、やっぱりそうだったのかなと思ってしまふ。出会いがこんな形でなければ、きっと友達になれていたんだって。

《プットアウト》

少女のデバイスが、ジュエルシードを全て吐き出した。

マスターを守るための代償行為だと思ったのだろう。いいデバイス。勿論、バルディッシュには劣るけれど。

見れば、少女はまた瞼を落としていた。サイズスラッシュによって切り裂かれた身体は、非殺傷設定だったとはいえダメージが免れたわけではない。

「ご主人様に、伝えてくれる？　ありがとうって」

《了解しました》

浮かぶジュエルシードを全てバルディッシュに収納し、少女に背を向けた。飛び立つ前にもう一度、振り返った。

「……」

小さく呟いた言葉は、先程と同じもの。ありがとうとただ一言残して、私は飛び去った。

「ビンゴ！ 尻尾掴んだ！」

フェイトちゃんが転移した空間。そこそが、すべての元凶、プレシア・テストロッサの居所。結界系統を管理していた使い魔がこちら側にいる今、不用意な物質転送が仇となったね！

「よしエイミィ、引き続き頼む！ 僕はなのはの元へ！」

「もちろん！ 座標もう割り出して、送ってるよ！」

クロノ君は私の答えを聞くより早く、部屋を飛び出して行った。

艦長に送った今のデータで、アースラ内にいる武装局員の出撃が決まった。

極めて一般の武装局員たちである彼らは、総じて魔導士ランクBであるけれど、数はそこそこにいる。放逐前、魔導士ランク総合Sランク認定されていたプレシアだけど、それは26年前の話。高齢になると、年齢を重ねる毎に魔力というのは少なくなっていくもの。比率を考えても、十分に足りる人数がこちらにはいる！

後は、私が転送ポートをプレシアのいる次元につなげれば、この事件は始まって、終わる。

エンターキィに乗せた人差し指が、なぜか震えた。途方もない、恐怖感。何かが巻き起こる。それは、今まで培ってきた勘以外のなんでもなかったが、確かな恐れを抱いた。

でも、大丈夫。負ける、わけがないんだ。

『エイミィ！』

艦長が指令を出した。迷いを押しとどめ、私はキィを叩く。

後のPT事件——プレシア・テストロッサ事件の、終焉が開始された。

「ただいま戻りました」

私はすべてのジュエルシードを持って『時の庭園』へ戻ってきた。ここは私たち家族の家であると同時に、元々ミッドチルダの偏狭にあった遺跡級の代物らしい。昔、母さんが買い取ったって、リニスが言っていた。

時の庭園は次元間航行が可能な庭園で、だから今まで管理局に正確な場所を突き止められなかった。でも、今日で座標は特定されてしまっただろう。アルフのいない私には、座標をぼかした上での転移などできないから。

大広間にいたのは、椅子に座る母さんと、ライトニングバインドで括り付けられ、意気消沈と宙に浮いているミズキさん。不思議と、私の中には母さんに褒めてもらえるという期待はまるでなくて、ただただミズキさんの安否だけが気になっていた。

「よくやってくれたわあ、フェイト。さあ、ジュエルシードを」
「……」

《プットアウト》

無言で、私はバルディッシュからジュエルシード21個を全て吐き出させ、母さんの前に浮かせた。

満足げにそれを受け取った母さん。いつも痛い事をしている時とは違う表情だったけれど、私には今より怖い母さんの顔なんてなかった。それくらい、歪んでいた。

「あの、母さん」

「なあに、フェイト」

最近、私の問いかけになんかまともに答えてくれなかった母さんだったけれど、今日は笑みを満面に浮かべて答えてくれた。……やっぱり、怖い。でも、聞かなきゃ。

「その、ミズキさんは」

「ああ、これね。もういないから、どうにでもしなさい」

言うど、ミズキさんを縛っていたライトニングバインドは解かれ、

地面に激突しそうな身体を、私は走りよって受け止めた。

……よかった、呼吸は落ち着いている。

と、その時だった。ひどい爆音。振り返ると、そこにいたのは管理局員の人たち。何人も、何人もいる。

「プレシア・テストロッサ。時空管理法違反、及び管理局管制への攻撃行為で、貴方を逮捕します！」

「武装を解除して、こちらへ」

管理局員たちの中から、代表して二人が前へ躍り出て、私たちへ迫った。さっきまでの愉悦の表情とは一転、母さんは鋭い眼差しで睨みを利かせ、うすく笑った。

そうこうしている間に、管理局員たちは私たちを囲んだ。その状態には特に反応を示さなかった母さんが、大広間の奥へ進んでいく局員たちを瞳に収めた瞬間、表情が一変した。

座ったまま両手を振るったかと思えば、囲む局員たちは全て弾き飛ばされ、意識を失った。すごい、なんて言葉じゃとてもあらわせない。ざっ、と立ち上がった母さんは、背中を私たちに向けたまま、ポツリと呟いた。

「フェイト。初めて母さんを喜ばせてくれた貴方に、ご褒美をあげるわぁ。真実、っていう名の、ね」

返答を聞かず、母さんは大広間の奥へ歩いていく。ミズキさんを肩に担いだまま、私は急いでその後を追った。

この先は、未開の地だ。私はまったく、立ち入ったことがない。許されなかったのだ。

開かれた一つの部屋。陳列された棚などにツタが幾つも絡みつき、薄暗いその部屋は不気味な雰囲気をかもし出していた。

と、母さんはすでに部屋にいた局員を一撃の元に弾き飛ばす。

「私のアリシアに、近寄らないで！」

アリ、シア。

聞き覚えのあるその名前。どこで、聞いたのか。

見れば、薄暗いこの部屋を照らしていたのは、一つのカプセルだ

った。部屋の最深に設置されたその中に、女の子が一人裸で浮かんでいた。

長い金髪。見覚えのある顔立ち。間違えようが、なかった。だって、そこにいたのは紛れもなく……。

「わた、し？」

「プレシア・テストロッサ！」

私の疑問が解決する間もなく、次々と、局員が部屋へ飛び込んできく。

「……うるさい」

母さんは一言呟いて、魔法を発動させた。

元々、この時の庭園に発動術式を組み込んでいた大規模魔法であったそれは、庭園内にいた局員……そして私とミズキさんも含めて雷撃の元に切り捨てた。どう……して。

「プロジェクトF・A・T・E」

支えたミズキさんの重さに、母さんの魔法で傷ついた身体は耐え切れず、地面に両膝を着いた。頭上から降り注ぐ、その言葉の意味を、淡々と母さんは語った。

「もう、ずっと昔の事。私の娘、アリシアは事故に巻き込まれて命をなくしたわ。私の計画通り進めば、失敗なんてなかったはずなのに！……中央を放逐された私は次元航行エネルギーの研究を止め、自暴自棄になっていた。でもね、『ある』人物がたずねてきて状況は変わった。とあるプロジェクトに誘われたの」

戦慄し、震えが収まらない身体。もう、私は真実にいたっていたのかもしれない。でも、それが間違いであって欲しいと、願っていた。

「それがプロジェクトF。クローン技術を用いた、新たな人造魔導士の作成計画。その結果が貴方よ、フェイト。開発コードを、そのまま名前としたの」

願いは儚く砕け散った。私は、母さんの娘ではなかった。ただの、研究成果。人間ですらなかった。

身体を支える事はもう無理で、ただ、ミズキさんを地面にぶつけないようにするのが精一杯で。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのに、最後の最後まで貴方はアリシアになれなかった。本当、使えない子だったわ。でも……役に立ってくれた。だからこれはほんのお礼よ。さあ、すきな所へ行きなさい」

それは、本当の意味で初めて見る、母さんの穏やかな表情だった。でも、私は、私が居たいのは！

「母さん……」

私の言葉なんてもう、母さんには聞こえていなかった。『アリシア』の入ったカプセルを魔力で浮かせ、部屋の入り口へ向かって歩き出した。

「私たち旅立つの。忘れられた都、アルハザードへ！」

母さんがジュエルシードを集めていた本当の理由は、ただアリシアを生き返らせるためだったんだ。アリシアがいれば私なんて必要なくなるのに。そんな事も知らず、私は、ずっと……。

これから先、私はどうやって、何のために生きていけばいいのか。わからない。

全身の力が抜け、立ち上がることも出来なくなった私。しかしそこで、ふと疑問を持った。なら、どうして私は倒れていないの？

「待てよ」

声が、母さん呼び止めた。

「時空管理局だ。プレシア・テストロッサ、まだ、逮捕がすんでないぜ？」

私を支えて立ち上がったミズキさんの顔が、すぐ傍にあった。

第6話 明かされた真実、それは運命の寄る辺だった。（後書き）

ってことで、予定調和から少し離れた展開となりました。本編の次回から、影の薄かった主人公のターン開始です（決して俺TUEEEEEEEEなものではありませんが）。

さて、今回テンプレ展開から離れてしまった原因とはなんだったのかを少し。

まず間違いなく、原作のフェイト程疲労が蓄積されていなかった事。そして、一度スターライトブレイカー（以下SBであらわします）を見ていた事。この二つですね。

ミズキの存在が、直前のフェイトお叱りシーンをカットさせました。また、蓄積されなかった疲労が思考力を高め、さらにSBが直射の砲撃である事を知っていたため、バインドの存在を悟る事ができた、というわけです。

感想や質問がありましたら、気にせずお書きください。

幕間（前書き）

短いです。すぐく。

幕間

第6・5話 それは、不屈の心が宿った日だった。

瞬く間に地面に開いた、大きなクレーター。

本当にそれは一瞬の事で、魔法とはかくも、これほどまでに凶悪なものなのかと認識させられた。

怖い。ただ、純粹にそう思った。

結界魔導士である僕は、攻撃魔法をほとんど使わない。いや、使えないが正しい。ただ、適正がなかったのだ。

だから、結界魔導士の道へ進んだ。切欠は、ただそれだけだった。出来る事を、存分に出来るようにする。出来ない事は無理してやらない。こと魔法に関しては、僕はその信条をまったく揺るぎないものとして過ごしてきた。

その軌跡を、今この瞬間、初めて否定しなくなった。

僕はただ、目の前でこの惨状を作り上げた奴らを、この手で葬りたかった。ずたずたにして、ぼろぼろにして、傷ついた仲間たち、息を引き取った家族たちと同じ目にあわせてやりたいと。でも、僕には出来ない。

力がないから。対抗できる力が、僕にはなかった。

……右脚を怪我したらしい。倒れた身体を起こす事は叶わなくて、目の前で無表情を浮かべて魔法の準備をしている『白い羽の生えた』少年に、一矢報いる事もできず。

次なる砲撃魔法が、放たれようとしていたのを、僕はただ黙って

みている事しかできなかった――。

《ラウンドシールド》

機械的な、女性の声。

衝撃は来ない。

咄嗟につぶった瞼を押し上げた。見れば、放たれた白い光線は、同じく白い魔方阵で作られた防御壁に阻まれていたのが視認できた。同時に、僕と白い翼の魔導士の間に、一人の男が立っているのも。黒いマントをはためかせ、少し大きめの、黒い銃型デバイスを手にしたその男が、ラウンドシールドを展開していたのだ。顔は見えない。僕とは逆側を向いているからではなく、深くかぶったフードのせいだ。

《大丈夫ですか？ 少年》

先程と同じ声。デバイスのものらしい。しかし、デバイスにしてはやけに人間的にしゃべるものだ。

「……っ、がはっ！」

声を発しようとする、上がっていた土埃が肺に入り込み、思わずむせ返った。

しばらく咳を続けていたのだが、目を相対する二人から離すことはしない。

《無駄です 貴方程度の魔導士では マイマスターの足元にも及びませんよ》

相変わらず、黒衣の魔導士は何も喋らないが、代わりにデバイスが饒舌に少年へ語りかけた。少年はじっ、と魔導士を見つめていたが、踵を返し、飛んで去った。

続いて、キャンプを襲撃してきた魔導士は次々と逃げ帰っていく。それほどまでに、この目の前にいる黒衣の男が威圧的で、確かな実力を持っていたということだろうか。

《少年》

またデバイスからだ。

スクライアの窮地を救ってくれた相手とはいえ、いや、だからこそこの男も……怖い。

振り返る男。固唾を飲み込んで、その動作が終わるのを見守った。あまりにも深くかぶったフードのせいで、正面からみても、その顔を拝む事はできなかった。

《マイマスターが 貴方へと》

と、その時だった。

淡い光が、僕の目の前に浮かんだ。

小さな、赤い宝石。

一目見てわかった。それは、ストレージされたデバイスだ。それも、すごく精巧にできた。

《貴方には必要のない物かもしれない けれど 来るべき時 必ずそれは役に立つ》

確かに、結界魔導士であり、演算能力が人一倍高い僕はデバイスを必要としない。頭の中で構築式を組み立てることがたやすいから。でも、このデバイス。淡い赤色のデバイスに、僕は惹かれた。不思議な魅力が、僕を誘い込んだ。

《レイジングハート それが そのデバイスの名前です》

「レイジングハート……不屈の、心」

お椀の形を両手で作って、レイジングハートを受け止めた。掌の上にあるその感触。なんだかとても、暖かい気がした。

《とりあえず 第一段階終了ですね》

「……ああ」

《それにしても ゲリラの方たちがあたかも我々に恐れをなしたかのようにいなくなったのは意外でした》

「……しかたないさ。皆、とっくに気がついていたんだ。自分らが襲撃したのは、管理局じゃないって」

《だから 我々の存在がいいアクセントとなった と?》

「おそろくな」

《把握しました では 次の航行先へ転移します 次元座標は――》

第7話 決着から、すべては始まった。(前書き)

ちよつとぐだぐだな文章ですけど、かんべんしてください☆

すみません。そのうち推敲します。

第7話 決着から、すべては始まった。

やり直したい過去なんて、誰にでも、無数にある。でも、だからってやり直してばかりいたら、前には決して進めない。ましてや、誰かを犠牲にしてまでやり直すことになんか、意味はないんだ。

ただ、前を向く。それだけが、神に信託されたことなのだから。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第7話 決着から、すべては始まった。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのに、最後の最後まで貴方はアリシアになれなかった。本当、使えない子だったわ。でも……役に立ってくれた。だからこれはほんのお礼よ。さあ、好きな所へ行きなさい」

さすがに、これ以上黙ったままやり過ごすのは無理だった。

俺を支えてくれていたはずのテストロッサを、いつのまにか俺が支えているこの現状が、俺を動かす。

こんなにも、自分の事を思ってくれている奴がいて。こんなにも、自分の事を大切にしてくれている。

このクソババアは、一体何が不満だってんだよ。

「私たちは旅立つの。忘れられた都、アルハザードへ！」

死んだ人間を生き返らせるなんて、どんな人間にも、どんな魔法にも、できやしない。

過去は、どうやったってやり直せるものじゃないんだ。

「待てよ」

ババアは、何の驚きもないような顔で、こちらをちらりと見た。ばれていたか？　とも思ったが、どちらでもいい。ただ、このままだり過ぎす事が、たまらなく嫌だった。

「時空管理局だ」

俺が管理局員として、ずっと生きていこうと誓った理由。

「プレシア・テストロッサ、まだ、逮捕がすんでないぜ？」

それは、テストロッサのような人を救いたい。それが、感情をくれた世界への恩返しだから。

「……邪魔をしないで」

ババアは、俺が起き上がった事など、まったく意に介していないようだった。ただ横目で俺を睨み、威圧する。

ああ、怖いさ。

目の前で整然と経っているだけの老いぼれが、たまらなく怖い。恐ろしい。

とはいえ、今の俺はどんな恐怖にも臆さない。他の誰でもない、テストロッサの哀しみを、俺が背負ってコイツに相対しなければならぬ。

テストロッサは、こんなにも思いやりのあるいい子だ。だってのに、こんなの、あんまりじゃないか。

「エイミィさん、聞こえてるんだろ？　倒れた局員たちと一緒に、テストロッサもアースラへ送ってくれ」

先程からちりちりと、次元の揺らぎを肌で感じていた。次元震の予兆。アースラが気付かないわけがない。きっと、倒れ付した武装局員の回収をするはずだと思っただけの発言だ。

数秒もせず、返事は念話で返ってきた。

（わかった！　ミズキ君も、）

「俺はいいです」

（ちょ、ミズキ君！）

そう言って、アースラから飛んできた魔力を一蹴した。簡単な事

だ。

大規模な転移魔法は、根本的に構成が甘い。耐えず、自分の今いる座標をずらし続ければ、それだけで発動しない。要するに、動き回ってことだ。勿論、実の身体ではなく魔力体としてのって意味だが。

「……」

手に魔法によって消えそうなテストロッサ。右肩に担いでいた彼女は、呆然と俺の顔を見ていた。

……やっぱり、許せねえよ。

純粹に、愚直に、ただテストロッサは母を思っただけなのに。ただ、それだけだったのに。

そんなテストロッサの表情を、感情を奪い去ったあのババアを、このままにして退散するなんて、俺には無理だ。

完全にテストロッサが消え入る直前、笑顔を向けた。最後に見えた一瞬も、テストロッサに表情を作ってやる事は無理だった事が悔しかった。

テストロッサと、周りに倒れていた局員たちが消えたのを確認して、ババアに向き直る。ババアはイラつきを隠さないまま、すつ、と右手を俺にかざした。

刹那、幾つものフォトンランサーが飛来する。俺はただ落ち着いて、両の掌を前に突き出した。

「ぐっ、」

それは、テストロッサ以上に鋭く、速い閃光だったが、足を踏ん張り、齒を食いしばって攻撃を耐える。

「……」

続いて、二段階目、三段階目と射出されていくフォトンランサー。いつもの俺なら、これだけの攻撃を耐え忍ぶなんて無理だっただろう。精々、一撃目でダウン必須だ。

「……なるほど」

気付いたらしい。やれやれ、これでもう少しは時間を稼げると踏

んでいたんだがな。

「ばれたか。ご明察、これはバリアジャケットの防御機構をちよつといじってね」

アルフに頼んで此処へつれてきてもらった時から、ずっと仕込んでいたものだ。

テストロッサの電気変換資質。これがおそらく遺伝だろうと推理した俺は、時の庭園に入る前にバリアジャケットの全機能を一時的オフにし、唯一つ『テストロッサの電気変換された魔力』にのみ防御機構が働くようにチューンした。結果、テストロッサとほぼ同系統で同質な魔力を持つババアの魔法は、その威力をかなり落とされる事になる。度重なる拷問で、俺が平気だった理由はこれだ。：拷問のすべてが鞭とか物理的なものだったなら、終わっていたな。なにせ、今の俺のバリアジャケットは、言ってみれば雷耐性にのみ特化した紙防御なのだから。

とはいえ、ばれたらもうこの策は通用しない。

自分の魔力以外でも、魔法というのは応用を利かせればいくらでも相手を傷つけられるのだ。例えば、天上を破壊して崩落させたり、とかな。

「スカイライン」

というわけで、ここでデバイスを展開。バリアジャケットの機能も、いつも通りのチューンに戻す。

「小ざかしい事を考えたものね。でも、もう通用しないわ」

「ああ、わかってる。二次的攻撃で、」

ババアの質問に答えようとした矢先、俺はある種の予感を感じて横飛びした。瞬間、さっき居たところに莫大な魔力の塊――フォトンランサーが発生し、大きく地面を抉っていた。

ババアは少し口元をほころばせただけで、すぐにまた無表情へと戻った。

「『本気』を出せば、そんな小細工なんて意味を成さない」

らしい。これだけの魔力の放出とコントロール。ゼスト・グラン

ガイツ並みだぞ。このババア、Sランク以上だったのかよ、つくそ！

「……えげつな」

「私は急いでいるの。早く終わらせたいの」

次々と撃たれる魔力の弾。

全長が俺の身体分ほどありそうなそのフォトンランサーが、まったく間をおかずに射出される。一瞬で、目の前が同じ色で染まった。その全てを避けようと試みるが、これが非情に厳しい。

なにせ部屋が狭い。天上の高さも含めて。

この程度の狭さ、高さだと、レアスキルを発動したところで避ける自身がないのだ。

「ま、使ったほうが幾分かましかった」

《スレイプニール》

背中に生える、一対の翼。滞空中なら、俺は人の限界をどこまでも超える。

「つて、やっぱ無理！」

無理無理！　せめてこの部屋でねえと、話になんねえって！

とはいっても、出口をババアが塞いでるし……ああ！　うざってえ！

「スカイライン！」

《シュートバレット》

入り口付近の天上に向かって、直射の魔力弾を放つ。ガラガラと音をたてて、天上はくずれ、俺とババアの間を塞いだ。

「よし、これでなんとかっ」

と、息を吐いたその時、崩れた壁が一瞬で飛ばされ、ババアがその顔を現した。

時間稼ぎにもならなかったみたいだ。

「終わりよ」

そして、ババアの攻撃を正面から浴びた。意識は、そこで途切れる――。

「時の庭園より、大規模な魔力の暴走を確認。じ、次元震発生！震度徐々に増加しています！この速度で併走すれば、次元断層発生予測地まで、三十分足らずです！」

「時の庭園の駆動炉自体が、A十のロストログア。すべてのジュエルシードの力だけじゃなくて、駆動炉の暴走も利用しているみたい」
「初めから、片道の予定なのね」

そこは、一度訪れた事のある場所。時空管理局の船の中だった。どうやら、転移魔法を使われたらしい。

その事に気がついたが、なんでとか、どうしてとか、そういった疑問は湧かなかった。ただ、ひたすらに考えるべき事があったからだ。

だから、立つ力なんてあるはずもなく、転移が完了したと同時に足元から崩れ落ちる。そんな私を支えたのは、よく見知った顔だった。

「フェイト！」

「アルフ……」

アルフは私の事を涙ぐんだ瞳でじっと眺めると、思いっきり抱きついてきた。嗚咽が耳に入る。アルフは泣いていた。

「よかった。本当に、無事でよかった」

無事？ 誰が？

そんなわけない。無事なわけない。確かに、身体は平気かもしれない。でも、心は、私の心はもうどうしたらいいかわからなくて、ただひたすらに私はアルフのことを見ていた。

母さんに、捨てられた。いや、母さんと呼ぶのはおこがましいの

かな。だって、私は本当の娘じゃないから。アリシアじゃないから。「フェイトちゃん!」

次に、私へ駆け寄ってきたのは、あの白い魔導士の女の子だった。名前は確か……なのは。

安心した顔を浮かべたのは一瞬。私の周りにいる倒れた管理局員たちを見回して、すぐに険しく眉間を曇らせた。

「ミズキ君は?」

ミズキ、さん。

彼は一体、なんだったのだろう。

私とはなんの接点もつながりもないはずなのに、どうして、私の為にあんなになって。

あんなに?

そこで私は気がついた。彼はどうしている?

「あ、ああ……」

一人で、母さんを止めようとしているんだ。あの母さんを、たった一人で。

「わた、私の、私のせいで」

「ふえ、フェイトちゃん! 落ち着いて、ね?」

何も出来ない私は、ただ暴れるだけ暴れた。アルフも、なのはも巻き込んで、ただただ感情の奔流を鎮めるために。

どれほどそうしていただろうか。たぶん、数分としない。

「クロノ、ユーノ君、出られる?」

艦長さんらしい人が、黒髪と金髪の少年に声をかけた。二人は頷き、そしてなのはが声を上げた。

「リンディさん、わたしも!」

「なのはさん、貴方は駄目よ。これは命令です。傷ついた貴方では、役に立ちません」

「っ、でも!」

食い下がるのはだが、艦長さんは命令を取り消さないようだった。

ただ、この状態を静観していただだけの私は、ポツリと、言葉を漏らした。

「無理、だよ。母さんを……止める事なんて」

母さんがどれほどアイシアを愛していたのか、アイシアの記憶を持つ私にはわかる。あの人は、アイシアのためならば神にだって戦いを挑む。そんな人だ。

なのははきつ、とこちらを振り向いて叫ぶ。

「でもやらなきゃ！ ミズキ君も、あそこにいるんだよ！」

ミズキさん。不思議な、男の子。

私のせいで、あの人は、母さんに……。

私は俯いて、なのはの話なんてまったく聞かなかった。聞く気になんてなれない。自分を責めるので精一杯だった。

そんな時、パン、と乾いた音が鳴った。私の頬に走る、小さな痛み。

目の前の少女、なのはが私の頬を叩いた事に気がつくまで数秒かった。

「ただ捨てればいいわけじゃない！ 逃げればいいだなんて、もつとない！ フェイトちゃんはまだ、逃げてるだけなんだよ！」

それは、一度聴いた言葉だった。でも、あの時まったく何もかんじなかったはずなのに、頬をぶたれた今になって、考えさせられた。逃げてる？ 私が？ 何から？

一枚一枚、薄皮をはがして、その正体を私は探した。

そしてたどり着いた結論。私は、母さんとミズキさん。二人を天秤にかけ、そして、その答えを考える事から逃げていた。

誰よりも母さんが大事だった私。でも、だからといって、目の前で傷ついていたあの人を放って置く事が辛い。……どちら側につくなんて考えもせず、ただ愚直に動いていた。

どちらからも嫌われない方法を、その場のぎで考えて。

「わたしは行くよ。誰に止められたって、かまわない。後悔だけはしたくないから！」

バリアジャケットに身を包んだのは、少年二人が走っていった方へ向かって駆け出そうとした。その身体を、私は声を使って呼び止める。

「待って。バルディッシュ」

私はバルディッシュを展開し、切っ先を軽くなのはに向けた。一度、してもらった行為だ。私の魔力を半分、なのは分け与えた。

「フェイトちゃん」

「私もいく。私は、まだ始まってもなかった。キミの言うとおり、逃げていただけなんだ」

生きていたと思ったのは、母さん認めてもらいたいからだった。それ以外に、生きる意味なんかないと思っていた。それが出来なきゃ、生きていけないんだと思っていた。

私はまだ、始まってもしなかったんだ。

目の前で瞳を輝かせるなのは、私は薄い笑みで返した。

誰のためでもない。ただ、自分の為に。

「本当の自分をはじめめるために、今までの自分を終わらせよう」

時の庭園は、母さんが作り出した傀儡兵で満ち溢れていた。入り口で三人詰まり合い、交互に魔法を放って先を急ぐ。すべてを倒さず、合間を抜け、どうしてもという敵だけを滅ぼしていく。

時の庭園、その中へ進入をしたその時、大地の振動が確かに止まった。途端、流れ込んでくる念話。それは、この場全員に聞こえるように設定された、艦長さんのものだった。

（プレシア・テストアロッサ。終わりです。次元震は、私が抑えています。駆動炉もじきに封印、貴方の元にも執務官が向かっています。忘れられし都、アルハザード。そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかも曖昧な、ただの現実です）

大地の震動を止めたのは、艦長さんらしい。どんな魔法かは知ら

ないが、彼女もまた、相当な魔力を保持している事が伺えた。

(違うわ！ アルハザードは存在する……)

対して、母さんはひたすらに、アルハザードが存在すると言い続ける。まるで『アルハザードがあることを、すでに確認している』みたいな言い方だった。

それからしばらく進み、少年二人に追いつくと、黒髪の少年――クロノは一人別ルートで母さんの下へ、残りは駆動炉へ向かう算段となった。私が駆動炉へ行くのは、なのはたちを案内するためであって、封印をするためじゃない。駆動炉の直前で、私とアルフはなのはたちと別れ、クロノと同じく母さんの下へ急いだ。

「世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ！」

大広間だった場所の、奥のほうで、クロノの声が聞こえた。アルフと頷きあい、速度を上げる。母さんは、そこにいる。

「ずっと昔から、いつだって誰だって、そうなんだ！」

そこでクロノに追いついた私たち。そこにたのは母さん、アリシア。そして、虚数空間付近で倒れていたミズキさんだった。

「こんなはずじゃない現実から、逃げるか立ち向かうかは、個人の自由だ！ だけど、自分の勝手な哀しみ、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！」

クロノと母さんがにらみ合う中、急いでミズキさんの下へ向かう。

「……テストロッサ？」

ミズキさんが薄く目を開け、私を確認した。よかった、無事みたいだ。アルフにミズキさんを任せ、私は母さんがいる方へ進み出た。

「母さん」

「何をしにきたの。消えなさい。もう貴方に用はないわ」

母さんは本当にうっとしそくに、ただ言葉をつむいだ。でも、私は退くわけにはいかない。目的があって、此処まで来たんだ。

「貴方に、言いたい事があってきました」

私は、アリシアでは決してない。母さんが作った、人形なのかもしれない。だけど、どんな真実があらうと、フェイト・テストロツサが母さんに育ててもらった事。生み出してもらった事。私は、母さんの娘なんだってこと。

ただ、それだけの事を伝えた。

「はははは、だから何？　いまさら貴方を娘と思えと？」

どんなに笑われようと、構わない。ただ、胸のうちにある真実を。「貴方がそう、望むなら。それを望むなら私は、世界中の誰から、どんな出来事からも、貴方を守る。私が、貴方の娘だからじゃないっ。……貴方が、私の母さんだから」

一歩前に出て、手を母さんに差し出した。ただ、母さんがこの手を掴んでくれる事を信じて、伸ばし続けた。

それが願い。望み。私は、どんな事があっても母さんの味方でいる。いや、味方でいたい。他の誰でもない、私の、

「くだらないわ」

でも、母さんはただその一言だけを残して、左手をかざした——ジュエルシードを発動させたのだ。

「まずい！」

再び、大地が揺れ始めた。

（艦長駄目です、庭園が崩れます戻ってください！　クロノ君はジュエルシードを！　このままじゃ、次元断層が！）

アースラの局員から届いた念話。でも、そんな言葉は耳に入らない。だって、大地が割れ、次々と生まれる虚数空間が、母さんの足元にも出来ていたから。

「母さん！」

「フェイト！」

思わず、私は虚数空間に飛び込んだ。背後から私を止めようとしていたアルフの手が、私に届く事はない。

母さんはそんな私を、哀れむような、蔑むような目でずっと見て

いた。

……奈落の底まで落ちたのか。私の身体は、不思議と安定していた。一度、感じた事のある感覚。此処が奈落だというのは、私は一度経験している？

ゆっくりと、緩慢とした動作で瞼を押し上げた。

そこにいたのは――天使。ミズキさんにこうして持ち上げられるのは、二度目のことだった。

「大丈夫だ」

ふわふわと、少しずつ上昇していく私たち。ミズキさんの腕のぬくもりが温かくて、急激な眠気が私を襲う。瞼が、すっと落ちた。

「かあ、さんは……」

「……っ、わりい。間に合わなかった」

ひざ裏にあるミズキさんの掌に、少し力がこもったのがわかった。でも、私の眠気はもう最高潮で。

そのまま、私は夢の中へいざなわれた。

フェイトを抱えた俺は、先を飛んでいたクロノたちに追いついた。「虚数空間でも飛べるのか、キミの能力は。飛んだ化物級だな」クロノが皮肉交じりにそんな事を口にした。俺はただ正面を向いて、口を開く。

「ああ、飛べてよかった」

「って、飛べる保障はなかったのかっ？」

「無我夢中で飛びこんだからな。もちろん、スレイプニールは飛び込む前に発動させたけど」

「……キミとはやはり、一度腰をすえて話をしなければならなないと、そういう話をしているうち入り口付近まで辿りついた。」

エイミイさんが用意した転送魔方陣の前で止まり、振り返る。

崩壊していく時の庭園。テストロッサの、家族の証。物悲しい何かが、こみ上げてきた。

振り払うように首を振って、ふと、テストロッサの顔を見た。

そこにあっただのは——穏やかに眠る、ただ一人の少女の顔だけだった。

第8話 名前を呼ぶこと、ただそれだけが切欠だった。（前書き）

今回で原作の無印編は終わりですが、今作の無印編は今しばらく続きます。

第8話 名前を呼ぶこと、ただそれだけが切欠だった。

自分自身にとって、何が世界で、何がすべてだったのか。すべてを失った時、そこに残されたものは。友達になろうといってくれた、あの子の声が聞こえた。

大切なものが消失した先に、新しい大切なものの影が、うつすらと見えた気がした。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第8話 名前を呼ぶこと、ただそれだけが切欠だった。

庭園の崩壊は、その大きな体躯に似合わず、存外にあっけのないものだった。なにもない空間にただ、消えていく。すべてが内側から巻き起こった虚数空間に吸収され、俺たちはただアースラからじっと、その姿を見つめ続けることしかできなかった。

次元震は、でに停止していた。次元断層の発生も、いまのところは確認されていない。それが、なによりも僥倖なことだった。

それから、時の庭園近くにいたアースラは、すぐに巡航経路へ進路を戻した。最大級の危機から脱したとはいえ、庭園近くはまだ危ない。庭園の消失を見届けたアースラは、すぐに移動を開始したのだった。

さて、脱出に成功した俺たちは、ひとまず怪我の手当てに勤しんでいた。無傷なものは誰一人いない。大小、少なからず皆怪我をしている。

クロノは大きく切った頭に、エイミィさんから包帯を巻いてもらっていた。リボン風にあしらわれたその包帯に、少し笑みをこぼす。高町は軽症であったが、一応とスクライアから治療を受けている。俺はといえば、とりあえず自分で傷の手当。してくれる相手がないからって、寂しくなんてないんだからね！

ちなみに。この場に、アルフとテスタロッサはいない。

その事に疑問を持った高町が、クロノに問うた。

「あれ、フェイトちゃんは」

「アルフと一緒に護送室。彼女はこの事件の重要参考人だからね、申し訳ないが、しばらく隔離になる」

「そんなっ、いたた」

「なのは、じっとして」

反論しようとした高町が、右脚を抑えて黙った。急に動いたから、怪我が痛んだらしい。

スクライアは、そんな高町を少し強い口調で諫めた。高町は黙って、その言葉に従って腰を落ち着かせた。

「今回の事件は、一歩間違えば次元断層さえ巻き起こしかねなかった、重大な事件なんだ。時空管理局としては、関係者の処遇については、慎重にならざるを得ない。それは、わかるね？」

クロノの言葉は、有無を言わさぬものだった。高町は俯いて、「うん」とだけ答え、押し黙る。

たしかに、いずれ名がつくであろうこの事件。ここ最近では、かなり大きな部類のものだった。

テスタロッサ。あの、哀しき運命を持って生まれた少女は、これからどうなるのだろう。

俺はおもむろに立ち上がって、部屋の入り口へ向かった。

「ミズキ」

と、クロノに呼び止められる。振り向くと、厳しい目つきをしたクロノが、じっと俺の事を見ていた。

「……惚れた？」

「ちがう！ ……どこへ行く気だ」

「トイレだよ、トイレ」

軽く答えるが、クロノの目つきは変わらない。ふっ、と目を伏せたクロノがポツリと呟いた。

「ならいいが……間違っても、護送室には近づくなよ」

あらら、釘を刺されちゃったみたいだ。

無論、トイレなんてのは真っ赤な嘘で、まあついで行く気ではあったが、実際のところフェイトの顔を少し見に行こうとしていたのだ。

嘆息を一つ。俺は、足早に部屋を出た。

まあ、一目みるだけだ。ちよつと心配性なんですね。

護送室の近くへ行ったが、嚴重に締められた扉に躓く。そりゃ、大事な参考人さ。けども、ただの女の子相手に、此処まで嚴重な警備体制をしかなくても、と思う。これでは、まるでテストタロッサが事件の犯人だったみたいない扱いで、あんまりだ。

「一目、見ておきたかったんだけどな」

できないものは仕方がない、か。

踵を返し、トイレへ直行。

その日、テストタロッサたちに会える事はなかった。

それから数日間、高町とスクライアは次元震の余波が収まるまで

の間、アースラの中で過ごす事となった。過ぎていく日々の中、局員ではない二人にやることなんてあるはずもなく、結果として局員としてはわりかし暇な俺が相手をする事が多かった。……決して言うが、仕事がないわけじゃない。努々、勘違いなさらぬよう。

さて、そんな日々の中でも一人となる時間は当然あって、そうなる色々と考えてしまう。

今回の事件……俺にとって、アースラ搭乗後の初任務だった。管理局員として、失態の連続だったことくらいはわかる。でも、最良とは言わずとも、結果としてよかった事だっていくつかある。思うがままに行動した結果に悔いをもつのは、なんとも『ミズキ・ナカジマ』らしくない。だから俺は、後ろを振り返ったりはしない。してしまえば、待っているのは今までの崩壊だけだから。

……唯一つ心残りがあるとすれば、今だ会えていないテストロッサの事だけ。そのうちに会って、腹を割って話したい。うん、これだ。

高町とはかなり打ち解けた仲にはなったが、スクライアとは全然。仕方がないとわかってはいるが、やはり哀しい気持ちを消し去る事はできない。これから先、もう会う事がないからといって、交友関係をおざなりにしてしまうのは個人的に後味の悪い事なのだが、どうにも、取り付く島がない。

そんなこんなの数日後、色々とごたごたが片付いたから、改めてお礼がしたいと、リンディさんが高町とスクライアを会議室に呼んだ。簡略化されているが、表彰式のようなだった。

「今回の事件解決について、大きな功績があった者として、此処に略式ではありますが、その功績をたたえ、表彰いたします」

リンディさんからとはいえ、二人とも緊張しているのがわかる。見れば、高町は緊張で変な顔になっていた。あとで思いっきりからかってやろう。

「ナノハ・タカマチさん、ユーノ・スクライア君、ありがとう」

リンディさんから渡された表彰状を、二人は緊張しながらも、嬉

しそうに受け取った。

周りにつられるまでもなく、俺も拍手に参加した。

二人とも、確かによくやってくれた。事件解決の立役者といっても問題ない。

それだけの事を、二人はしてくれた。称えられて、しかるべきだ。リズムカルに叩かれる無数の手。心地の良い乾いた振動に、二人は顔をほころばせていた。

それから、きちんとした会議が始まるため、二人を部屋へ送り届けるよう厳命を受けた俺は、伴って廊下を進んでいた。

無言の時間が過ぎる。

そんな中、ふいに立ち止まった高町が言った。

「ねえ、ミズキ君。フェイトちゃん、これからどうなるの？」

「……事情あり、なんだが。あいつが次元干渉犯罪の一旦を担ったのは紛れもない事実。かなりの重罪だから……クロノが言うには、数百年以上の幽閉が普通らしいが」

「そんな！」

食って掛かる高町の肩を持ち、一呼吸置く。

「落ち着け。今回は状況が特殊かつ、テストロッサ自身の意思で犯罪行為をしていたわけでない、はつきりしている。後は、クロノたち執務官の仕事さ。なに、執務官ってのはすごいんだ、安心してクロノに任せてろ」

かくいう俺も、執務官に救ってもらったたちだしな。

「何も知らなくて、ただ母親の願いをかなえることに一生懸命だったあいつを見捨てるほど、俺の憧れた管理局ってやつは、非情じゃない」

そうして、高町の頭に手をやった。軽くすいてやるように撫でる。やはり、こいつの頭は撫で心地がいい。

テストロッサは、大丈夫だ。こいつが、あの子を救ってくれる。
これからテストロッサの要求されるのは、めげない心。忍耐力だ。
高町の存在が、きつとあいつの中で大きなものとなって、支えてくれる。少なくとも、俺はそう信じる。

「……そんな奴のいう事なんか」

スクライアがポツリと呟くが、高町の耳には届かなかったようだ。
無論、届かせる気なんてなかったんだろうが。

……やれやれ、だな。

次元震の余波は着々と収まる兆候を見せ、明日には、高町の世界への道は開通できるとのことらしい。ミッドチルダ方面の航路はまだ数ヶ月か、半年か。安全な航行ができるようになるまで、それぐらいはかかるという見込み。だから、スクライアは道が開けるまでの間、高町の家で継続して暮らしていくこととなった。

そんな話を、俺たちは食堂で話していた。まあ、最後の晚餐ってわけでもないけど、気持ち的にはそんな感じ。しばらくどころか、高町とはこのまま会う事もないかもしれないからな。

最初は俺、リンディさんに高町とスクライアの四人だったが、次いでクロノが寝ぼけ眼のエイミィさんを連れてきて、結局六人での夕食となった。

そこで話題に上ったのが、アルハザード。プレシア・テストロッサが目的地としていた場所。ある意味、すべての元凶ともいえる存在。

スクライアがその単語について、何も知らない高町にかいつまん

で説明していた。

旧暦以前の話だ。高度な文明を持って栄えた空間『アルハザード』彼の世界は、その高度すぎる文明のせいで滅んだとされ、そこには幾つもの秘術が眠ったままにいる。

そんな、夢物語。クロノがあるかどうかも定かではないといったが、俺も同意見だ。どんな世界にも、御伽噺というものは存在し、それらは決して真実ではない。つまりは、時空世界という大きくなくくりでも、同様だったことだ。

まあ、この話はただの他愛ないものの一環。現実的な話を持ち込むべきではない。

歴史上、魔法や科学技術、それら全てが究極の形にたどり着いていたとされている。その力を使えば、叶わぬ望みは何一つないとさえ伝えられている。

プレシアは、アリシア・テストロッサを蘇らせるために、その道を開こうとした。

しかし、スクライアはその話を否定する。魔法を学ぶものならば常識だと。過去を遡る事も、未来をかける事も、決して魔法には不可能なことだって。

この場にいる誰もが、その意見には同意した。当たり前の話だと、皆考えていたのだ。

……ただ一人、俺だけは、果たしてそうなのかと少しだけ、マツゲ一本分ぐらいの疑念を抱いた。

思い出すのは、プレシアのあの固執ぶり。彼女ほど偉大で優秀な魔導士が、なぜあそこまでアルハザードの存在を信じていたのか。もしかしたら、本当にアルハザードは……。

なんて。今となってはもう、わからない話だ。

今はただ、高町たちとの最後の夕食を、楽しむ事だけ考えよう。

翌日、昨日の夕食メンバーで高町とスクライアを送り出す事となった。

転送ゲートの前で集まり、一人一人、高町と握手を交わしていく。スクライアは例のイタチ姿になって高町の肩に乗っていた。

「それじゃあ、今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

ハラオウン親子からの別れの言葉に頷いた高町は、次いで俺の方を向いた。

「じゃあな、高町。達者で」

「ははは、またね、だよ」

そう言って笑顔を見せる高町。最後だと思い、俺はその頭に手を伸ばした。

高町は嫌がるそぶりなど見せず、頬を紅く染めてされるがまま、頭をなでられる。本当、この撫で心地のいい頭がなくなるのは残念だと、心から思った。

「テストロッサの処遇は、決まったら連絡をよこす。クロノが担当するらしいからな、大丈夫だろ」

振り返ってクロノを見やると、任せておけといわんばかりに大きく頷いて見せた。

「ユーノ君も、帰りたくなったら連絡してね。ゲートを使わせてあげる」

「はいありがとうございます」

そんなリンディさんとスクライアのやり取りも終わり、エイミィさんが確認を取って転送ポートを開いた。

「じゃあな」

「うん！ またね、ミズキ君、クロノ君、エイミィさん、リンディさん！」

そうして、高町は元の世界へと帰っていった。

「さてと、で？ クロノ的にどうだ。テストロッサ、実際のところ」
何だか、久しぶりにクロノと二人で話している気がする。まあ、
此処のところクロノは忙しかったし、俺も俺で高町という事が多か
ったから、当たり前なんだろうけど。

「実際も何も、何とかしてみせる。それ以外にないだろ？」

「はは、期待してるぜ」

「……ああ」

その時一瞬、クロノの表情が強張った。何か、気がかりがあるら
しいことは一目でわかる。

「ミズキ」

「ん、なんだ」

「フェイトなんだが……どうしても、キミに会いたいらしくてな。

僕はあまりの乗り気じゃないんだが、使い魔と二人であそこまで頭
を下げられたら、断るに断れなくて、な」

クロノは、俺とあの少女が関わる事でまた、何かよからぬことが
起きぬか心配してくれている。その事がわかっているから、いや、
わかっているからこそこのクロノ・ハラオウンという人間に感謝し
た。

「ありがとう」

「べ、別にどうという事はない。依頼人の頼みは、極力聞いてやる
のが執務官というものだ」

そうして、俺たちはそれぞれの部屋へは向かわず、テストロッサ
がいる護送室へ足を向けた。

もう歩きなれてしまったアースラの廊下が、やけに長く感じた。
カツカツと、二人分の足音が鼓膜を振動させ、同時に俺の鼓動を速
くした。

あの一件以来、テストロッサに会う事は叶わなかった。それは俺
だけじゃなくて、高町もそうで。俺だけがフライングしている気にな
って、どうにも落ち着かない。

いや、それだけではない、か。
気になっているのだ。俺はあの少女、フェイト・テストロッサの事が。あの、孤独な少女の事が。

「すまないな、今キミから目を離すわけにはいかなくて」

「ううん……お願い、聞いてくれてありがとう」

数日振りに会ったテストロッサの顔は、相変わらず無表情なそれだった。ひどいことをしていたとはいえ、やはりあのババアがこいつの表情って奴を引き出してくれていた事実には歯噛みする。

アルフとクロノは俺たち二人から離れているとはいえ、元々狭い部屋だ。会話など駄々漏れ。まあ、テストロッサはそれでかまわないだろうけど。

さてさて、一体何の話やら。

ありがとうとごめんなさい、って言葉が一番妥当な結論だった。

結果的に、あの時俺はテストロッサを助けたわけだし、あのババアからの仕打ちも、俺は俺の意思でテストロッサに取って代わっていた。テストロッサからしてみれば、自分のせいでまったく関係のない人間が傷ついた、って感じなんだろう。コイツは本当に、優しい子なのだから。

「その……、」

しかし、テストロッサの第一声は俺の予想のほぼ斜め上に行くものだった。

「私と、友達になってくださいっ」

それは、どんな心境からの言葉だったのだろうか。見れば、テストロッサは瞳こそ俺の事を捉えて離さないでいるが、その肩は振るえ、今にも崩れてしまいそうな儚さを持っていた。

友達になろう。それは高町がずっと、テストロッサに対してアピールしてきた事。高町が、まだ返事はもらっていないと、愁いを帯

びた表情で語っていた事を思い出す。

唯一の肉親だった母親の消失。それから、他者との交流が極力避けられていた数日間。テストロッサは何を思っ、今日に至ったのか。

思わず伸びた右腕に、テストロッサは身構えることはなかった。予想していたのか、我ながら、こんなに簡単に行動を読まれるとはなさない。

サラサラのストレートヘア。そういえば、ゆっくりとテストロッサの頭を撫でる機会は初めてかもしれない。絹のように柔らかなそれは、高町のものとはまた違った幸福感を、俺に与えてくれた。見れば、震えていた身体はなりを潜め、正面にいる俺を見やるその顔からは緊張と言う言葉が抜けていた。

「俺でよければ、喜んで。友達になろうか」

「……はい。なら……名前で、よんでください」

俺は、ファーストネームとファミリーネームを、確かな意味の元使い分けている。

それは、俺が出来る事ならばなんでもしてあげたい人であったり、守らなければならない人であったり。前者は、特別な言い回しなのだ。

ま、とはいえ数少ないわけではない。この世の中ってのは、俺にとって大事な人ばかりで溢れかえっているのだから。

テストロッサからお願ひされなくても、後々そうするつもりだった。俺はテストロッサを……いや、フェイトを守りたい。彼女は、俺なんかよりもずっと悲惨な運命にあるのだから。

それに……『あの事』もある。だからか、俺はこの少女との間に何か宿命的なものを感じてならないのだ。

「フェイト、ならこっちからもだ。俺たち、同い年だぜ？ 敬語は

禁止な」

「っ、うん。……ミズキっ」

思えば、この時こそ邂逅。『フェイト』と初めて会った日だった

と、後々になって思うのだった。

さらに数日が過ぎた。

高町には吉報だったろう、彼女はフェイトと会うことが出来るようになった。それは一時間にも満たない、短い時間だったけれど、あの二人にとってはこれまでの軌跡に匹敵する、大事な時間だ。遠めで見つめていても、雰囲気とその事を伝えてきた。

「あー」

「? どうしたんだい?」

遠く、瞳に涙を浮かべ抱き合う二人を視界に収めつつ、ポツリと呟いた俺に、アルフが首をかしげた。

「いやさ、なんとなくだけど……俺って実はすごい重要な場面を目撃してる気がするさ」

「なんだそれは」

答えたのは、アルフとは逆側のベンチで腰にかけるクロノだった。俺の言葉を嘲笑する。

アルフはいえ、もしかしたらあの二人以上かもしれない大粒の涙を拵えて、大きく頷いた。

「それはわからないけどさ、やっぱりいい子だね、あの子。フェイト、泣いてるけどあんなに笑ってる」

「そうだな」

動物形態のスクライアに慰められているアルフをよそに、視線を二人に戻した。

と、クロノがゆっくりと立ち上がり、二人へ近づいていく。

時間が来たらしい。

「二人とも、時間だ」

クロノとて、終わらせたくない時間だったのだろう。語調が、少し弱い気がした。

けれど、これからフェイトは本局への移動となる。

すでに裁判の日も決まっているし、ここに長居するわけにはいかなかった。

名残惜しく離れた二人。そこで、高町が不意に大きな声でフェイトを呼んだ。

「待って！」

そう言って、短く纏められていたツインテールを解いて、留めていたピンクのリボンを束ねて差し出した。

「思い出に出来るもの、こんなものしかないんだけど」

それが、高町とフェイトをこれからも繋いでいく一つの縁。「じゃあ」と、フェイトも自分の黒い髪留めに手をかけ、解いて差し出した。

交わされた互いのリボン。二人は、離れていてもきっと大丈夫なのだろう。この時、核心に似たものを感じた。

「それじゃあな、高町」

「うん。ミズキ君もね！」

転送の術式が完成し、俺たちがアースラへ送られる間際。最後に交わされた言葉はそんなものだった。なんというか、自分の間の悪さにくりとする。ここはフェイトと高町の間面だったろうに。

最後まで、締まらないのも『ミズキ・ナカジマ』らしい。そんな考えが、一つ、俺に笑みをもたらした。

プレシア・テストロッサ事件。事件NO・AP00575641
55ーC735542。

ミッドチルダきつての天才として過去、第一管理世界に名を馳せた魔導士プレシア・テストロッサによる時空間船の襲撃、及び積荷とされていたロストログアの略奪。他、遺失遺産の違法使用による次元災害未遂事件。

主犯であったプレシア・テストロッサ自身は虚数空間に身を投げ、消息不明。

重要参考人として、事件に直接的に関わった実の娘フェイト・テストロッサの身柄を確保。現在審判中。

あれから数ヶ月。

わたし、高町なのはは今日も元気でいます。つい最近、ユーノ君も仲間たちの下へ帰っていき、ちょっぴりさびしさがこみ上げてきたこの頃。

夏のうだるような暑さが本格的にわたしを責めあげてきて、正直げんなりとしてました。

夏休みまであと少し。

とりあえずしばらくは引きこもってゲームでもしようか。なんて、不健康な近年の小学生の実態を素で考えながら、朝のHRを受けていたときの事です。

担任の先生のある言葉が、クラス中に波紋を呼んだ。

「実は、今日は転入生が来てます」

転入生。夏休みまで二週間とないこの半端な時期、刺激に飢えていた小学三年生のクラスメイト諸君は脱力していた身体が嘘のように跳ね上がり、先生に質問質問質問と、攻撃を繰り返した。

自席についてじっとしていたわたしや、親友のすずちゃんも、内心はわくわくを隠せず、お互いに顔を見合わせてにっこりと微笑んだ。ちなみに、もう一人の親友であるアリサちゃんはクールに肩肘を立てているように見えるが、気になってしかたないのを必死で抑えているのがわかった。少し大人っぽく見られがちなわたしたちだけれど、やっぱりまだまだこどもなのだ。

「はいはい！ それじゃ、入ってもらってから静かにしなさい！」

そんな事で静かになるはずもなかったが、先生はもう諦めているらしく、数秒もせずに扉を開けて転入生を招きいれた。

——啞然。

転入生は少し長い前髪の男の子だった。以前より全体的に、髪の毛は伸びている。もしかしたら、散髪していないのかもしれない。

「えーと、」

男の子は口を開く。声は、あのときのままだった。

「転入生の、中島みずきです。これから、よろしくお願いします」

……なんていうか、意味がわからなかった。

幕間

第8・5話 それでも、この世界が大好きだった。

「それでは、もう遅いですし、今日はこのあたりで」

そう言って、クロノが立ち上がった。私も慌てて立ち上がり、クロノに習って深々と頭を下げた。

「いや、頭を上げなさい。ハラOWN執務官。君の紳士な振る舞いは、私も高評価している。だからこそ、簡単に頭を下げてはいかん」
そう言って、目の前の中年男性は私たちの頭をあげさせると、ニコリと、人好みの良い笑顔を浮かべた。安心感から、頬が緩んでしまったのがわかる。急いで気を引き締めると、男性は私にも恰幅の良い笑みを浮かべて言った。

「テストロッサ君。笑いたいときに笑う。これが、一番だ。我慢をする時というのは確かにあるが、今はその場ではない」

「はい」

あっけにと取られている私に、横目でクロノが笑っているのが見えた。なんだか、狐につままれた気分だ。

「今日は、これからたぶん一番の味方になってくれる人だ。だから、粗相のないように」

なんて言っていた今朝の事を思い出す。そりゃ、冷徹な人だなんて一言も言っていないけどさ、身構えもするよ。

「では、今度こそ……失礼します、アクセラーさん」

それが男性の名だった。男性は今まで笑っていた顔を一瞬で引き締めると、静かに頷いた。

「尽力しよう。私の見た限りで、テストロッサ君に非がないのは明らかだからね」

その言葉を聴いて、私はやはり頭を下げた。こうする事が、一番正しい事だと思えて。

二人はそんな私を見て、優しく、笑みを浮かべていた。

「ん……」

事件からもう一月。私、フェイト・テストロッサは今ミッドチルダにいます。

ミッドチルダは第一管理世界の事で、いうなれば、次元世界の中心ともいえる世界。そんな世界のさらに中心、首都クラナガン。裁判が終わるまでの間、私はクロノとリンディさんの家でお世話になっていました。

昨日会いに言ったアクセラーさんは、どうやらかなり顔が利く執務官らしく、クロノの尊敬する先輩の一人なんだとか。さらに、彼は正義感が人一倍で、そんな彼が右と言ったら、右に進む人が何十人もいる。そんなわけで、彼に見初められた時点で、私の罪が法律上、凶腰は軽くなる事はほぼ確定らしい。

「まあ、それでも完全に無罪に持っていくには、まだまだなんだけどな」

これはクロノの談。でも、私的には今でももう十分というか、すぐくありがたい事は間違いない。

でだ。

クロノは別件の仕事で、今日は留守にするらしい。リンディさんも、アースラ関係でちょっと出かけるそう。必然的に、家には私とアルフだけになる。でも、家主不在のよそ様の家で一日中すごせるほどのメンタルは、私にはまだなかった。

その事をクロノに伝えると、苦渋を舐めるそぶりを見せた後、頷いてなにやらメモ書きを書いて渡してきた。見れば、簡素だが綺麗に纏められた地図と、たぶん時間を表しているのだろう、数字の羅

列が少し。

「これ……」

「ああ、僕としてはここでおとなしくして欲しいんだが……これから一月、フェイトはもっと踏ん張る事になる。だから、ストレス発散と思って行つて来るといい。それは、ミズキの家までの道のりと、レールウェイの時刻表だ」

受け取った一枚の紙。心の中に、薄暗い雲が浮かんだ。

「どうした？」

私の表情から暗いものを感じ取ったのか、クロノが訝しく、疑問を口にした。私はただ頭を振るばかりで答えはしない。

会って、いいのだろうか。そんな疑問が渦巻いた。彼の言うことの真意を理解しようとせず、己の我が儘で傷つけてしまった彼に、私なんかが。

思い出されるのは、クラナガンを訪れた初日。あの時の私は、ある種の孤独感を持っていた。

なのはと心を通わせ合えたばかりだった私は、共にいられぬことに内心、ひどく落ち込んでいた。そんな私を満たしてくれる存在はもちろんアルフト、そして、ミズキ以外にいなかった。

……だから。私が、一人で耐え忍ぶ事さえできていたなら、見なくて、聞かなくてすんだ。ただ、それだけの――

「フェイト」

クロノの声が、思考を断ち切る。顔を上げれば、そこにある瞳はいつになく真剣で、そして哀しい色をしていた。

「ミズキは、強い。君が思っている以上に、ずっと。それに、君が気後れをして関係が拗れることの方が、あいつには堪えるはずだ」
ミズキ・ナカジマ。

そうだ、彼はそういう人間だった。価値基準の中では、常に己よりも他者を上として、それ以上はない。

まだ共に過ごした日々は浅いけれど、重々わかっている、不変の事実。

「きっとあいつは、逆にフェイトに嫌な思いをさせたんじゃないかって、後悔している。だから、これは僕からのお願いでもある。会ってやってほしいんだ、ミズキに」

まだまだ、だな。

そう思った。

クロノとミズキの仲――間柄は、私の及びつかない所にある。確かに性別が違う私がそこに辿り着くことはできないのかもしれない。嫉妬、だと思った。この、心臓が締め付けられる思いは、きっと「……うん。ありがとう、クロノ。じゃあ、今日はアルフといってくるね」

私は内にたぎるその想いを内に留め、笑みを浮かべた。

「ああ、今日は台風の日だ。小休止と思って、嵐に備えるといい」しばらくぶりに、ミズキに会える。怖くて仕方の無かった事實は、いつの間にか心躍る出来事として、私の世界を七色に染め上げていた。

フェイトはずっと、時の庭園で暮らしてきた。だからだろうが、彼女はここ、ミッドチルダに到着してから終始キョロキョロと周りを見てはおどおどとし、ミズキの腕を掴んで離さないでいた。そんなフェイトに、ミズキはやれやれといった感じでその体を預けていたが、その目はどこかうれしそう。頼られる事全般、あいつはすきだからな。

まあ、フェイトがああなる気持ちもわからないでない。確かにフェイトの中には時の庭園以外の場所ですごした記憶もあるのだろう

が、それはすべてアリシアのもの。現実感をはっきりと持った過去ではあっても、フェイト自身の体験ではないのだ。

だから、これが初めてなのだ。フェイトにとって、魔法体系を完璧に維持した世界に来たのは。

「クロノ」

ミズキの声が、こちらへ向いた。時空艦の港から転送ポート、そしてレールウェイに乗ってクラナガンまでやって来た。目の前にあるのは、時空管理局本局。此処が、フェイトにとって長い戦いの始まり。

……アースラでの移動中、ミズキと話し合ったことがあった。

ミズキと目配せをして、僕は一度、大きく頷いた。ミズキはニコリと笑うと、フェイトの肩に手を置いて、自分の方へ振り向かせた。

「なあ、フェイト」

「ミズキ？ えと……何？」

いつもと違う真剣なミズキの目に、フェイトもなにやら予感めいたものがあつたのかもしれない。不安げに、瞳を瞬かせた。

「俺は此処までだ」

それがどういう意味だったのか、フェイトは少しの間考えをめぐらせ、たどり着いた答えに首を大きく横に振った。

「だ、駄目！ まだ私、一人だと……」

ミズキはこの先には行かない。つまり、自分が傍にいてやれるのはここまでだと、ミズキは言ったのだ。

「それに、なんでっ」

フェイトの疑問は、もっともだろう。だが、僕は知っている。その理由を。

ミズキは一瞬だが、哀しげな色をした目になった。けれど、すぐにそれを矯正し、フェイトの両肩を掴んでその双眸を真摯に見つめた。

「クロノだっている。……俺が一緒にいていいのは、ここまでなんだ」

フェイトは視線を僕に向けた。動揺している気持ちだが、克明に伝わってくる。僕はただ背筋を伸ばし、大きく一度だけ頷いた。

「でも、だって、私っ」

フェイトは、ミズキやなのはとの友情で確かに強くなった。しかしそれは、大事な物が増え、それを守ろうとする意識が生まれたことと平行して、そんな大事な人たちに心を助けられてもいる。それに、知らない土地であるという事実もある。フェイトは今、心支えられる存在が必要なのは確かだ。

だけど、これからのフェイトの事——裁判やその他諸々の事を考えれば、ミズキが隣に寄り添い立っている事は、どうしたってマイナスにしかない。

「……」

ミズキは押し黙って、ただ乾いた笑いを浮かべるだけだった。しばらくそうしていたが、ちらほらと、本局から人が出てきているのに気がついた。丁度お昼時だった。

まずいと思ったときにはもう、手遅れで。

ひそひそと遠くから聞こえる声が、黙り合っているこの場では耳にとっても響いた。

その内容は、正直歯噛みするものばかり。ぎゅっ、と握り締められた拳が濡れるのがわかる。掌に、血がにじんでいるのだ。

フェイトも周りを飛び交う言の葉に戸惑い、ミズキの服を握る手に、さらに力がこもったのが、目に見えてわかった。

ミズキの顔は、笑いを作ろうと必死なのに、やはりどこか悲しげでいて。次第に、フェイトの手から力という力が抜けていった。

「どう、して」

「まあ、妥当な結果だ。だから、俺はいくよ。少なくとも、此処では一緒にいちゃいけない」

ミズキが昔いたゲリラ集団は、正直管理局ですら手を焼いていたほど、規模が大きいものだった。被害こそ、例外はあれど管理局単体に対してのものばかりだったが、いや、だからこそ根強い復讐心

を持つものが管理局にはいる。その気持ちが伝染し、誇張され、ミズキの本局での立ち位置は、正直かなり厳しいものとなっていた。

僕らはまだいい。無視を決め込んでいればいいだけのこと。けれど、フェイトはかなり状況が違うのだ。

これから無罪を勝ち取るため、心象を良くする必要がある。だからこそ、ミズキが隣に立つことを、執務官として許可できない。苦渋の選択の結果が、これだ。

フェイト自身、ミズキの過去というものに少なからず触れた事があった。だから状況を察したのだろう。あれほどまでの依存はなりを潜め、ミズキとの間に距離が生まれ始めていた。

「クロノ。フェイトのことよろしくな」

「……ああ、まかせておけ」

ミズキは微笑むと、踵を返して駅の奥へと消えていった。今回はフェイトの事と同時に、アースラ的大幅な整備もされることとなつたため、乗組員はしばらくの休暇が言い渡された。

「ミズキはこれから、家族のそこへ帰るんだそうだ」

「……うん」

「あまり面識はないが、あいつの妹たちがきつと元気付けてくれるさ。フェイトも、あまり気に病む必要はない。なにも、君のせいじゃないんだから」

返事は、返ってこなかった。

示された地図の果てにあったナカジマ家。

たぶんここであっているのだろうけれど、正直緊張は隠せない。

それに、あのときの事もある。なんて謝ろうか。そんな事が、い
一番に浮かんだ。

「フェイトお、そんなに気にしなくてもいいんじゃないかい？ あ
いつは色々図太いやつなんだからさ。気にしてなんかないよ」

「でも、やっぱり謝らないと」

と、アルフと外でそんな会話をしているときだった。唐突に開か
れた玄関に、身体がびくりと震えた。

見れば、そこにいたのは青みがかかった髪の毛をした少女だった。
私よりもまだまだ年下らしいその少女は、私とアルフの顔を交互に
見て、首を傾げる。

「お、おきゃくさまですか？」

少しおどおどとしている。私はともかくとして、アルフは結構な
長躯だし、怖がらせたのかもしれない。アルフもそう思ったらしく、
笑顔でにこやかな表情を作った。

私も試してみただけど……やっぱり、まだまだ自然な笑顔とい
うのは難しかった。本当にいいことがあると、自然に出るんだけど
な。

「フェイト・テストロッサっています。お名前、聞いてもいいか
な？」

「え、あう。ス、スバル・ナカジマ。っです」

ペコリとかわいらしく下げられた頭。スバルちゃんはとてとてと
やってきて、門を開けてくれた。

「ありがとう」

そういつて頭を優しくなでてあげた。ミズキの癖。私も、もしか
したら映りつつあるのかもしれないと、一人苦笑する。

「えと、おうちの人、いるかな？」

スバルちゃんは思いつきり頷くと、駆け足で家の中へと戻ってい
った。

「かわいいこだねえ」

「うん。あれが、ミズキの妹、なんだね」

少しして、今度こそ現れたのはミズキだった。何も変わっていない外見なのに、久しぶりだからか、ちょっと大人びたようにも思える。一週間しか経っていないというのに、相当な依存度だなど、またしても軽く笑ってしまった。

「よお、フェイト」

彼もまた、気兼ねなく笑う。考えすぎだったというのが、少しだけわかった気がした。

「うん、久しぶり」

「久しぶりってほどじゃないけどな」

そんなやり取りをしていると、ミズキの後ろで彼の服のすそを掴んで隠れているスバルの隣に、もう一つ影があるのを確認できた。

青というより、紫色をした髪の毛と、スバルちゃんに良く似た容姿。妹は二人いるって話を前に聞いていたので、すぐにピンときた。ゆっくりとした動作で近づき、己の膝に両手を乗せてニコリと笑う。今度は、笑顔が自然にこぼれた。

「こんにちは。フェイト・テストロッサです」

「……ギンガ・ナカジマです」

……あれー？

最初は怖がっているものとばかり思っていたのに、ギンガちゃん、何だかすごく怒ってらっしゃる？

むすっとした表情からは真意が読み取れないものの、きっと機嫌が悪いのであろう事が見てわかった。

「えと、私お兄さんの友達で、」

「知ってる」

「あ、はい」

「……」

「……」

そこで途切れる会話。取り付く島がないとはこの事だ。岸すら見えない。

ぎゅっ、と。

ギンガちゃんの手に力がこもって、ミズキがさらに引き寄せられていた。

……なんだかわからないけれど、すごい敗北感。イライラはしないものの、心の動悸が治まらない。

「あ」

そこで気が付いた。なるほど、わかってみれば、案外簡単な回答だ。

「もしかして……お兄ちゃんを取られると思った？」

「……っ」

無言のまま、さらにミズキの服が伸びた。やっぱり、これが正解だったらしい。

「……お兄ちゃん、帰ってきてからフェイトさんの話ばかり。だから」

こうして私に渡さないように、か。

私とそんなに歳は変わらないだろうギンガちゃんは、兄が語る見知らぬ相手の存在がどうにも嫌だったのだろう。

ミズキが普段からどれだけ好かれているかわかったと同時に、先ほどまで感じていた動揺はなくなった。変わりに、ミズキが家で私の話をしてくれていた事が、たまらなく嬉しかった。

だから、そんな高揚した気分が乗じて、ギンガちゃんの頭にも手を伸ばす。一瞬戸惑ったギンガちゃんだったけれど、しばらくされているうちに為されるがままになった。

「……すごく癪です」

「え？」

きっとミズキには聞こえていない。私に届くか届かないか程度の本当に小さな声で、彼女は呟いた。やけに大人びた声色だった。

「お兄ちゃんが饒舌に喋っていた相手が悪い人どころかすごくいい人でしかも撫で方とかお兄ちゃんにすごく似ててそもそもめっちゃかわいい人だし私なんか私なんかううう」

……なんていえばいいのかな。うん。怖いよ、ギンガちゃん？

「ほら、ギンガ。お客様なんだし、とりあえず家に入ってもらおう。頭なでられるの好きなのは俺も知ってるから、家の中で存分にしてもらえばいい」

ギンガちゃんの瞳に一瞬涙が見えた。……なんとなくんだけど、わかるよ気持ち。私に頭撫でられるのが好きなわけじゃないって事。

どうしようか悩んだ挙句、そうだと決めて、ある『魔法』を発動させた。

（大丈夫だよ、ギンガちゃん）

「っ」

念話。数ある魔法の中でも、かなりポピュラーな部類に入るこれは、相手に魔法の素質さえあれば聞き取れる。ミッドチルダに住んでいるのならば、大体の人には話しかけられるのだ。

（ミズキを……お兄ちゃんを取ろうだなんて思っただけから。ミズキのこと、大好きなんだね）

そう言って笑いかけると、見る間にギンガちゃんの頬は赤く染まっただけ。俯いてしまったその頭を、最後にぽんぽんと軽く叩いた。

「招待、してくれる？」

「……はい」

何とかうまくいったみたいだった。

それからミズキの両親に挨拶を済ませ、ガールフレンドだとか彼女だとかからかわれて赤面したのもいい思い出だ。

……あの時、ギンガちゃんの表情や言動がまた怖くなったのは、私の勘違いだと思っていたものだ。

その夜、私はふと目をさました。

ミズキの母であるクイントさんの提案で、本日はナカジマ家に泊まる事になった私は、あてがわれた部屋ではどうにも寝付けなかったのだ。

クロノが始発で帰ってくるのなら、と許してくれたから実現した宿泊。早く寝なきゃと思う反面、チラリと横目で見たものに頬をゆるませ、眠気はとんだ。

アルフに包まれて眠っているのはスバルちゃんだ。かわいらしい寝顔に、つつい見とれてしまう。

スバルちゃんは最初こそ怖がっていたが、割とすぐに打ち解け、やれ一緒にお風呂に入ろう、一緒に遊ぼうと懷かれ過ぎて困ったくらいだ。

今だって、一緒に寝たいからとアルフの布団に潜り込んだ後。問題は……逆側。振り返ると、安らかな寝息を立てるギンガちゃんがあった。

半ば、スバルちゃんに無理矢理連れて来られた彼女とは、寝る直前まで語らった。

大半はミズキの話で、いかに素晴らしい兄であるかだとか、だから渡しませんだとか、大いに熱弁していた。

……さっきは、なぜギンガちゃんの言葉に心から頷けなかったのか、わからない。なんだかんだ、もしかしたら私もミズキの事を兄と思っているのかもしれない。だって、私も同様に、彼と離れたくないと思っているのだから。

やっぱり駄目だと身体を起こし、へやをでた。勝手にうろうろするのは気が引けたけど、夜風に当たるだけと言いついて歩みを進める。

しばらくして、縁側に続く窓を見つけると、そこにはすでに先客がいた。ミズキだ。

戸惑ったものの、ままよと決めら窓を開ける。気づいて振り返ったミズキと目があった。

ああ、すっかり忘れていた。私は今日、謝るために此処へ来たんだ。だから、はやく、さあ。

「ごめんな、さい」

果たして、ミズキは首を傾げて見せた後、思い出したかのように

笑った。何時もの笑みだ。

頭に乗せられる掌は、もうすっかり馴染んでしまった。最早ミズキ専用にチューンされているかのように、自然だ。

つうと、頬を伝う涙。悲しみのものじゃない。

母さんがいなくなつて、確かに心には大きな穴があいた。けれど、こうしてミズキといると、そんなものはないかのように心が暖くなる。

離れてみて、再認識した。やはり、彼は必要だった。

終始、二人は無言で。そんな二人を月だけが優しく、照らしていた。

第9話 それは、必要な事だった。

似ている。素直にそう思った。自分自身には何が無くて、何があったのか。それがいかに大切で、必要で、全部わかっていた。

だからこそ、導く必要を感じた。近い未来、背中を預けあう仲になれたらいい。そんな、夢を見て。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第9話 それは、必要な事だった。

集中。

イメージするのは、静寂なる水面だ。風は無く、音すらも彼方へと消え果て、ただそこにあるは一つの静。

一転。

動を呼び覚まし、波立たせ、奮わせる。

「福音たる輝き、この手に来たれ」

詠唱を刻む唇の動きと同調して、水平に右腕を持ち上げる。大地へと向けた掌に、淡く、暖かな熱を感じた。

「導きのもと、鳴り響け」

紡がれた一小節の詠唱。言い終わるのとはほぼ同時に、瞼を押し上げて視界を広げた。この瞳に映る世界と、それ以外の世界。全てを脳内で統合し、構築。想い描く軌道のまま、桜光の魔力を操作した。今日の訓練は突発的だったため、標的物の用意（普段は空き缶を使っている）がない。しかし、だからといって、訓練の効率が下がるわけではない。今回の目的はただ、思い通りに動かせるという、

一点に尽きる。

身体に触れる、ギリギリのラインで動かし、くるくるとわたしの周りを飛来させる。自らの身に当たるかもしれない恐怖が、逆に集中力を増加させる。人はいつだってそうだ。火事場の馬鹿力ってやつ。追い込まれてこそ、真価を発揮する。

だから、フルパワーで。

全力全開とまではいかずとも、コンクリートの壁なら軽く貫通できるぐらいに魔力を圧縮して、速度を調節する。

《十分経過しました マスター》

レイジングハートが無機質な声で、淡々と述べた。わたしは頷いて、魔力結合を解除。大きく深呼吸。もう一度深く、縦に頷いた。

「ありがとう、レイジングハート」

《問題はありません》

日に最低は一度（大抵は朝だが）、こうやって実技的な訓練をしなければ感覚が鈍る。

最近は常として、レイジングハートによる魔力矯正（一種の魔力版ギプスのようなもの）をこの身にかけて、複数思考を同時に可能とする魔法『マルチタスク』を用いての仮想戦闘訓練。

これだけやって、不足とはいわないけれど……やはり実際に魔法を運用すると又、別の話。だからこそ、実技訓練は必要なのだ。

今日は学校が予定よりも一時間早く終了し、アリサちゃんたちは習い事へ行ってしまう、必然的に一人となった私は、本日発足したとある『問題』解決に奔走しようと試みたものの、志半ばで挫折。やる事がなくなったので、こうやって毎朝の訓練所まで足を運んだ、というわけだ。

夕焼けに染まりつつある空を見上げ、今日はこの当たりかな、と決めたその時。

「ここにいたか。まったく、探したぞ？」

それは、やっぱり久しいって、感じてしまう声色。やれやれとい

った表情を浮かべたミズキ君がそこにいて、何だか拍子抜けした。

「こっちの台詞なの。ミズキ君こそ、今朝、転校してきたかと思えば休み時間は教室にいないし、放課後もすぐに消えるし……」

「担任の先生と話をしていたんだ。満足？」

「一応……」

「そりゃよかった」

と、ミズキ君は手近にあったベンチの存在に気付いたらしく、躊躇無く腰を下ろした。そんなミズキ君だったが、瞳はぼちちりとわたしを捉えている事に気が付く。暗に、隣に座れて事らしい。

断る理由もないので、近寄って、ミズキ君の隣に腰掛けた。髪の毛は伸びた風だけど、身長とか、その辺はまだ、あのときのままだった。

「とりあえず……そうだな」

ミズキ君は空を見上げた。習って同じ所作で首を上げると、紅に色づけられた茜空が広く、果てしのないものに思えた。

「本日から此处、海鳴市での勤務となったミズキ・ナカジマ三等空士だ。どうぞ、お見知りおきを」

伸ばされた腕。掌を反射的に握り返す――握手を交わす。

「えと、つまりは……どういうこと？」

口ぶりからして、海鳴市でまた、事件が起こり、その対策にミズキ君がやってきた、というのが一番しっくり来た。時空管理局の仕事内容は詳しく知らないけれど、お手伝いをしたいと思った。ただ純粹に、わたしにはそれをやるだけの力がある。最近は実力が付いてきたことも実感していたから、そんな考えが芽生えた。ミズキ君の助けになりたいという思いもある。

わたしのそんな思考回路が読まれたのか、はたまたそうでないのか。不意にわたしの頭にのせられた手。懐かしくもあり、心地の良い感触に頬が緩んだ。見れば、そこにあったのは優しく顔をほころばせるミズキ君……が、『笑顔過ぎる笑顔』に変わっていく様を見て違和感。ある種の予感があった。反射的に頭を後ろにそらそうと

すると、そこで発動する元来の運動神経の悪さ。指先一つで強襲された額に、痛みが走った。

「……いたいよ」

「おしおきだ」

何の？ と、聞きたかったのだけれど、まだデコピンの余波が尾を引いていて、うまく声が出せず、おでこを抑えたまましばらく、こみ上げてくる涙に抗っていた。

さらに夕陽が傾き、段々と退いていったデコの痛み。今度こそきちんと言葉を紡ぐ。

「おしおきって、何のこと？」

「ま、その辺も含めて俺の任務は、お目付け役ってとこだ」

そう口にして、ミズキ君は曲げていた両脚を伸ばして、天を仰ぎ見た。

「高町はさ、たぶん将来は管理局で働く、つもりだろ？」

「それは……」

将来。少し前……あのジュエルシードの件が起こる前にちよびつとだけ、本気で考えた事があった。自分は近い未来、なにをしているのだろうか。自分に向いているものって、一体なんだろうと。不確かであやふやで、見えない世界。やはり、わたしにはまだそこを見ることは叶わない。

「ま……入局するかしらないかは置いておくにしてもだ」

俯いて押し黙るわたしに、躊躇しつつも、ミズキ君は先を続けた。

「危ういんだ。今の高町は」

「危うい、って？」

「改良後のスターライトブレイカー」

口を次いで出たわたしの疑問は、そんなこの場におよそ似つかわしくない一言にずしんと押しつぶされた。

「クロノが目撃したあれな、決定打だったみたいだ。あれ自身というより、その時知られた訓練内容がな。明らかなオーバーワークなんだよ」

先程ミズキ君の言った改良版スターライトブレイカーとは。

それは、わたしが独自に改変し、生み出したわたしだけの魔法。いふなれば「スターライトブレイカー+」

本来、集束魔法の代表格として数えられるスターライトブレイカーだけれど、その特色は他の集束魔法と一線を敷く。自らのものではなく、外の世界にあふれている魔力の残滓を用いるそれは、殆ど己自身の魔力を攻撃面に回せない。発動させるために魔力は用いるものの、それだけで大概はおなか一杯。つまりは、同日同時刻同場所にて放たれたスターライトブレイカーに威力の違いはほとんどないのだ。

けれど、ユーノ君が言うには、わたしには元々固有スキルに数えなくても遜色が無いぐらいの集束技術があるらしい。それは、ミズキ君の『スレイプニール』と同様の稀少技能―レアスキル―いふなれば『魔力収束』

そんな力を生かした新たなスターライトブレイカー。限界ギリギリまで詠唱時間を延ばし、わたしの中で燦ってる魔力を上乗せして放つ一撃。

威力というよりも、注目するはその特性だといわれた。なんとなく組んだ術式は、「結界の完全破壊」という追加付与を内包する結果となったのだ。

「将来、高町とフェイトは管理局を担うエースとなる。クロノだっそうだ。だったら、管理局がそんな子どもに何を望むのか……実力をつけることもそうだが、何よりも健やかな成長。それ以外には無い。若いうちからの厳しい訓練による自滅を、してほしくないんだよ」

「っ、でも！」

反論ではない。これは、わたし高町なのはの本心。そして、高町なのはの全て。

「わたしには、魔法しかないから……っ」

ミズキ君は、どう思ったのか。こんな、力でしか自分を体現でき

ないわたしを。

あきれ？ 戸惑い？ それとも無関心？

ぼう、と虚空を見続けたままのミズキ君の表情からは、そのすべての感情を伺う事が可能な気がした。

数十秒にも思えた一瞬。

おもむろに、ミズキ君は立ち上がった。

「なんか、似てるよ。高町は」

「え？」

つかの間もなく、ミズキ君は青い宝石がぶら下がったブレスレットを天上に掲げた。

純白の光に包まれ、瞬く間に形作られたバリアジャケット。

やはりミズキ君のそれは、わたしのものと驚くほどに酷似していた。

「俺とはまだ、戦った事無かったよな？ いい機会だ。ただ身体を酷使するだけの訓練に意味など無い事、俺が教えてやるよ」

杖の先端をわたしに向けたミズキ君は、自信満々にそう告げた。

色々と、わたしにも思うところはあったけれど、どこかそんなミズキ君の提案を喜んでいる自分もいた。

目に見える形で、練習の成果を実感できる機会が無かったからかもしれない。あるいは、フェイトちゃんですら叶わなかったミズキ君と、戦ってみたいと思ったのかもしれない。

どちらでもよかった。ただ、この戦いを望んでいる自分自身の存在に正直に、わたしはレイジングハートをセットアップした。

初手は高町からだった。

五発の魔力スフィアを展開、そして順次放射。数は第一陣が二発。続いて二発。最後に一発。

それら全てが誘導性能を持つディバインシューターに加え、空間認識力の高い高町が操作している事も考えると、避けきけることは得策でない。また、地上では俺と高町では戦力面で比較にならない。

結果、まずはスレイプニールを使用し、空へ飛んだ。すぐに追いつくシューターだが、それらを避けたところで誘導が切れるわけではない。

即座に式を構築。

《ワイドエリアプロテクション》

スカイラインによる音声の後、円形のバリアが展開。俺をすっぽりと包み込むそれに、次々とシューターが飛来する。

「っ、く！」

何がディバインシューターだってんだ。一撃一撃が、信じられないくらいに重い。地力の差が出ているとって間違いは無い。だが、負けるわけにも、行かない。

すべてのシューターを耐え凌ぐと、すぐに俺は飛翔を開始した。基本的に、高町の戦闘スタイルは単調だ。じわじわとシューターで削り、砲撃もしくは集束による放射でズドン。スタンダードすぎるがあまり、対応策は真正面からの対峙以外にはない。

少なくとも、高町はそう思っているだろう。あいつは、あまりにも対人経験が無さ過ぎるから、それもいたし方が無いのだが。ほぼフェイトとのみの実戦経験では、得られるものが多いが、得られないものもまた多い。

魔力を全身に伝わらせ、一気に加速。反射的に飛ばされたシューターの間を掻い潜って、高町に肉薄する。

高町の弱点。それは、大出力の砲撃に頼るあまりなれていない近接戦闘の類。

いくら俺にその才能がないとはいえ、シューティングアーツを得

手とする母に妹ともども、手ほどきを受けていた。近接戦闘で、そんなじよそこの奴に、負けるはずも無い。

「わっ、ととと！」

杖による打撃を次々に打ち出していく。勿論、詠唱の暇など与えない。

そのうちに体勢を崩していった高町は、不意の事で足を取られ、その場に尻餅をついた。

その首もとにデバイスの先端を当てて、ニコリと笑みを浮かべた。啞然としている高町だが、さぞかし悔しい事だろう。実力をまったく発揮する事もなく、終わってしまったのだから。

「……おわり？」

「ああ。残念賞はないぞ、高町」とはいえ、こうなることは必然の結果だった。

高町はあくまで魔導士ランクA A A『相当』の魔導士だ。言ってしまうえば、正式な試験を受けていない。

魔導士ランクとは、ただの魔力保有量を示す目安ではない。あらゆる戦闘状況において、的確な判断を下せ、なおかつ生存率の高い者。勿論、魔力量も審査対象ではあるものの、第一基準ではないのだ。証拠に、俺のランクは空戦A+。魔力保有量だけなら、一般的なCランク程度なのがいい例だ。

高町は素質の塊だが、やはり正式な訓練に良い教官が付くのと付かないのでは、後の輝き方が違ってくる。将来のエースを育てるだなんて大役、よくもまあ俺なんかには押し付けたものだ。周囲の反対を押し切ったリンディさんのごり押しに、少し苦笑する。

今だ、尻餅をついたままだった高町に手を差し伸べた。だが、高町はすぐには手を取ろうとせず、じっと差し出された掌を見つめていた。

「どうした？」

「まだ、終わりじゃないよ！」

自分の力でぐっ、と立ち上がると、高町はデバイスを俺に向けた。

やれやれ、姫様は納得されてくれなかったらしい。

「ま、何回やっても『まだ』同じ結果になると思うけど」

「そんなの、わからないよっ」

「さてさて、後何回戦うことになるやら。」

暗さを増していく海鳴の街だけが、俺たちの戦いを傍観していた。

自室に入るとすぐに身体は布団を求めてダイブした。相当な疲れがたまっているらしい。

「それもこれも、全部ミズキ君のせいだ……」

完敗だった。いける！ と思った戦闘もままあったものの、結果的にはいつもわたしが地に臥すものにしかなかった。

『じゃ、そのハードスケジュールは俺に勝つまでお預けな。これからは、俺の組み立てたメニューで訓練をしてもらうから』

ミズキ君は最後の試合が終わった後、いつもの笑顔でわたしの頭をなでると、こんな事を言ってきた。渡された練習メニューに目を通したけど、言ってしまうばこんなもの、お遊びだ。今までの訓練量よりもはるかに少ないそれを見て、漏れた正直な感想だった。

『そりゃ、そうかもな。でも、成長期の高町に合わせて調整してある、バランスのいいメニューだって俺でも思う。俺たちはまだまだ、成長の余地が十二分にある九歳だ。適当にしてたって伸びるんだから、より安全な方を選択しようぜ？』

理屈はわかる。でも、だからといって、簡単には承諾できない。

わたしが唯一、人に誇れる素質。それが魔法だ。魔法との出会いはわたしに自信をくれて、その成長はわたし自身の成長にも繋がっ

ていた。だというのに……

「わかってないよ、ミズキ君は」

眩きは、果たして誰の耳にも届かない。

翌朝、いつもの訓練所へ着くとそこには先約がいて、一人汗を流して瞑想していた。

ミズキ君だった。彼はやけに集中しているようで、普段見ることの無い真剣な面持ちで佇んでいた。魔力を集めているのは見てわかる。それを体現せずにいるのは、おそらくは大きな魔法を使うためののだろうか……

と、そこで彼はわたしの存在に気付いたようだった。たまっていた魔力は霧散し、汗をだらだらとたらしめているものの、いつもの笑顔でわたしを迎えた。

「よう、おはよう」

「う、うん。おはよう。それよりも、なんでここに？」

「どーせ、高町は俺の渡したとおりの訓練なんてしてくれないだろうしな。それに一人じゃ出来ないメニューだってあったろ？」

凶星だった。わたしはいつものように同じ練習をしてから学校に行く心積もりだったのだ。

「で、でもっ、やっぱりあんな程度のじゃあ、」

「まあ落ち着け。昨日も言ったけど、魔力矯正やマルチタスクによる戦闘訓練はそこそこに抑えろとは言ったが、やめろとは言っていない。そこは高町の裁量に任せるって。ただ、朝と夕の実際に魔法を使う訓練だけ、規制をかけるんだよ」

「どうして！」

「必要だからだ」

駄目だ。やはり、このまま話していても平行線のまま終着する。わたしはうん、と覚悟を決めてデバイスの展開をした。

「勝ったら、口出しはしないんだよね」

「……まーな」

ミズキ君も習ってスカイラインを展開し、バリアジャケットに身を包んだ。シューターを発動させようとしたところで「待った」と声がかかる。

「確かにその約束は果たすが……戦闘は、一日一度だけな。あまりにやりすぎると、結局は身体を酷使することになる」

言い返そうにも、確かにミズキ君の目的からしたら間違っていない言葉だったので、何も口からは出なかった。

「じゃ、来いよ」

「っ、遠慮なく！」

早朝、小鳥のさえずりが良く耳に響いていた。

「残念でしたー」

「ううう……」

結局勝てなかった。やはり、戦闘方針を変えていくしかないらしい。そっと心の中で、レイジングハートに聞いてみた。

（マルチタスクで、ミズキ君を相手に模擬戦闘は可能？）

（勿論 ただまだミズキ・ナカジマ三等空士の情報は完全ではないので、完成度は低いですが）

（ううん、十分だよ。よし、早速今日から練習だ！）

と、見れば通学バスが目の前に来ていた。ミズキ君と共に乗り込むと、バスの際後部座席から聞きなれた声が届いて、思わず笑顔になる。

「なのはー！ こっちこっち」

「おはよう、なのはちゃん」

「うん、おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん」

そのまま二人の間に入って座る。と、アリサちゃんが一緒に乗り

込んだミズキ君の存在に気付いたらしく、いつもの快活な声で声をかけていた。

「中島って、家この辺なんだ？」

ミズキ君はわたしたちの一つ前の席に腰を下ろすと、振り返って答えてくれた。

「結構、高町さんの家の近くだよ」

「へえ」

続いてはさすがちゃん。何はともあれ、転入生であるミズキ君は注目の的なのだ。

「中島君って、前はどこに住んでいたの？」

「――県だよ」

当たり障りのない回答は、きっと事前から決めていたのだろう。それにしても……

何だかミズキ君、猫をかぶっている気がしてならない。口ぶりとかは普段と大差ないんだけど、なんていうか挙動や仕草なんかは、普段みない上品なそれになっていて、ぶっちゃけわたしからしてみれば違和感しかなかった。

「ああ、それよりもバニングスと、月村だったか。それと高町。これから、よろしくな」

「もっちゃん。仲良くしましょ」

「こちらこそよろしくお願いします」

笑顔を交し合うわたしたち。

こうして、ミズキ君はわたしたちの輪の中へと入っていった。

第10話 分岐点とは唐突なものだった。(前書き)

このあたりから主要人物の性格に齟齬が出てきます。ご了承を。

第10話 分岐点とは唐突なものだった。

大事な物。誰にでもある大切。わたしにとってそれは、身の回りの家族、友達、そして――。

世界の知らない誰かを守ろうだなんて思わない。ただわたしは、大切な彼らのために。

『魔法少女リリカルなのは ―Diamond dust―』はじまります。

第10話 分岐点とは唐突なものだった。

からっ、とした空気を肺一杯に吸い込む。

うだるような暑さがたまらなかった夏は、もうその影すら見えることもなくなり、ススキがこんなにちは、って挨拶をしてきました。

季節は秋。

ミズキ君がわたしたちの世界へきて、はや、2ヶ月――

「ちょっとミズキ！ 何なのよ、さっきのあれは！」

授業間の中休み、アリサちゃんの声が教室内にこだました。すずかちゃんとお手洗いから帰ってきたばかりだったわたしには、うまく状況が飲み込めない。確かにアリサちゃんの表情は真剣なそれだったのだけれど、ミズキ君のは「やれやれ」って感じ。そんな相反する面持ちの二人が対峙していたからこそ、さらにわからない。

「ど、どうしたの二人ともっ？」

足早に近づいて仲裁に入る。食いかかっているのがアリサちゃんなのは見ればわかるので、とりあえずアリサちゃんの腕を軽く掴んだ。

「ありえないわ！　ほんとと、イライラする！」

言い残して、アリサちゃんはずんずんと自分の席まで戻っていった。アリサちゃんにはすずちゃんに着いていたから……わたしはミズキ君に事情を聞いてみることにした。

「一体どうしたの？」

アリサちゃんは自分の気持ちに素直な子だ。でも、だからといって理由なく人に当たることなんてない。理由が、あるはずだった。「いやさ、どうもさっきの授業の態度が気に入らなかったらしくて、な」

さっきの授業とは、体育のことだろうけど……。

「ほら、あいつがずっとこけたところに、俺が当てたろ？　あれが気に入らなかったみたいで」

今日の体育はクラスを二分してのドッジボールだった。

そういえば、アリサちゃんが床に滑ってこけたところを、ミズキ君が軽く当てていたことを思い出す。

「バニングスのやつ、手を抜かれたっていうか、とにかく気に入らなかったみたいでさあ」

なるほど、ミズキ君が苦い顔をしていた理由に合点がいった。ミズキ君からすれば、無抵抗なアリサちゃんに本気で投げつけるなんて、出来るわけがないのだから。

でも……。

「それだけ、なのかな」

なんとなくだけど、それだけじゃない気がした。アリサちゃんが怒る程のことだろうか、と。

「まあ、時間が解決してくれるさ。……もしこのままでも、嫌われる事には慣れてる。平気だよ」

そういつて、ミズキ君は笑った。

なんだかその笑顔が無性に悲しく、わたしの瞳には映って、思わず彼の制服の裾をつかんだ。

「高町？」

アリサちゃんはきつと、ミズキ君の中で『線の外』なのだろう。自惚れと思われるかもだけど、わたしがもしアリサちゃんと同じだったら、ミズキ君は放っておかない。……そんな、気がする。

「……だめだよ？ 仲直り、しなきゃ」

「……そうだな」

わたしの頭に、暖かいものが触れた。

高町との模擬試合は、まだ続いていた。とはいっても、毎日ではない。精々、週に三回。毎回敗因を考え、それを直した上で、再戦を挑んでくる。

まだ負けてはいないものの……さすがに、才能の塊だ。もうそろそろ、危険な気がしてきた。

結局、お昼の一件以来、バニングスは口をきいてくれない。その事が気になっていたからなのか、放課後に試合を申し込んだきた高町には危ないところまで追い詰められてしまった。……まだまだ、だな。

フェイトや、高町のことならいず知らず、バニングスの……他人のことが気にかかってしまうなんて、な。

「うー、今日こそいけると思ったのに……」

「ま、そう簡単にはいかないさ」

公園からの帰り道。すっかり薄暗くなってきたこの頃は、高町を家まで送るのが習慣となっていた。高町の実力があれば危険はないと思うが……まあ、念のためだ。こんなとこに自分の過保護ぶりを感じ、苦笑した。

「じゃあ、この辺で」

「うん、ありがとう。ミズキ君」

あと曲がり角一つで高町の家が見える、って位置でお別れ。これはまあ、以前高町の親父さんと偶然遭遇したときに色々と面倒くさい事件が起きてからの対処法だ（説明は割愛するが、まあ、娘を思う父ってことだ）。

高町と別れた俺は、まっすぐマンションへ向かって歩く。本来はこの世界に住居など持っているはずも無いが、これは仮住まいってやつ。本局から支給されたもので、1LDK、正直小学三年生の一人暮らしには広すぎるが、ま、仕方がない。

と、もうすぐそこだと思ったその時だった。曲がり角から飛び出してきた人とぶつかった。

こちらにそれほどの衝撃はなかったものの、あちらはちがったように、尻餅をついた少女が倒れていた。どちらに非があるかといえど、たぶんあちらなんだろうが……さすがに「てめえなにぶつかったんだこの野郎」的なことを口にするつもりは無い。どこのチンピラだ。

「すみません、大丈夫ですか？」

「……ふん、気をつけろよ」

手を差し伸べるも、少女は俺の手を掴むことなく立ち上がり、駆け足で去っていった。日も暮れているし、門限でも近いのかもしれない。俺と同一年くらいだろうから、親だってあまり遅くまで遊び歩く事を容認はしないだろうからな。

「ん？」

見れば、少女が先程お尻をつけていた地面に、硬貨らしきものが落ちていた。

「十円……おーい！」

振り返ってみると、まだ少女の大きな三つ編みが見えていたので、結構大きな声を出して少女を呼び止めた。

気付いたらしい少女はぴたりとその動きを止め、振り返った。

「これ、落し物」

早歩きで少女へ近づき、十円を差し出した。

「おお、悪いな。ったく、シャルのやつもなんであたしにおつかいなんて……」

とりあえずぶつぶつと呟く少女に別れを告げ、家への帰路に再び着いたところで、今度はこちらへ呼びがかかった。

「おい！　これ、落としたぞ！」

……今度は俺が落し物らしい。家の鍵だったが、なぜ気付かなかったのか。なんだかんだ、まだ抜けてるな、俺も。

「ありがとう」

「いや、こっちもお金拾ってもらったしな。おあいこだ」

落し物を拾いあった仲とは、なんとも言いがたい関係だったが、こういった偶然は時に予期せぬ出会いをもたらす。今回も、その例に漏れない事態であったことは、言うまでもない。

「お前、見ない顔だよな。最近引っ越してきたのか？　つつても、

あたしも変わらないようなもんだけど」

「ということは、そっちも引越しの口？」

「ま……そんなとこだ」

どうやら少女は数人の家族と共に最近この街へやってきたらしい。で、居候している家で鍋を囲んだはいいものの、水炊きに必要な醤油がなく、結果おつかいに派遣されたということだ。

「とと、そんなわけであまりゆくりしてらんねーんだった。シャルたちはともかく、はやてもお腹すかせてまってんかん」

「そうだな。俺も腹減ったし、この辺でお別れだな。また、会うことがあったらな」

「ああ、それじゃ急ぐから。またな！」

快活で元気で、うん。すごく好感の持てる少女だった。できれば、仲良くなりたいものだ。

「って、そうだ！ 名前！ 俺は——」

叫ぶと、少女は器用に走りながら振り返ると、ニコリと笑った。

「ヴィータ！ あたしはヴィータってんだ！」

「一人でも多くのエースが必要だ。奴は気付いているか、または、気付くか。ただの偶然ではないことに」

《それは無理でしょう 人間とは とかく理解の出来ない事象・因果・その他諸々を信じようとはしない》

「……だな。こちらとしても、感づかれては困るから、丁度いいが

……」

《では 次の時間軸へ》

「ああ」

「ミズキ君、ちょっといいかな？」

それは翌日の放課後、鞆を片手にやって来た月村の言葉だった。ちなみに、バニングスとは一日口をきいていない。向こうから話し

かけて来ない以上、致し方ないのだが。

「ああ、別に用事はな……あるっちゃあるけど、少しぐらいなら」

一瞬目が合った高町から殺気に似た何かを感じた。約束しているわけではないが、毎日放課後、高町の訓練に付き合ってた（監視していたから、反故にされるとでも思ったのかもしれない）。

（悪いな、ちょっと待っててくれ）

（う、うん）

念話を高町へ送った俺は、月村に続いた。

人通りの少ない階段付近で足を止めた月村の話とは、どうやらバニングスとの喧嘩について。まあ、俺は喧嘩とも思っていないのだが。

「アリサちゃんも、悪気があるわけじゃないの。アリサちゃん、手加減とか、そういうの本当に駄目で……」

「手加減したつもりはないんだけどな」

「……直前にわたしと投げ合った時とは明らかに違ったけど」

そりゃそうだ。俺がやったのは手加減じゃなくて相手に合わせての実力発揮。毎回全力でやるなんてことはしない。

月村の場合は、運動神経が並外れてよかったからそうしたのだ。時々いるのだ。魔法など一切関与しない、レアスキルみたいな能力を持つ人間って。

おそらく月村もその類なのだ。見た目完全な文学少女でありながら、常の小学三年生にはありえない程の運動神経。あれは先天的な力に他ならない。まさか、こんな人間社会に溶け込んだ亜人というわけもあるまいしな。

「とにかく、バニングスに本気で投げたら怪我をさせたかもしれない。これは手加減とはいわないだろう？ 別にバニングスを侮って馬鹿にしたわけでもないし」

「そうだけど……」

まだ何か、言いたい事があったらしい。

数秒迷った挙句、月村は意を決して顔を上げた。

「アリサちゃんのことだけじゃなくて、ミズキ君、どこかわたしたちと距離、置いてるよね？」

疑問ではなく、断定。

やはり、気付くものなんだな、こういうのって。

「先生とも……なのはちゃん以外の全員と」

高町に対しての態度まで看破されるとは予想外だったが、それだけ、周りは注意深いということだ。うん、勉強になる。

「……今だって、正直どうでもいいって、思ってるよね？」

……すごいな、この子。

ちゃんと真剣な表情は出来ていると思ったのに。

「ねえ、わたしたち、友達にはなれないの？ アリサちゃんも、本当はその事を伝えたいんだよ。仲良くなれたって思ったのはわたしたちだけ？ 違うよね？」

きつと月村は、友達関係とか、すごく大事にする子なんだろう。

俺から見ても、交友関係が決して広いとは言えないからかもしれない。それは、高町・バニングスを含めた三人全てに言えることだ。

この三人は、たぶん『大人びすぎている』んだ。

「俺は……」

ここでの回答なんて、一つしかない。もうしばらくはここで落ちて着いて暮らす必要があって、だからいらぬ波風なんて立てたいわけも無い。だからこそ、嘘でも何でも、回答は一つしか――

「わりい、その通りだわ」

ないはずだった。

なのに、どうしてか。月村の目を見ていると、嘘が言えない。まるで、首もとに刃でも押し付けられているような、強制的な力が働いている気がしてならない。無論、一般人である彼女にそんな力があるはずも無く。

「俺は――」

話してしまった。

魔法関連の詳しい事は説明せずも、家族がいないこと。昔、人を

殺してしまった事。その他諸々、心に抱えていた、殆ど誰にも話してこなかった事を、一つ残らず。

「本当は辛くて、すげえしんどい。でも、でもさ。妹たちもクロノも、フェイトも高町も、俺に何が出来るかっ、何も出来ないかもだけど、守りたい。どうせ無かったはずの命だ。俺のために使うなんて、そんなこと、出来ない……っ」

ふと頬に触れた月村の指先。そこで初めて、涙が伝っていた事に気が付いた。そして、月村までも、涙を流す。

「ごめん、なさい。そんなこと、……思い出させたかったんじゃないの……」

こんな時、ミズキ・ナカジマはどうしていた？ 迷わず、頭をなでて、何でもなかったかのように振舞う。それが正解。

今それが出来ないのは、きつとただの『ミズキ』だから。ミズキ・ナカジマでない俺は、相手を気遣うとか、考えない、無感情で無表情で、悲しい男なのだ。

言葉は無かった。ただ無言で、抱きしめられる身体。

心地の良い暖かさ。もう少して、俺は『ミズキ・ナカジマ』に戻る。ならば、戻ったその時は――

「ありがとう、月村」

この子もだ。

単純といわれようと、そんなことは知らない。俺は今、この子も守りたいって思った。月村すずかという、一人の女の子を。

ミズキ君の経歴は、大方把握しているつもりでいた自分が、とて

も情けなかった。

すずかちゃんとミズキ君の話がどうしても気になったわたしは、いけないことと思いつつもこっそりと後をつけ、そして聞いてしまった。

いままでのミズキ君の印象や想いが全て消え去るわけは無い。だけど、何も知らずにただ安穩と、ミズキ君が守りたいと思った人に含まれていた自分が、恥かしい。

立場に不満があるんじゃない、ただ、ミズキ君が自分の命よりも重いといっていたことが、だ。

わたしは——なにも持っていない。ミズキ君がその命を投げ渡すほど、高尚な存在なんかではない。

何も出来なくて、愚鈍で、どこにでもあるただの女の子だ。

右腕が震えた。左腕で抑えるも、左腕も震えた。

「あ、れ……？」

止まらない細動。

なんてことは無い。全身が震えていたのだ。

ただ怖くて。

ただ情けなくて。

ただ——

「わた、しはっ」

わたしは、どうすればいいのか。

ミズキ君のことをどう思っているのか、それは正直まだわからない。理解の出来ない感情があることは間違いないけれど。

足音を立てないように注意し、その場から離れた。

教室に戻って、鞆を捕らえて、下駄箱で靴を履き替え、ただ走る。ミズキ君がわたしを守るっていうのなら……わたしも、ミズキ君を守ればいい。

ミズキ君はきっと、「同情なんかで変な決断すんなよ」とかいうんだろうけど、これは同情なんかでは決して無い。

ただ、知らずミズキ君の重しになりたくないって思った。なおか

つ、ミズキ君の負担を、少しでも軽くしたいって思った。

いつの間にか到着したいものの公園。

わたしはただ、わき目も振らず、魔力を開放した。最近、大出力を抑えてた分、その力は自分でもすさまじいと思った。

でも――わたしにはこれしかない。ミズキ君を守る力。ひいては、わたしの大事な人を守る力。

そうだ。ミズキ君とわたしは、同じなんだ。過去にミズキ君は、ただ自分に力があつたから、魔力があつたから味方を守るために戦場に立った。いまのわたしも、等しく同じことを考えている。

正義じゃなくなつていい。自分が正しいと思えることを、例え悪魔と罵られようと、愚直に進もう。

すべてはそう、わたしの大事な人たちのために。

第11話 自分では見えない自分が、本当の自分だった。

本当の自分とは、どこにいるのか。自分自身の事が、誰よりもわからなくなった。きっとこうだろうと思っていた姿は虚空に消え、残ったものは。

だから、見つけるための戦い。これは、きっとそのための試練。『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第11話 自分では見えない自分が、本当の自分だった。

三日前から、イライラがおさまらない。

理由はもちろん、ミズキとのあのやり取りが根幹にあるのだけけど、それに対していらしているわけではない。

あたしはあたし自身、アリサ・バニングスに対して、怒りの感情を抱いていた。

ミズキがあたしたちに対して、心を開いてくれない事なんて重々承知だった。それがわかっていたのに、あんな風に怒鳴ってしまうだなんて、ほんと。子供過ぎる。

ま、だからといってあたしが謝るのも筋違いだって思ってるけどね！

「おはよーアリサちゃん、すずかちゃん」

いつもの停車場で、なのはとミズキが二人そろって通学バスへ乗り込んできた。ミズキの家はどうやらこの近辺らしく、なのはとほこうして朝いつも一緒だ。

……この二人は、妙に仲がいい。転向してきた次の日から、もう普通に話していた記憶がある。まあ、ミズキの方もなのはの方も、昔からの知り合いとか、そういった類ではないと言っていたが。

「おはよう、なのはちゃん。……ミズキ君も、おはよう」

そして、一昨日。

決定的に、すずかのミズキへの対応が変化した。なんと言えいいのか……すぐく気を使っている幹事なのだ。ミズキの方も、そんなすずかにやさしくしている。少なくとも、あたしと接する態度とは明らかに違う、いうなれば名の葉に接するときのような対応を見せていた。

何かあったのだろうかことは推測できたけど、聞けなかった。なんとなく、ミズキのことを話題とすることがはばかれたのは、喧嘩している最中だったから。もっとも、あっちは喧嘩とすら思っていないのだろうけれど。

……そういうところも、なんだか釈然としなくてむかつく。何大人ぶってるのよって感じで。

要するにだ。あたしはきつと中島みずきとかいうこの少年の事が心底気に入らない。

あたしだけ、一人違うんだ。ミズキにとって、あたしだけ。

仲間はずれという疎外感が、思いの他『効いている』らしい。ミズキに特別扱いされたいわけじゃ、決してないけど。

「ああ、おはよう」

おそるおそる声をかけた風だったすずかだったけど、ミズキのおちついた返答に、頬を赤らめて笑顔を作った。

それから、ミズキだけはあたしたちと別の席へついたので、なんだかやっぱりあたしだけのけ者扱いされている気がして。

学校へつくまでの間、あたしはずっと、うつむいたままだった。

「ねえ、アリサちゃん」

放課後は習い事。

今日はさすがとバイオリン教室の日だった。常のようなその日常はあつという間に過ぎ去り、今は宵も暮れた頃合だった。

「ん？」

「今日……なんだか元気がなかった？」

やっぱり、すずかはあたしの親友だ。あたしが不調なときはきちんとわかってくれる。

……でも、今はそんな気遣いが少しわずらわしい。あたしの醜い部分（友達を取られたと勝手に思ったり、仲間はずれの疎外感を勝手に感じていたり）がすべて、月明かりの下にさらけ出された気になって、あたしは背を向けた。

「ううん、ありがとう。すずか」

感謝は本当。でも、いまのあたしはちゃんと笑えているかが不安で、だから彼女に背を向けて言葉をつむいだ。

「ちよっと、お手洗い行ってくるね。先に車乗ってて」

別にどうしてもトイレに行きたかったわけでもないけれど、とりあえず一息を置きたかった。

運転手にはすぐに戻ると告げ、バイオリン教室がある方へ足を進めた。とにかく、きちんとあやまろう。

このあまりきれいとはいえない気持ちは、そっと胸にしまいこんで。

飛来してくる、桜色をした四つの魔力弾。

そのどれもがそれぞれ独立した動きをして俺を追い詰めようとしているあたりが、高町の才能といえる部分だろう。

通常、追尾性能を伴う魔法はオートマチックの性能によるところが大きい。それは、追尾弾すべてを自分の思考で操ろうとするとうしても誤差が生まれ、結果として単調な動き、読みやすい軌道しか生まれない。

しかし高町はそのオートマチック化するはずの軌道をすべて己の思考能力で操っている。とてもじゃないが、魔法を覚えたての子供にできる技術ではなかった。

とはいえ……『技術』と『戦力』とはイコールではない。どれだけ優れたものをもっていようと、経験がなければ何にもならないのが、実際の戦闘というものだ。

四方から飛んでくる魔力弾は確かに複雑『そうな』動きで迫る。一見、だ。

しかしそれはもはや、テンプレート化された『予測不能な動き』対人経験の少ない高町にとって、相手の虚を付く動きはすべてデバイスであるレイジングハートに記録されたデータだ。正直、そんな過去の遺物なんか頼った戦術が、現役の管理局員に通じるわけが無いんだ。

まったくもって読みやすい軌道の弾を飛んで避ける。正直、スレイプニールを発動している俺にとって、この程度は障害にすらならない。

《シュート・バレット》

そこそこの魔力を込めた一撃を飛ばす。威力はそれほどない魔法だけれど、その速度には少し自信がある。

高町はシールドを展開する間もなく攻撃にあたり、俺はニコリと笑った。

「ここまで。まあ、60点つてとこだな」

「ううう、やっぱだめかあ……いつも格闘で負けてたから、今日は中距離維持をしようと思ったのに」

その発想は間違いじゃない。つか、俺が高町に勝っている点つて、近接戦闘技術と滞空技術、それと経験ぐらいなものだ。その他の魔力保有量、空間認識力、エトセトラ……。

諸々は完全にあちらに利があるし、高町がこのまま俺と戦い続けていけば絶対必要な「経験」も多少手に入れることになる、俺は敵わなくなる。きっと、近い未来の話だ。

「さ、とりあえず帰って学校いこうぜ？ 今日結構、時間くつちまったしな」

「う、うん！」

日課の早朝訓練で、今日は高町が例の勝負を挑んできた。

……あの日以来、少し心配だったんだが、気鬱だったみたいで本当によかった。

一昨日のことだ。ずずかと別れて教室に戻ると高町はいなかった。先に帰ったのか、ぐらいの気持ちでいると、突然に感じた魔力の爆発。間違いなく、高町のものだった。

急いで公園まで行ってみれば、呆然とした表情で立ち尽くす高町は、振り返って——いつもの笑顔を浮かべた。

なんだかむしろくしゃしたから。もうしないよ。

そんな言葉を聞いた。何も、こちらから聞いていないのに答えた高町はやはり不審で、けれど否定するところなんて何も無かったから、それっきり。

あれから、高町は無茶な訓練をやめた。

本当の意味で、身体を酷使する事をやめたのだ。勿論、マルチタスクでの訓練などは継続でやっているようだったが、驚くべき進歩だっと思う。あそこまで強くなる事を渴望していた高町になにがあったのか。

……俺には何も、わからない。

いつものようにバスに乗り込んで、違和感。

バスの最後尾、いつも高町を待っている二人がいるはずの場所に、今日は一人しかいなかった。

「すずか」

俺が声をかけると、なぜか隣にいた高町の肩がびくんと震えた。気にはなったが、今は別に気がかりな事があったため、そのまますずかの隣へ腰を下ろした。

「……バニングスは？」

「……」

なにかよからぬ事態である事は容易に想像できた。すべてはすずかの表情は物語っている。

俯いたままだったすずかは、バスの発進を知らせる振動で意を決したのか、思いっきり顔を上げて俺と高町を見据えた。突然のことだったからか、驚きから高町は身体を振るわせた。

「アリサちゃんね、昨日習い事の日だったの。いつも、終わるの遅くなるからアリサちゃんの車が家まで送ってくれるんだけど――」
要約すれば、なんてことのない簡単なことだった。

バニングスが、誘拐された。ただそれだけの事実を、すずかは口にした。

バニングスはかなりすごい家の令嬢らしい。誘拐だなんて、非日常な言葉が出てきたのはそのためだ。とはいえ、穏やかな話では決して無い。

けれど、時間というのは止まる事がない。常に流れ続ける。すずかも高町も、バニングスをいくら心配しようと、バスは学校に到着

するし、ホームルームも始まる。

二人が俺の席へやってきたのは、一時間目が始まる十分前だった。

「ミズキ君……」

「……あんま、気をつめんなよ」

二人とも、顔が浮かばれない。

その気持ちも、わからないでもない。もしバニングスじゃなくて、誘拐されたのが妹たちやフェイト、高町やすずかだったなら、俺も二人のように取り乱していた事だろう。なんとかしたいって、躍起になってすらいたかもしれない。

だからこそ、俺が二人を落ち着かせる役だと思った。立ち上がった、両手を二人の頭にのせた。

「……ミズキ君にとってさはさ、」

二人の顔に、笑顔は戻らない。

すずかが、ひっそりとした声を出した。

「アリサちゃんのこと、どうでもいいのかもしれない。……でもね、アリサちゃんはね、ちよつと違うんだよ」

「違う？」

「うん。ミズキ君が転入してすぐの頃、だったかな。アリサちゃんが言ってた。『アイツはいい奴ね』って。机運んでる途中で落としたノートとか、率先して拾ったり。消しゴムなくしたって人と一緒に、一所懸命探してたり。……愛想はいいけど、どこか冷たい印象があったミズキ君の事、アリサちゃんは誰よりも早く見抜いていたの。良い奴だー、って。だから、きつと怒ったんだと思う。自分が認めている相手に手を抜かれたってことが」

違う。良い奴だなんて、勘違いだ。

「それは、違うんじゃないかな。俺はただ、当たり前のことしかやってない。意識して優しい事しようとしたわけじゃ、」

そこで、すずかがクスツ、と笑う。今日初めての笑顔だ。見れば隣の高町も笑っていた。

「意識してやってないから、『良い人』なんだよ」

そう、なのだろうか。

わからない。

ミズキ・ナカジマは確かに優しいだろう。友達や家族の事を一番に考え、行動する。くだけた言い方で、冗談もいうけど、相手の事を傷つけないように気をつけている。

その程度の「設定」だ。

ミズキ自身、ふとした瞬間に現れる本当の俺は、そんな理想の姿なんてしていないはずだ。

今だって、バニングスの事は正直どうなってもいいって思ってる。友達として、付き合っていたはずなのに。

「そんなに、悩む必要があること、かな」

それは、今まで口をつぐんでいた高町からのものだった。ひっそりとした、でもやけに耳に残る声色だ。自然と、すずかと俺の口は閉じてしまう。

「ミズキ君が優しいって、決めるのはミズキ君自身じゃない。わたしたちがそう思えば、そうなる。とっても、簡単なことなんだよ」
すずかが高町の言葉に続いて、口を開いた。

「アリサちゃんは、ミズキ君が何を考えてるのかは全然わからないって言ってた。でも、だから怖いとか、酷いとか、そんなのはなくて……純粹に普段のミズキ君を、優しい奴だって」

「だから、それは」

「作った自分だから？ そんなの、関係ないって、さっきなのはちやんが言ったよ？」

やはり、わからない。

素の自分が果たして、皆がいうように良い奴なのか。ミズキとは、排他的で、何度も何度も、してはならない事をしてきた犯罪者だ。そんなミズキが、良い奴だなんて……。

「っ？ ミズキ、君？」

急に動き出し、荷物を荷物を鞆に詰め始めた俺に、すずかが驚いたように声を大きくした。そんなすずかには目もくれず、鞆に全て

の教材を収納した俺は、二人に頭を下げた。

「悪い、体調悪いわ。今日は帰るな。先生に、言っといてくれるか？」

「う、うん」

「ふふ」

すずかは戸惑いながらも頷き、高町は何がおかしいのか小さく笑った。

何故笑ったのか聞きたかったが、それよりも今は、時間が惜しい。

二人に礼を告げ、教室から一步踏み出した。

予鈴になる。いつもどおりの毎日だったはずの今日が、何故だか大きな『切欠』になる。そんな予感がした。

「なのはちゃん、ミズキ君……怒っちゃったの、かな」

すずかちゃんが恐る恐るそんなことを聞いてきた。わたしはただ首を横に振って、それだけ。すぐに予鈴は鳴って、わたしたちは席に戻った。

まだ先生は来ない。職員会議が長引いているのかもしれないな、と思った。

ふと思いついたわたしは、ノートの端をちぎってシャープペンですらすらと言葉を綴った。振り返って、目のあったすずかちゃんにくしゃくしゃに丸めたそれをふわりと投げた。

書いたのは、なんでもない、唯一の事実。

？アリサちゃんのこと。あんな風に自分の事を考えてくれてるってわかったら、ミズキ君は黙ってなんていられないよ。？

先生が来るまで、猶予があつてよかった。わたしも、決心がついた。

先程のミズキ君のように机の中身を次々に鞆に詰めていく。クラスメイトが不審に見ているけど、知った事か。

アリサちゃんが心配なのはわたしも一緒に、そしてわたしにも、ミズキ君と同等に抗う術を持っている。なら、彼と一緒に。

立ち上がって、一直線に教室の入り口へ向かった。不意に開かれた扉にびっくりするものの、怖じずに廊下にいた先生に笑顔を向けた。

「高町さん？」

「すみません！ 早退します！」

一直線にダッシュ。たまには、サボりもいいんじゃないかな。なんだか、そんな何でもないことで笑えた。

「え、ええっ！ た、高町さん！」

「なのはちゃん！」

背後から先生とすずかちゃんの声が聞こえた。ただわたしは片手を上げてそれに答えて、あとは全速力でミズキ君の後を追った。

高町が追ってきたのはびっくりしたが、高町だって魔導士。それも極上の。この次元世界だけで括るなら、彼女は並大抵の相手には負けない力がある。

仕方ないなど、それだけ伝えて、とりあえず自分の家に高町を連れて行った。まずはバニングスがどこにいるのか。それを探る必要があった。

「高町、その辺に海鳴の地図があると思う。そう、その辺だ。探しててくれ」

雑多にモノがつまれているエリアに指をさし、高町に指示を出した。まあ、これだけ質素な部屋で、さらにダンボールと机、ベッドぐらいしかない部屋だ。高町が地図を見つけるのに、それほどの間はかからなかった。

「これでいいの？」

「サンキュ」

受け取った地図を、部屋の真ん中で広げる。海鳴の全容が今、目の前に展開された。

行使するのは、魔法とも言いがたい適当な術式。

フィールド魔法の応用で区域毎に町を包み、その中にバニングスを探す。

魔力を持たぬ人々にも、それぞれ特有の気配というか、感じる何かがある。リンカーコアとは、誰もが持っている魔力の根幹となるもの。そこから感じる感覚は人それぞれ。けれど、やはり人種によっては多少の違いがある。

外国の血を色濃く受け継ぐバニングスのリンカーコアからかもし出される感覚は、やはり他の奴らとは微妙に違うのだ。

「高町」

人差し指を地図上の俺の家がある場所に付け、東南の方向へ指をスライドさせた。

「この家から東南の方角……この直線状に、人を匿える何かってないか？ ベタなところでいえば、廃工場とか」

「……ない、かな。この辺はあまり近づかないけど、そんなのは無かったって思う」

と、すればだ。

明らかにバニングスの気配はこのラインに感じる。海鳴から出ていなくて助かったが、バニングスを隠せる場所がないとするなら、残る可能性は。

「一般家庭、だな」

「へ？」

「たぶんだけど、アパートやマンションの空き部屋なんかを使ってるんだと思う。しらみつぶしはさすがに無理ってことで、直接このラインを動いて探す。高町、携帯電話持ってるよな？」

「うん！」

「オーケー。なら、すぐに行こう」

それほど手間はかからないはずだ。唯一つ気がかりな事はあるが、それでも、今俺はバニングスを助けたいと思っている。今まで大切にしてきた人たちと同じ気持ちは抱けないバニングスだけど、だからこそ、確かめたい。彼女を助ける事で、俺自身を、ミズキ自身を発見したい。

やはり、予感的中だ。

家を出てから二十分程、感覚を鋭敏にして東南へ走っていると、一つのアパートからバニングスの気配を感じた。いかにも安アパートだったが、まさかこんなところに人を隠しているなんて警察も思わない。結構、犯人は頭が回るのかもしれない。

「ここだ」

「うん、じゃあすぐにつ」

焦る気持ちもわかるが、俺は高町の肩に手をやってそれを押しとどめた。

「まあ待て。悪いが、行くのは俺一人だ。高町はバニングスの家に電話してくれないか？ 『アリサちゃんが窓の外から見えた』とか、適当な事を言えればいい。警察を動員してくれるだろう」

「で、でも！　じゃあミズキ君はっ」

「俺はあれだ。保険だ。犯人が『てっぽう』を持っていないとも限らない。詳しくは省略するが、無力なんだよ。魔法って、拳銃系の

武器にはさ」

管理世界で禁止されている事項に、質量兵器の禁止というものがある。

質量兵器とはその名のとおり、質量を伴った兵器。火薬や化学など魔力によらず大量破壊を生み出す兵器、つてのが公式な定理だ。一度作ってしまったスウィッチ一つで使えて、子供でも簡単に都市や世界を滅ぼせる」という点、「生物・建造物・環境を無差別に破壊する」が問題視され、管理局は質量兵器の使用を禁止したという経緯がある。

根本的に、質量兵器を相手に魔法を使った事のない魔導士は、確実に負ける。それは、通常のデバイスはデフォルトで純粹魔力攻撃設定——俗に言われる非殺傷設定とされているからだ。無論、高町や俺も例外ではない。

対象の魔力にのみダメージを与える非殺傷設定は、勘違いされがちだか防御魔法にも適応される。

つまり、例えば魔法による二次災害で鉄骨が倒れてきた。それを魔力弾を弾いてきたラウンドシールドで防ごう、なんてことは無理なのだ。意識一つで設定を変えられるが、だからこそ知らない者には致命的。高町だって無意識の内に理解しているか、はたまたレイジングハートが勝手にやっているのか。ま、どちらにせよ高町が拳銃から放たれる弾丸を受け止めることは無理だな。

拳銃とか、その手の武器を受け止めるにはある種コツがいる。一点に集中された質量兵器の貫通力は、軽く高町のデイベインバスターを凌ぐ。威力については後者が圧倒的だろうが。

「まあ、バニングスを救出する役目は、俺が背負った。なに、まだ俺は、高町より『強い』んだ。任せとけ」

自信満々に、胸を張って告げた。

実は俺にも、質量兵器を相手にした経験はない。全て伝え聞いたものだ。だけど。

高町を危険な目にあわせたいと思わなかった。バニングスとは違

う、高町はやはり、おれの大事な人の、一人なのだから。

第11話 自分では見えない自分が、本当の自分だった。(後書き)

次回、アリサ誘拐編後編をお送りします。

第12話 たったの四文字だけど、それはなぜだか美しい調べだった。

いつでも孤独だって思う。大事にしたい人たちはいるけど、彼、彼女らが自分の事を大事に思わなくなっただけで、ただこちらが思うだけで、想えるだけで十分だ。

ともだち。たったそれだけの言葉は、しらずにお互いを想いあうという約束の福音で。

『魔法少女リリカルなのは —Diamond dust—』はじまります。

第12話 たったの四文字だけど、それはなぜだか美しい調べだった。

アパートの二階にベランダは無かった。そのためか、犯人は堂々とカーテンを開け放ち、余裕綽々に椅子に腰をかけていた。形跡からして、犯人は複数。けれど、そこまで多くも無いってところか。今一人しかないのは都合だ。

肝心のバニングスといえば、部屋の中央で縛られ、口をガムテで塞がれて転がされていた。どうやら眠っているようだ。頬に伝った涙の後が、この生々しいまでの現実を裏打ちする。

こっそりと窓からのぞいていた俺はその場を離れ、地面に着地した。高町がバニングス家へ連絡したところ、五分もあれば到着するらしい。つまり、救出にかけられる時間はそれだけということ。

バニングスの身の絶対の安全を確保するためには、やはり彼女を安全な所へ避難させるしかない。なにせ、犯人はしっかりと握って

いたのだ。

誰もが使え、この世界最強の質量兵器を。

ゆっくりと足音を立てないように階段を上り、部屋の前で深呼吸。振り向いて高町と視線を交錯させた。互いに示し合わせも無いのに、同時に頷いた。

もう一度、大きく息を吸い込む。

ゆっくり、ゆっくりと息を吐いて、もう一度吸気で肺を満たす。

――よし。

そこで俺は、純粹魔力攻撃設定を解除した。

「スカイラインっ」

《シュートバレット》

ミズキ・ナカジマの十八番魔法、直射型射撃魔法『シュートバレット』

威力よりも射出までの速度と、魔法自身の加速性を重視したもののだが、魔法対策のされていない物質を破壊するには、十分な威力がある。それをドアノブめがけて打ち出し、予測通りに破壊され、開いたドアに身を滑らせた。

「な、なんだ！」

犯人は突然の事に動揺を隠せていなかった。けれど、今はそんな犯人は二の次だ。自分自身の低身長を生かして見つからぬよう、最小限の気配で駆け、バニングスへ近づいた。とはいえ、それでも気付くまでのタイムラグが若干、一秒も満たない時間が生まれる程度。俺がバニングスのもとへたどり着くとほぼ同時に、犯人は俺の存在に気が付いて拳銃の先を俺に向けて構えた。

「てめえ！」

まさかこんなガキに進入されるとは思っていなかったのか、すぐの発砲は無かった。これを好機と、発砲に備えて自身の中で魔力を溜めつつ、バニングスを開放するために小さくシュートバレットを発射して、ロープを焼ききった。

身体が自由になったことからか、バニングスはゆっくりと瞼を押

し上げた。双眸が、俺の全容をゆっくりと捉える。口元に張られたガムテを、俺は痛くないように気をつけはいだ。

「……ミズ、キ？」

「ああ、助けに――」

そこで背後からの殺気に気が付き、振り返ると同時に右腕を前に差し出した。広がるラウンドシールド。瞬間、乾いた音がこだました。

走る激痛は、右脚から。拳銃から放たれた一撃はラウンドシールドに『穴』を開け、俺の右脚に突き刺さって、貫通を止めた。

「っぐ！」

「ミズキ！」

バニングスの叫び声が耳に入ったが、それがまったく気にならない程、足が熱く燃える。初めて感じた鉄砲の痛みは、生半可なものではなかった。

とはいえ、集中を切らすには速かった。犯人は動揺していた。当たり前か。

魔法のまの字もしらなかった男の目の前で、面妖な光の壁が現れたのだ。明らかに、俺が発している事も原因だろう。

「う、うわああ！　なんだてめえ！」

乾ききった音が、何度も何度も続く。それは、未知のものを恐れ回避するための衝動的な行動で、当たり前のように狙いなど定められていない。だからこそ、さらに出力を上げ、広範囲をカバーする必要があったのだ。後ろに、バニングスがいたから。

力の限りを振り絞ったラウンドシールドは、確かな成功をもたらす。二発目以降、弾くだなんて高尚なことまでは出来なくても、勢いを殺し、虚空でその動きをとどめ、地面に落とすまでの芸当は出来た。それでも右脚から来る痛みに耐え切れず、犯人の拳銃が「カチカチ」と弾丸が残っていない事を告げると、集中力は切れ、ラウンドシールドは霧散して消えた。

初撃以外の全てが防がれた男は、刹那の間立ち尽くすと、背を向

けて逃げ出した。かくも人間とは、対抗手段を失ったと思った瞬間、離脱を心見る。たとえ背中を見せることが愚考だろうと、逃げずにはいられない生き物なのだ。

と、そこで聞こえたのはパトカーのサイレン。

「五分、たったのか……」

なんだか、緊張の糸がぷつりと切れた。

「ちよっ、ミズキ！」

右脚から崩れ落ちる俺の身体を支える力を感じたものの、意識はもたず、そのまま俺は意識を混濁させていった。

『だ、か、ら！ ミズキはなんでそう無茶ばかりするんだ！』

思わず耳元に当てていた携帯電話を遠ざけてしまった。クロノの大きすぎる怒声に、びっくりしてしまっただけだ。

「いや、ほら。結果的に犯人は逮捕。バニングス……ああ、クラスメイトの子な。も、無事。万々歳じゃねーか」

『君自身が負傷したろう！ そしてその助けた子、一般人に魔法の存在を知らせてしまった！』

「仕方なかったって。ま、バニングスは人が困る事をするようなやつじゃない。黙っててくれるって言ったら、黙っててくれるんだよ」

あの後、現場に駆けつけた警察とバニングス家のSPたちの手で、犯人はあっさりと逮捕された。勿論、出かけていた仲間も道連れに刑務所行きだ。そして右脚だけとはいえ、負傷した俺は病院に担ぎ込まれ、気が付いたらここにいた、ってわけだ。

助けてくれたお礼をと、現れたバニングスに一応の説明を施した。

無論、時空管理局とかその手の単語は抜き。ただ単に、俺が実は魔法使いであるってことだけ。バニングスは茶化すことなく（まあ目の前で展開したしな）俺の話に頷いて、黙っている事、秘密にしておくことを約束してくれた。

『仕方ないって、拳銃で撃たれたんだぞ君はっ。大体——っ、説教はまた今度だ！』

と、そこでクロノは電話口から離れた。誰か別の人が引き継ぐらしいことは、ごそごそと聞こえる物音でわかった。

ちなみに、予断だが、病院内で携帯電話を使っているのかって疑問だが、問題ない。この携帯は時空管理局及び、ミッドチルダとの連絡用で、こっちの世界では常に圏外である特殊なものなのだ。

『……うん、ごめんねクロノ。あ、ミズキ？ その、大丈夫？』

電話口に現れたのはフェイトだった。

フェイト・テストロッサ。少し前、この第97管理外世界で起きた「大きな事件」が切欠で、彼女と俺は言葉にし難い、特殊な関係を気付いていた。ま、簡素に説明すればお互いを大事に想っている程度なんだが。事実は小説より奇なり、ってな。もしかしたら、それ以外にももっと、大きな感情があるのかもしれないが、今は関係ないことだ。

「おう、フェイト。久しぶりだな」

『うん……久しぶり、ミズキ。って、そ、それより大丈夫なの？ 大怪我したってクロノが言ってたから……』

「もーまんたいだ。少しは痛むけど、重傷ってわけじゃない」

『よかった……あ、ギンガちゃんたちも心配してたよ？ 連絡、してあげてね』

「そうだな」

やはり、フェイトと話していとなんていうか、落ち着く。

ギンガやスバル、父さん母さん。クロノ、高町、すずか。

俺にとって大事な人たちはそれぞれ、皆俺に違った安らぎを与えてくれる。フェイトも、漏れずにその中の一人だ。

この手で守れる数なんて、たかが知れてる。だから俺は、守るべき人だけを、守りたい人だけを守ると決めた。それは、ミズキがミズキ・ナカジマになったその日の決意。

「……だった、はずなんだけどな」

『え?』

とと、独り言が漏れてしまっていたようだ。あぶねー。

なんでもない、と一言。フェイトは納得してくれたらしく、それから他愛の話を少しして通話を切った。

途端、訪れた静寂は、病室のドアが勢いよく開く音と共に瓦解する。

「お見舞いに着たわよ、ミズキ!」

今日もまた、元氣澁瀬なバニングスの声が、室内に響いた。

「思っただけどさ」

「うん?」

ベッドの隣に椅子を持ってきて着席したバニングスはニコニコとずっと微笑んでいた。入院してから、毎日これだ。お見舞いに来る事じたいは客かでもないし、嬉しい事なのだが、さすがに毎日毎日こられても困る。

「別に毎日顔を出す必要はないって。バニングスを助けたのは結果として警察だし、俺は別に――」

「あたしのためじゃない。自分のため――でしょ?」

「……まあ、うん」

「そういうところ、はっきりいうもんじゃないわよ?　ちょっとは隠さなきゃ」

バニングスは笑う。自分の命なんてどうでよかったと言う相手に、満面の笑みを向ける。

「……どうして、そうなんだ?　バニングスはさ、」

口に出かけた言葉は、最後まで発せられることなく消えていった。まじまじと見たバニングスの笑顔には、邪気なんてものをまったく感じなくて、醜い自分自身がとてもひどいものに感じられた。これ以上、自分のひどい部分を自分からあげていくのには、抵抗があった。

「誰だってそうじゃない？ 打算なしで動く人なんて、ほとんどいない。なにかしらの想いつてのがあって、それを目指して行動っていうのは構築されていく。ただ、その根幹となる部分は普通、ミズキみたいに正直に言ったりしないわ」

俺の返答を待たずして、バニングスは立ち上がった。習い事の時間らしい。

「でも……バニングス、俺は」

「ストップ。これから、その『バニングス』っての禁止ね。あたしにはちゃんと『アリサ』って名前があるんだから、そっちで呼んで頂戴」

相手のことを名前で呼ぶ。それは、ミズキ・ナカジマが『区別』をつけるために用いる手法。俺自身が名前で呼ぶと決めた人たちは、何があっても守りたい。そんな、軽い決意表明のようなもの。

正直、この段階にいたってもまだ、バニングスをフェイトたちのように見ることは出来ない。

元氣と生きる理由を与えてくれた家族たち。

他人のこととかく一生懸命で、不器用な優しさだけど、クロノのそんな優しさが素直に嬉しい。

自分と似た生い立ちであるからかもしれない。けれど、守りたいと無条件に想ったフェイト。

すべてを話して、すべてをただ受け止めてくれたすずか。

いつもまっすぐで、俺にはまぶしすぎる存在。高町にはきつと、これから先守られる事の方が多くなる気がする。でも、俺はそんな彼女を守る盾になりたい。

そんな皆に匹敵する何かが、バニングスにあるわけではなかった。

戸惑う俺に、ただバニングスは笑って言う。

「だって、あたしたち『友達』でしよう？」

友達。綺麗な、響きだった。

「それじゃそういうことで。——あ、それと」

ドアの前で立ち止まったバニングスは振り返って、頬を膨らませて言った。

「今度は、手抜きとかしないでね！」

こうして、ミズキ・ナカジマとアリサ・バニングス。体育の時間が発端となった喧嘩は、終了にいたったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6649w/>

魔法少女リリカルなのは -Diamond dust-

2011年12月9日06時48分発行